
smile

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

smile

【Nコード】

N8717Y

【作者名】

刃下

【あらすじ】

絵本作りに奮闘する弟と姉の話

説明と一話目（前書き）

完全にフィクションです。実在しているものとは関係ありません。

説明と一話目

教科書、手紙、離婚届、その他多くの紙媒体が電子媒体へと移行し始めたのは、まだまだごく最近のこと。某国のお偉方が頭をひねりにひねって打ち出した資源保全の政策。

その名を「ADMP (all digital media plan)」。

アルファベットを4文字並べてかつこよく見せようとしているのがバレバレだが、要するに木で作った紙に頼らずに、デジタルデータに何でもかんでも保存しちゃおうよってなところである。某国で十数年前に採択され可決。その二年後に施行されている。わが国でも追従するような格好で、近年採用が決まった。本屋や郵便局の反対もむなしく、今や多くのユーザーが日常生活で電子媒体を使用している。

とはいっても、未だに商店街を歩けばいかにも年季の入った本屋にだって遭遇するし、中には「そんなの知ったこっちゃねえ。私は紙を使うんだ」って人もいたりする。それも当然といえば当然の事だ。

絵本。

これもまた当然の如く、時代の叫りを受け電子媒体への移行をはじめめている。なんとかpadやなんとかphoneを使えば世界中の絵本をいつでも、どこでも読むことができるようになった。もちろんのこと文字は日本語に翻訳されていて、値段も紙媒体の半分以下の値段で購入することが出来る。

このようにk・・・むがつ。。。ふう。あー、その君、そう君だ。

君が子供の頃、お気に入りの絵本があったか？今でも内容を覚えているような素敵な絵本があったんじゃないか？

そのお話をだ。つるつるの四角い電話だか、パソコンだかなんだ

か分からない物を通して読むのは味気ないと思わないか？

紙本来の手触り、次のページをめくる時のわくわくが感じられないと思うだろ？

どうだ、寂しいだろ。寂しいと思った君は今すぐにYUカンパニーが出版していr・・・もがっ。

ちよつと、姉さん勝手なことしないでよ！・・・という訳でこんなご時世だろうと負けずに紙媒体で絵本を作り続けている僕らYUカンパニー。これはその絵本作りの記録である。

「大和ー、まだ着かないのかよー」

さつきまで後部座席でぐーすかと気持ち良さそうな寝息をたてていた女がいつの間にか目を覚ましていた。顔にキャラクターの描かれたタオルをかけ、両足を助手席の肩の部分にのせている。脱ぎかけの靴下、着ている服もしわくちゃ、へそは丸出し。これを女性と表記していいものか迷うぞ。

「まだだよ、うめ姉さん」

「まーだーかーよー、こーらーんーやーまーとー」

「もう少しだよ、湖蘭梅姉さん」

「次フルネームで呼んでみる。足の指を4本にしてやるからな」

姉さんは僕がバックミラーに目をやるよりも早く起き上がり、低いドスの聞いた声で僕を脅した。

「はい・・・ごめんなさい・・・」

姉さんは自分の名前が嫌いという訳ではない。自分の名前をフルネ

ームで呼ばれることが何よりも嫌いなだけだ。小学生時代、信じ難いことに姉さんがいじめられていた時期があったそうだ。クラス男子グループにご飯ウメーと呼ばれてよく泣かされていたらしい。

湖蘭 梅 ころん うめ ごはん ウメー

・・・すごいセンスだ。

「この車がポンコツで遅いからまだ着かないんだろ？はっはっはっ」

そう言っつて姉さんはポテトチップスの袋を豪快に開け、ポリポリと貪り始める。食べカスが落ちてるよ・・・ああ、そんな手で車の窓を触らないで・・・。僕の思いなんてちつとも考えない姉さんはまるで自分の部屋かのように、僕の愛車を汚しはじめる。

僕は常々思っていた。

生まれたのが早いからって何をやってもいいのか。

大枚払って買ったこの車。自動車屋さんの前を通った時にビビビっときたんだ。あれは一目惚れ、いやもしかしたらあれを運命と呼ぶのかも知れない。その運命の相手を姉さんと言えども汚すことが許されるだろうか、いや絶対に許されない。僕は戦うぞ、愛車を守るために！

・・・まあ、中古車だけどさ。

免許をとって、これが生まれて初めての大きな買い物だったんだ。

それが姉さんの『弟の物は私の物』というジャイアニズムによって汚されていく・・・。悔しい・・・けど感じちゃう。

ほどのMでもないので、普通に悔しい。

車の前後に張った若葉マークが燦然と光り輝いていた。

「山道の運転は緊張するんだから、姉さん少しは静かにしててよ」
「山はいいけど、キャストの手配はできてんだろっな？」

ははっ、会話が繋がってないだろ？姉さんは僕の発言なんて最初の
一文字しか聞いてないんだぜ。
もう慣れたさ。

「うん、ちゃんと現地集合で呼んだよ。それに木の刈れる山と桃の
流せる川のある場所には今向かってる。万事大丈夫さ。」

それでわざわざこんな糞遠い場所まで運転させられるはめになった。

「それならいいけど・・・もし何かミスがあれば・・・」

「・・・あれば・・・？」

「お前の体で支払ってもらっつからな。」

姉さんは後部座席から身を乗り出すと、僕のほっぺたを舐めながら
言った。

一話目（前書き）

全部フィクションです。全部関係ありません。

二話目

「姉さん、もう着くよ」

ポテトチップスの袋に片手を突っ込んだまま、文字通り食い倒れた状態で二度寝をかましている姉さんを僕はバックミラー越しにどうにか起こそうとする。姉さんは一瞬だけ薄目を開けた後、すぐくめんどくさそーな顔になった。んーっと怒鳴るような声を撒き散らし、それでも起きない姉さんは寝返りを打った拍子に持っていた袋の中身を座席の下にぶちまけた。

「なんてことするんだよ、そこは掃除をするのが大変な場所なんだぞ！」

「うるへーなー、声がかいぞ。手が滑っただけだろ」

「嘘つけ、わざとやったんだろ。姉さんはいつもそうだ。自分で掃除した事がないからそんなことができるんだよ。だいたい姉さんの部屋だって僕が掃除しなきゃ」

「はいはい、うるさいうるさい。わざとやったよ、私が悪かった。これでいいか？」

姉さんはぶうつとほっぺたをむくらませた。バックミラーに映る怒られた子供がシュンとなつてしまった時のような顔。こういう子供っぽいところは可愛いのかなあ。何というか、人によっては守ってあげたい衝動に駆られたりするのだろう。

故に我が姉ながら非常に残念である。なぜなら姉さんの場合、精神年齢とわがままのレベルまでもが子供と同じだと言つ事だ。一言で言えば姉さんは内面が糞ガキ以下だ。

ご存知だろうか。

歯磨き粉が携帯食にもなるんだと言う事を。

これは噂でも都市伝説でもサバイバルの知識でもない。

それはある日の出来事だった。

「うわあ・・・まじかよ・・・」

「はっはっはっ、面白いなこいつ」

弟が自分用にと買ってきたせんべいを姉が一人で食べ、弟が注いだ二つの湯飲みのお茶を姉が二つとも飲み干す。どこにでもある一家団欒の風景だ。テレビでは男のお笑い芸人が女性タレントの口紅を食べるという一芸を披露している。

「あんなものよく食べるよね、この後絶対お腹壊してると思うよ。

いくらお腹が空いても絶対真似しちゃ駄目だからね、姉さん」

「むっ、言ってくれるじゃないか・・・でもこれはこれですごい特技だと思わないか？こいつは山で遭難しても口紅があれば生きていけるんだぞ。他のやつは食べるものがなくなつて一人、また一人と死んでいく中、こいつだけは口紅を食べて生き残れるんだ。尊敬するな」

「やってることは人として最低なんだから、尊敬しちゃ駄目だよ姉さん」

そもそも食料を持たずに口紅を持って遭難する事なんてあるだろうか。すると姉さんは手に持っていたせんべいを一枚ぼりつと噛み砕くと、少し考えて呟いた。

姉さんの叫び声ではっと我に返った。いつの間にか目の前に急カーブが迫ってきていた。どうやら悲しい記憶を思い出し出しているうちにトリップしていたようだ。慌ててハンドルをきる。

「勘弁しろよなー」

大きくため息をついて姉さんは座席の背もたれに倒れこんだ。

「い、ごめん」

ここは山の中。カーブを曲がり損ねれば崖下にまっさかさまだ。姉さんが叫ばなければ、本当に遭難するところだった。危ない危ない。

「んー、まあいいけどさ。しっかり運転しろよ。・・・じゃあ姉さんはまた寝るから」

そう言っておもむろに座席をかたむける姉さん。まだ寝る気か。寝る子は育つつか。これ以上育ってもらうつと困るんだが。主に食費とか食費とか食費とか。

「ちよっと姉さん、もう着くつてば」

「んー、あー、・・・ぐう」

この野郎。

「起きて、起きてよ姉さん」

「ううーあー、ううー、梅ちゃんクイズ！パンはパンでも食べられないパンってなーんだ」

いきなりの事で驚いただろう。ごもつともごもつとも。驚かないやつはどうかしてるよ。説明するとこれは一分一秒でも長く寝ていた姉さんが編み出した作戦である。相手（主に姉さんを起こしに行く僕）にクイズを出して相手が答えるまで、寝ていられる時間を稼ごうってな作戦だ。ちなみに出題パターンは約3パターンしかないが、答えは無限大にある。本人曰く頭の中が眠っているからクイズはとっさに出てくるだけらしい。

「フライパン」

「ぶつぶ」

「パンダ」

「はずれ」

「パンツ」

「ちーがーうー」

「着いたよ」

サイドブレーキを引いて、エンジンを切った。運転席から降りると、後部座席に回って姉さんを揺り起こす。

「で、結局正解はなんだったの？」

「正解はなし。食べられないパンなんてこの世には存在しない。つまり沈黙が正解」

「沈黙してたらいつまでたっても起こせないだろ、馬鹿」

僕は寝ぼけたままの姉さんを引きずりながら山の中にぼつんと建つ古ぼけた民家へと向かった。

三話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

三話目

舗装のされていないでこぼこ道を車で登ること二時間弱、森の少し開けた場所にぽつんと一軒家が建っていた。渡されていた鍵で錠を開け、少し重たい引き戸を通って家の中に入る。中は光が差し込まず、薄暗かった。僕は窓のついたてをはずし、部屋の中に日光を入れる。

建てられてから何年の月日が経つのだろうか。土壁は所々はがれていて、いかにも昔の木造の家という感じ。建っていたというよりは忘れ去られていたという表現が似合いそうな、そんな雰囲気だ。文化財にでも指定されていそうな外見だが、一年前まではちゃんと人が住んでいたらしい。前に住んでいた老夫婦は、二人揃って老人ホームへ転居が決まり、老夫婦の息子が取り壊すのはもったいないと、管理しながらこうしてドラマの撮影会社や、僕らみたいな物好きに安く貸し出している。

「うひゃー、今にも崩れそうだな。地震に耐えられんのか？」

そういつた情緒が全く理解できない姉さんは早速土壁のはがれかけた場所をほじくり、シロアリの如く古民家の破壊を始めていた。

「姉さん、崩れたらしゃねにならないからあんまり触っちゃ駄目だよ。」

働かない姉を他所に、僕は車から荷物やら小道具やらを運び出す作業にかかった。

作業をはじめて30分ほど。ドラマの撮影で何度も使用されていたからだろうか。部屋は少しホコリが積もっている程度で、十分に綺

麗な状態だった。

「おい、大和。ポテトチップスの袋捨てたいんだけど、ゴミ箱はないのか？まあいいや、そこらへんに捨てとくか」

ちよとまさに、我が姉に汚されるまではゴミ一つ落ちていなかった。

「姉さん、ゴミはゴミ袋に入れてよ。持って帰るから」

「え、何で持って帰るんだよ。捨てて帰ればいいじゃん」

そう言つて姉さんは土壁の崩れた場所にお菓子の空き袋を詰め始めた。僕はいけない事だと思いつつもその光景をぼーっと眺めながら、どうか姉さんの馬鹿力で壁が崩れませんようにと祈るだけだった。姉さんに昔、ブロックの塀と塀の間に無理やり詰め込まれて抜けなくなつたあげくレスキュー隊を呼んだ時のトラウマが襲ってくるも、それを間一髪のところでは拭い去る。

(しょうがないから、後で僕が取り出して捨てておこう。)

「おじゃま、しますよ」

玄関の引き戸がゆっくりと開いた。

「えっと、来音さんですよ？今日からよろしくお願いします」

僕は戸の向こうに立っていた老人二人に頭を下げる。

「こちらこそ、おねがい、いたします」

おばあさんはそう言って深々と頭を下げ、おじいさんもつられて頭を下げた。

「じいちゃんばあちゃん、今日はよろしくな」

大手を振り上げて姉さんが挨拶をしたところで、またも戸の向こうに来訪者が現れた。

「自分、岩雄です！今日はよろしくおねあいしやす！」

この静かな土地とはミスマッチなほど声の大きい青年が帽子を脱いでお辞儀をした。見たところ僕と年齢は同じくらいかな、だが身長は僕なんかより随分と大きい。

（岩雄くんか・・・主人公役の人だったかな？）

「あの、お兄さんのお名前教えてもらってもいいですか！」

岩雄くんは体が大きく、ただでさえ声が大きいため、僕は一瞬ぎよつとしてしまった。

「僕ね、僕は湖蘭大和。後でもう一度しっかり紹介するけど、今は名前だけ。あっちは梅さんで、こちらが来音さん夫妻」

「みなさん、今日はよろしくおなしやす！」

とても元気のいい青年だ。スポーツマンって感じで爽やか。こちらまで元気になってくる。

しかしなぜか姉さんの顔が曇っていた。

「おい、猿。こつちこい」

うお、なんて直球な。

岩雄くんは何事もなかったように、はいと気持ちのいい返事をして嬉しそうに姉さんに近づく。

岩雄くんの顔はこう言っただけなんだが、主人公の顔って感じとは違う気がする。なんていうか、そう。姉さんの言葉を借りれば顔が猿っぽいのだ。

いや、もう・・・これは猿だ。

こればかりは派遣した会社の選択なので、来てしまった今どうこう言ってもしょうがないのだが、履歴書の顔とあまりに違いすぎてだいたい行く先が不安になってくる。

「・・・」

姉さんは猿に、いや岩雄くんに耳打ちする。猿くん、いや岩雄もその後、姉さんに耳打ちした。

「あー・・・あつはつは。分かった分かった。そういうことなら大丈夫だ。あつはつはつは」

姉さんは何かに納得すると大笑いしながら部屋の外に出て行った。いったい何だったんだろう。

そうこうしている間に、時計の針はもうすぐ正午を刺そうとしていた。日が暮れないうちに撮れるところまで撮りたいので、とりあえず来音さん夫妻と打ち合わせを始める事にした。

二人と、ある程度話したところで、姉さんが大きな袋を抱えて戻ってきた。袋から宝物を取り出すかのように大袈裟にカメラを取り出す。

「それでは諸君、撮影に入ろうじゃないか！」

姉さんの眼はキラキラと輝いていた。

ここで一つ、伝えておかなければいけないことがある。

と言うのも、僕ら姉妹はそろって絵が下手なのだ。

不器用ずぼらな姉さんはもちろん、僕だって人に見せられるほどの絵は描けない。

ならどうするか？

姉さんの頭脳が考えに考えて出した答えがこれだ。

実写でいいじゃん？

逆転の発想でも何でもない。これが僕らに出来る最良の選択。

だから絵本なのに絵は一切使わない。

姉さんは革新的だと思っっているらしいが、説明のところでは紙本来の手触りだとか、ページをめくる時のわくわくだとか御託を並べていた人と同一人物の考えだからね。

・・・まあ、僕は姉さんがそう決めたなら従うだけなだけでさ。

四話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

四話目

「まずは、おじいさんが柴刈りをしているシーンを撮りますね。おばあさんと岩雄くんは休んでいてください」

僕は二人に声をかけると、すでに衣装に着替えて立派な童話のおじいさんとなった来音のおじいさんと姉さんを連れて、民家の裏手にある森の中へと進んでいく。数分歩くだけで細い木のたくさんはえた雑木林にたどり着いた。

ちなみに姉さんは写真の勉強をしている訳でもなければ、撮るテクニクだって人並み以下だ。特別、撮るといふ行為に思い入れがあるわけでもない。その姉さんがなぜカメラマンという重要な役職に就いているのか。姉曰く、一万円そこそこしたこのカメラを私ではなく大和が使うなんて絶対に許さないと。

そしてこれも姉曰く、大和が5000円以上の物を所持する際は姉に許可をとること。

お分かりだろうか。

僕は常に、重度の過保護に見せかけた姉の呪縛というものを背負って生きているのだ。あの愛車（中古）だって姉さんが便利に使うために許可が下りただけだ。その前の携帯ゲームだって姉さんに買った次の日に奪われるし、通販で買ったエアインマックスだって・・・おっと話を戻そう。

まあ、姉さんも自分から言い出したもんだから一応カメラの使い方を必死になって覚えたみたいだし、カメラのメンテナンスをやらされるくらいのことだったら僕は特に文句はない。

姉さんは三脚を立てる場所を探し始めた。手持ち無沙汰になった僕は、衣装のおかげですっかり背景に馴染んだおじいさんに話しかけた。

「ずっと来音のおじいさん、って呼ぶのもなんか変ですよ。失礼でなければお名前でも呼んでもいいですか？」

「……」

返事はなかった。

いきなり馴れ馴れしかったかなと少し後悔し始めたとき、

「……ええぞ」

とおじいさんは小さく低い声で返事をした。

「ありがとうございます、電太さん。僕のことには大和って呼んでください」

「分かったわい」

またも唸るような低い声が返ってくる。

「おーい、セッティング終わったぞー」

姉さんが三脚をたて終え、大きく手を振って呼んでいる。

「それでは電太さん。木を切っているところを写真に撮るんで、この斧を持って振りかぶってもらっていいですか」

僕は持ってきた小道具の斧を電太さんに手渡した。

「この斧は偽物なんで本当に切れることはありません。ですから、木の幹に振り下ろしたところで止めてください。そこを写真で撮ります」

「……」

（返事がないけど、分かったのかな。まあこんなおじいさんだけで役者さんだし大丈夫かな。）

「じゃあ撮るぞー、じいちゃん」

姉さんは腰をかがめてカメラに目をやった。説明中、終始無言だった電太さんは勇ましく斧を振りかぶった。

「では撮ります、3・2・1」

そうだ、忘れていた。姉さんがカメラマンなら僕の役職は何なのか。僕は助監督だ。といっても助けるはずの監督はいない。なぜなら撮るシーン、お話、設定。大切な事はすべてカメラマンの姉さんがすべて決めてしまうからだ。だから僕は助監督といっても仕事はカメラマンから押し付けられる雑用ばかり。

あとは撮る前の打ち合わせと撮るタイミングの秒読みくらいなものだ。

スパン！

今までに聞いたことのない音が耳に届いた。次の瞬間、目の前の木が支えをなくしゆっくりと傾き始め、最後には倒れてしまった。

「すげーな、じいちゃん！」

感嘆の声をあげる姉さん。

「これでええんかの」

電太さんは手に持っていたレプリカの斧を僕に手渡す。

「いや、オツケーオツケー！最高の写真が撮れたよ、じいちゃん。もう最高！」

ハイテンションの姉さんがカメラを三脚からはずしながら、電太さんを褒めちぎっていた。僕は慌てて渡された斧を注意深く調べてみる。しかし何度調べても斧は偽物。木が切れるはずがない。

次は倒れた木を調べてみた。日本刀の居合いで斬られたきゆうりのように、真っ二つになっている。

「大和くんや、わしはもう帰ってええかの」

「あ、はい。次の出番まで部屋で休んでいてください」

カメラと三脚を持って器用にスキップをする姉さん。

僕は何かしゃくせんとしないうまま民家へ戻った。

「次は来音のおばあさん、お願いします」

「はい、はい」

「大和くんよ、わしは少し寝とるけどええかの？」

「ええ、大丈夫ですよ。電太さん。」

「あらら、おじいさん、いつ監督さんと、仲良くなったのかしら。

ずるいは、おじいさん、ばかり。私も大和ちゃん、って呼んで、いかしら？私のことは、明宮亜ちゃんと、呼んでくださいな」

「あ、はい……。えっと」

流石に女性を名前で、しかもちゃん付けで呼ぶのは恥ずかしいな。

「明宮亜さんでいいですか？」

「そうね、でもやっぱり、明宮亜ちゃんの方がいいわ」

あくまでちゃんにこだわるのか。

「それならおばあちゃんでは駄目でしょうか？」

「おばあちゃん・・・、そうね、大和ちゃんが、それでいいなら、いいわよ」

僕の手をとりながら、微笑み返すおばあちゃん。

「ばあちゃん、大和。もう行くぞ！」

待ちきれずに飛び出した姉さんを追って近くの川へと向かった。

「おい、本当にこの川か？」

「うん・・・」

「ものつすごい流れ早いぞ」

「僕もそう思うよ」

「こんな川に流したらあつという間に流れてくぞぞ？」

「うん・・・そうだね」

川は昨日、一昨日と降った雨で増水していた。川幅は広がり、流れ

は想像していたのよりもっと早い。

「もうどんぶらこって感じじゃないもんな。ちょっとしたウォータースライダーだぞこれ」

「まずいかもね・・・」

遠くはるばる自作して持ってきたお手製の大きな桃（偽）。耐水性にする関係でだいぶ重たくなってしまった。この川ではおばあさんの洗濯シーン、流れてくる桃、おばあさんがその桃を拾うところを写真におさめようとしていた訳だが、色々と問題が浮き上がってきた。

運動の勢いとは、これすなわち重さ×速さ。桃が重ければ重いほど流れる速度が早ければ早いほど、桃を止める時には力が必要になる。僕と姉さんは二人で川べりに一人たたずむおばあちゃんに目をやった。川原の石に足をとられ足どりはおぼつかず、腕も少し力を加えれば折れてしまいそうなほど細い。下手をすれば交通事故と同じくらしいの衝撃がああのを襲うことだろう。

「やめたほうがいいんじゃないか。私は殺人犯の姉にはなりたくないぞ」

聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。桃を流して捕まるなんて僕だっつていやだぞ。

姉さんは一応カメラのセッティングはしたものの、なかなか判断を下す事が出来ないでいた。二人の苦々しい顔を見てか、おばあちゃんが近づいてきた。

「ささ、やりましょう」

「えっと、大丈夫ですかね？」

「大丈夫よ、大和ちゃん。私こう見えても力持ちなのよ。家事は毎

「日やってるからね」

そういつておばあちゃんは上品に笑った。

「だって姉さん。やってみようか」

「分かった。ばあちゃん頑張れよ！」

姉さんは応援の言葉を送り、カメラのレンズを覗いた。

「じゃあまずは洗濯してるところを写真にとりますね」

「はい、はい」

笑顔でおばあちゃんが洗濯のシーンに使う小道具を取りに行く。

「おい、大和」

カメラを覗いた姉さんが小声で話しかける。

「川すげー濁ってんぞ。洗濯っていつかこれ」

先ほども言ったとおり、連日降った雨で水の中は1m先の視界もなほほどに濁っていた。

「土砂崩れの映像とかこんな色だよな、ははっ」

と皮肉たっぷり笑う姉さん。

「姉さんの作った味噌汁もこんな感じだよ。さ、撮っちゃおう」

もうどうでもよくなってきた。

(うわあ、白かった布が一瞬でまっ茶色だよ)
洗濯しているところを撮り終え、僕は急いで小道具の桃を持って上流へ駆け上がった。

「じゃあ、流すよー！」

大声で姉さんとおばあちゃんに合図して桃を流す。桃はまるで流しそつめんを見ているかのような速さで川を駆け下りていった。しかし何の偶然か、奇跡か。うまいこと桃はおばあちゃんの方へと寄りながら流れていくではないか。おばあちゃんは桃を逃すまいとジャストタイミングでがっちりと掴んだ。溜まりに溜まった運動量がおばあちゃんに衝撃となって伝わる。おばあちゃんは少し仰け反ったが、何とか衝撃に耐え踏ん張っている。しかし残念な事にその程度では桃の勢いは止まらなかった。少しずつ桃に押され、おばあちゃんが動き始める。

危ないと思った時には遅かった。何故か掴んだまま全く手を離そうとしないおばあちゃんは小道具の桃に飛び乗るような格好で桃と共に川の流れに乗ってしまったではないか。そのまま下流へともものすごい速さで下り始める。

「おー、ばあちゃんすげーな」

「姉さん、何見てんの！追って追って！」

姉さんの懸命の走りによりなんとか川の本流に合流する前におばあちゃんを助け出すことが出来た。姉さんのカメラには悲しそうな顔

で桃に乗ったまま川を下っていく来音のおばあちゃんの姿が写っていたという。

五話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

五話目

軽い山登りを終え、戻ってきた姉さんは疲れきっていた。あたりまえだ。

背中にはおばあちゃんを背負い、手には川の水を吸った特大の桃モドキを持って、川べりを鮭の如く上ってきたらどんな馬鹿でも疲れないはずがない。

「ごめんなさいね、重かったでしょう？」

おばあちゃんは顔にタオルをのせ仰向けに倒れこんでいる、一見すれば死体の様な姉さんを団扇であおぎながら申し訳なさそうに謝った。

「いや、・・・ばあちゃんはさほど重くなかったけど・・・この桃いったい何が入ってるんだよ・・・」

息を切らしながら、姉さんは手元にあつた桃を軽く叩いた。パカッという安っぽい音と共に桃が半分に割れる。そして中からおぎゃあおぎゃあと赤ちゃんが泣きながら現れた。と言っても、もちろんこれは偽者。ただの人形だ。声はラジカセを埋め込んで流している。こういう小道具作りも姉さんからの言い渡される雑用に含まれている。写真なんだから音の機能はつけても意味がないんだけど、とりあえず雰囲気作りとしてつけてみた。おかげで桃の大きさと合わせてだいぶ重たくなってしまった。

「うおっ。なんだこれ、かっこいいじゃん！すげー高性能！」

姉さんは人形の片腕を掴み、ぶらぶらと揺らしながら、すごいすい

いと喜んでいる。

「姉さん、壊れちゃうから優しくあつかってよ。姉さんはそういう小さいものすぐ壊しちゃうんだから」

ただでさえ大雑把で不器用な姉さんは、遠慮やら手加減を知らないもんだから、人の物を勝手に触っては壊す癖がある。あの側らにあるカメラがなぜ今まで壊されず、原型を留めたままでいられたのか。答えはたぶんあのカメラが姉さんの所有物だったからだろう。つまり姉さんは自分の物となると繊細にもなるし手加減も出来るのだ。しかしそれが他人の物となると、やってはいけないということをつ端からやっってしまうような悪魔的な姉さんになってしまう。ちなみに奪われた僕の携帯ゲーム機は、奪われた次の日にタッチペンが画面に刺さった状態でゴミ箱に捨てられていた。

「さあ、姉さん。いつまでも人形で遊んでないで次の写真撮るよ」

「おう、そうだな。えっと次は次は・・・」

「おじいさんとおばあさんが桃を割るところだよ」

「ん、分かった。じゃあじいちゃんとおばあちゃん、準備してくれ」

姉さんは三脚を使わず、カメラをしつかりと手に持って構えた。僕は人形を桃の中へ戻すと、二つに割れたレプリカの桃を接合部分に注意してくつつける。そして小道具の中からおもちの包丁を探し出し、それを電太さんに渡した。

「電太さんはこの包丁を上から桃に近づけてください。そこで一枚

撮ります。その後こちらで桃を開けますので、出てきた赤ちゃんを抱き上げてもう一枚撮りますね。ここまで大丈夫ですか？」

「ああ、分かったわい」

「おばあちゃんはそれを後ろで見ている、そのつど表情をつけてください」

「はい、はい、分かりましたよ」

「それでは一枚目撮ります、3・2・1」

シャッター音と一緒にフラッシュが光った。撮れていなかった時のために立て続けにもう一枚姉さんはシャッターをおろした。

「大丈夫かな、姉さん」

「おう、ばつちしだ。次行くぞ」

「じゃあ少し待っててくださいね」

僕は桃を軽く上から叩いた。しかし桃はうんともすんとも言わず、ぴくりとも動かない。あれ、おかしいな・・・もう一度叩いてみる。その後何度か叩いてみたが桃は一切反応しなかった。

「おい、大和ーまだかよー」

「ちよつと待って姉さん、桃が開かなくなっちゃったんだよ」

「さっきはちゃんと開いてたろー」

「う、うん、そうなんだけど・・・」

接合部分がうまくかみ合っていなかったのかな。

「まーだーかー」

「ちよつと待ってよ、姉さん」

「これを割ればええんか？」

たまらずに口をはさんだのは電太さんだった。

「ええ、ちよっと開かなくなってしまつて」

「大和くんや、少しどいとれ」

そういつて左手で僕を桃から遠ざける。電太さんは手に持っていたおもちゃの包丁を両手で握りなおし、桃に対して一直線に振り下ろした。

スパン

この音を聞くのは二度目だ。一度目は山で目の前の木が倒れる寸前に聞いた。ずずずつと言う音とともに桃がゆつくりと真つ二つに割れる。まさにぱっかりという感じで桃が開いた。

「おお、やつぱじいちゃんすげー！」

姉さんはカメラを構えながら切れた桃と電太さんの包丁を写真に写す。

「むかーし、おじいさんはね、軍隊にいた頃、シベリアの山奥で、自分の身長よりも、ずいぶんと大きな熊を、刀で切つたらしいの。周りの人からは、おじいさんに切れないものはないつて、言われていたわ。」

宮元武蔵の、生まれ変わりなんて、言われてたときも、あつたわ。」

おばあちゃんは窓から見える遠くの空を覗き込みながら、懐かしげに語つた。

「す、すじい……」

僕も思わず賞賛の言葉を送りながら、桃を覗き込んだ。しかしそこ

「すまんのう、大和くん。入っとるなんて知らんかったんじゃ」
「いいんですよ、あの場面はこっちで赤ちゃんの写真いれときます
んで」

姉さんが簡易手術といって、セロテープで止めたチャックを写真
で撮ったものの、どう見ても心靈写真なのでボツにすることにした。

「みなさん、気を取り直していきましょう。次は・・・おっと」

肝心なことを忘れていた。衣装に着替えるよう岩雄くん伝えてい
なかつた。

「姉さん、主人公の服どこいった？」

「ああ、あれな。ここだよほら」

そういつて姉さんはひときわ大きな袋の中から衣装を取り出して僕
に渡した。

「ごめん姉さん。ついでに岩雄くんにそれ渡しておいてくれない？」

衣装を姉さんに返そうとする。

「何言つてんだお前」

「何って、だからこの衣装を」

「それはお前が着るんだよ」

「え？」

何の事だか分からず、僕の思考は一瞬止まってしまった。

「主人公役のやつな、私から断つといたわ」

姉さんは口のはしを吊り上げ、いじわるそうに笑った。

「え！？どういうこと岩雄くんは来てるじゃないか。まさか帰らせたの？」

「岩雄は主人公とは違うんだよ、だいたい岩雄は主人公って顔じゃねえだろ」

それに異論はない。ごもつともな意見だが、それでは一体どういうことなんだ？

「だったら誰が主人公役をやるのさ」

「お前しかいないだろ？男で主人公役の年齢のやつなんて他にどこにいる？」

あまりのことになかなか頭が回転してくれない。ようやく飲み込めたのは何故か自分が主人公役で写真を撮られる状況にあるということくらい。

「僕？無理だよ。無理無理」

「私は車の中で言ったよな？もし何かミスがあればお前の体で払ってもらうって。払ってもらおうじゃないか。まさに今！」

啞然とした。この人は一体何を言っているんだ。

「まあ、そういうことだから早く着替えるよ。私はお前がその服を着ているところを見たいんだ」

また悪そうな微笑を浮かべ、姉さんは指で四角をつくり、そこから僕のことを覗いた。姉さんの見たいとは、すなわちやれ。こうなる
と逆らう事は出来ないのだ。

「大変な事になったなあ、だいたいよく考えたらこれって僕のミスでも何でもないじゃないか」

ぶつくさと文句を言いながら、とりあえず衣装に着替える。

ピロリロリ

聞き覚えのあるメロディがどこからか聞こえてきた。

(壁の中・・・?)

なおも流れ続けるメロディに耳を傾ける。あれ、これって僕の携帯の着信音じゃないか?でも、何で!?

「そうだ、大和。大和の携帯電話、壁に詰めちゃった。何だか楽しくなって」

「何でそんな事したの!?えっと、ここだっけ。姉さんがゴミを詰めてたのは・・・取り出しづらいなあ、もう。んー、よし取れた!もしもし?」

耳元からは何度か聞いたことのある声。

「あ、はい。そうですか、分かりました。お願いします」

「大和、何の電話だ?」

「あれがもうすぐ届くって」

「ああ、ちょうどいいな。それならちゃっちゃんと撮ってしまっか」

姉さんは民家の前に走って三脚を立てにいき、カメラを向ける。

「電太さんとおばあちゃんは玄関の前に立って、手を振って送り出す感じをお願いします」

「はい、はい、分かりましたよ大和ちゃん」

最後に僕はきびだんごと書かれた袋を腰に下げ、カメラの前に立った。

「……」

「おい、大和。秒読み」

「僕がやるの!？」

「あたりまえだろ。お前以外誰がやるんだよ」

(自分でやるって恥ずかしい……)

「ぐ……分かったよもう……。それじゃあいくよ、3・2・1・

」

六話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

六話目

「はい、では今日中にお電話いただければ回収に伺いますので。ええ、ここですね。はい」

「はい、よろしくお願いします。ありがとうございました・・・」

ブロロロ

木の生い茂った深い緑の世界に不快な黒の排気ガスを巻き上げながら、トラックは大小二つのゲージを残し去っていった。小さい方のゲージからはトラックから降ろした当初からゲージをつつく音や、独特の鳴き声がひっきりなしに聞こえてくる。対照的に、大きいほうのゲージは本当に中身が入っているのかと心配になるほど物音一つ立てなかった。

「お、届いた！届いた！」

一旦カメラを置いてきた姉さんが、元旦にお年玉袋の中身を確認する子供のような顔で小さい方のゲージを覗き込んだ。しかし表情は一転する。

「おい大和、何だこれ」

「鳥・・・だよね」

「鳥って言ったって、こいつは全然違うだろ」

流石の姉さんも言葉を詰まらせたが、ゆっくりと口を開いた。

「こいつはどう見たってニワトリだろ」

「そうだね。真正正銘、何処に出しても恥ずかしくない程のニワトリだね」

姉さんはニワトリと僕、交互に視線を送りながら、どんな表情を
しているのか悩んでいるようだった。

「姉さん、怒る前に聞いて欲しいんだ。今時、キジなんておいそれ
と借りられないんだって。それでさ、僕も困っちゃって業者の人に
聞いたんだよ。鳥なら他に何がレンタルできますかって。そうした
らさ、ペンギンかニワトリだって言うじゃないか。だったらニワト
リの方がまだそれっぽいじゃない？」

「いや、だけど。もうニワトリかペンギンの二択なら私はペンギン
の方がよかったよ」

「ペンギンは料金が高いからどっち道、無理だったんだよねーはは
はー」

僕はたまらず空笑いを浮かべる。姉さんは顔を引きつらせながら大
きい方のゲージを覗いた。

「お、こっちはちゃんとした犬じゃないか・・・ちよつとでかいな
あ」

姉さんは僕が手に持っていた業者からの資料をひったくるように奪
い取った。

「えっと、なになに。グレートピレニーズ。名前はスモールか。ど
こがだよ、すげえでかいぞ」

確かに。何を思っけてスモールと名づけたのか気になるな。

「じゃあ私はこいつら見てるから。それ、岩雄に渡してこいよ」

「うん・・・いつてくるよ」

僕は業者から渡されていた箱を持って岩雄さんの待つ民家へと入っていった。

岩雄さんは休憩時間も、熱心に自分の台本を読んでいた。台本といつても台詞があるわけでもなく、自分の撮影されるシーンが大まかに書かれた程度の物である。

「岩雄さん、届いたよ」

僕はハムスターがひまわりの種を食べる時みたいに体を丸くして台本を読んでいる岩雄さんに、業者から預かった荷物を手渡した。

「あ、はいっす。あり（がとうござ）ざいます！」

今まで溜めていた力を解放するかのように、全身全霊で返事をする岩雄さん。

「岩雄さんさ……こうして聞くのは失礼かもしれないけど……大丈夫？」

何を言われているのかさっぱり分からない様子の岩雄さんが首をかしげた。猿っぽい岩雄さんの顔がまさに猿になってしまう。

「えっと……大丈夫、ですか？何がですか？」

「岩雄さん、猿として登録されているよ」

どうして今日この場所に岩雄くんがいるのか。それは主人公役として派遣されたからではない。彼は猿役として、今日この時間に、ここにいるのだ。

岩雄くんはなんだそのことか、と疑問がなくなりさっぱりとした顔で答える。

「そうっすね、でもこのバイト給料がたくさん貰えるんすよ！」

岩雄くんがそう言って親指と中指と薬指をくっつけ、指でキツネを作った。

（たぶん、お金を表現したかったんだろうなあ）

確かに人間の言葉を理解する猿はどこにいったって重宝されるだろう。世界には人間が滅んで、猿が王国を作ってしまう内容の映画もある。だったら彼は千年に一人の逸材ではないか！
・・・いやいや。その前に彼は人間じゃないか。熱くなつていてなんだが、人間の言葉を理解するのは当たり前だし。

「まあ、岩雄がいいんならそれでいいじゃないか」

いつの間にかやって来た姉さんが岩雄くんの持っていた箱から茶色い全身タイツを取り出す。

「でもさ、姉さん」

「うるせえ。こいつにも事情があるんだろ。いいからさっさと着替えるよ」

姉さんは全身タイツを岩雄に渡すと手をひらひらと振りながら表に出て行った。

「おい、こいつはどついつことだ」

とりあえず撮る前にお供になるはずの三匹？（二匹＋一人）を並べてみる。

「猿が一番それっぽいじゃないか」

興奮状態でゲージから出せないニワトリは論外。種類は同じ犬だが、真っ白で大きく、やる気がないのかベロを出したまま寝転がって動かない。

「はい、ありがとうございます！いや、ウッキー！」

結果的にカメラマンにお礼の言えるこの全身タイトの猿が一番近づいてしまったのだ。

「おし、いいぞ猿。おい、大和、取ってきたか？」

「う、うん」

僕はさっきクーラーボックスから取り出したばかりのお団子を腰の袋に詰めた。

「まずはそのうるさいニワトリからいくぞ」

「元気のあるうちに片付けときたいもんね・・・」

いまだにゲージの中で大暴れしているニワトリ。誰が寝ているわけ

でもないのに鳴きやむことはない。

「大和くんや、少し静かにさせてくれんか。うるさくて昼寝もできやせん」

民家の方から電太さんの声が聞こえてきた。
寝てたか、おじいちゃん。

「姉さん、どうやって写真撮ろうか」

「お前が抱えとくしかないんじゃないか？」

「やっぱりそうかー・・・」

正直に言えば怖い。ニワトリがじゃない。暴れているニワトリがだ。僕は緑色の服を着た人が冒険する伝説のゲームで、暴れているニワトリがどんな敵よりも恐ろしいという事を知っている。彼らは何匹も何匹も現れて僕のハートを奪っていくんだ。恐る恐る近づくと僕を見て、ニワトリはより一層暴れ始めた。

「無理だよ、姉さん」

泣き言をこぼす僕を見かねて、姉さんが近づいていく。

「ほーら、ほらほらほら」

おもむろにニワトリの前でトンボを捕まえる時のように指をくると回す姉さん。すると先ほどまであんなにうるさかったニワトリが嘘のように静かになってしまった。

姉さんは豪快に笑いながら、

「はははっ、こいつ馬鹿だ！」

と勝ち誇っていた。
なるほど、馬鹿はこうすれば静かになるのか。覚えておいて、今度姉さんに使おう。

僕は静かになったニワトリを抱え、カメラの前に立った。そして腰の巾着から団子を一つ取り出す。途端、さっきまで死んだように静かだったニワトリが息を吹き返し、また暴れ始める。

「姉さん、助けて！」

ニワトリが腕の中で暴れてそこらじゅうに羽が飛び散る。

「もうそのまま撮るぞ！3・2・1」

カシャカシャと何枚もシャッターを切っていく姉さん。

「よし、いいぞ。もういれる！」

僕はゲージの中にニワトリを投げ込んだ。

「大和、すでに鬼と一戦交えたような格好になってんぞ。あっはっは」

ニワトリの爪で自作の服はところどころ破れ、汗だくになった僕を笑う姉さん。

「よし、このままの流れでパンパンと撮っちゃおうぞ」

鬼か、この人は。

リードもつけていないのに逃げ出すそぶりすら見せないスモール。

「おい、お前やる気あんのか？」

姉さんが軽く頭をはたいてもスモールのあごが地面から離れることはない。

「おい、スモウ、スモウ、おい立てスモウ」

すでに名前を忘れた姉さんによって改名させられたスモール改めスモウ。でかいし、そっちの方が似合ってる気もしくもない。

「ヨガツヨガツ！」

「それは別人だよ、姉さん……」

僕はさつき出したニワトリの団子をスモールの鼻に近づけた。クンクンと入念においを嗅ぐスモール。
いきなりピクンと跳ねると、立ち上がりお座りをしたのだ。

「お、現金なやつだ」

「姉さん、犬って団子食べていいのかな？」

犬にネギやチヨコをあげてはいけないとよく聞く。団子はどんなのだろうか。

「んー、よく知らないけど喉につまりそうだしなあ」

そう言いながらも姉さんは団子をスモールの口元まで持つてくる。
パクッ

スモールは一口で団子を啜えようと僕たちの手の届かないところまで移動し、口から吐き出した。そして吐き出した団子を何回かに分けて少しずつたいらげている。

「お、食べた。大丈夫なんじゃん？」

姉さんは巾着袋に残っていた2つの団子を取り、スモールのところへ持つていく。

「おい、このまま撮るぞ。来い」

そういつて三脚を移動させてカメラのセッティングを始めた。おいしそくに、少しずつ少しずつ食べるスモール。

「おい、秒読み」

「あ、うん。3・2・1」

カシャ

実に満足そうなスモールがそこには写っていた。

「つてことで団子はなくなっただけど・・・」
「いいっすよ！」

その後、岩雄くんと笑顔のツーショット写真を撮り、ここに打倒

鬼パーティーが完成しましたとき。

七話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

七話目

空がまたたく間にオレンジ色に染まっていく。日は沈みかけ、森の中がかすかにざわつき始める。昼頃からはじめた撮影も、そろそろ時間切れのようだ。

初日のノルマだった動物を仲間にする場面までは撮影できたので、まあ合格点といったところだ。あとは場所を変え明日いよいよ、鬼の住む島で決戦というシーンを撮ることになっている。この場面は、お話の中で一番の盛り上がりのあるシーンで、大事なシーンだ。だからこそ場所選びにもこだわって、わざわざボートを借りて無人島まで行くようセッティングしてある。

「それなら断つといたぞ。」

姉さんはその一言で僕のこだわりを一瞬にして葬り去った。

「何すんだよ、姉さん！明日の鬼の住む島の撮影はどうするのさ！」

「大丈夫だ、明日は撮影しな〜い」

「へ？」

姉さんは不敵な笑みを浮かべ、僕のかばんから勝手に拝借してきたスケジュール帳を開いた。

「私たちが今日泊まるはずの旅館。あの旅館の予約をいれたのは誰だったかな？」

「えつと・・・姉さんだよ」

僕と姉さんが宿泊場所の候補を決めていた時のことを思い出してみる。露天風呂がないと嫌だとかマッサージがないと嫌だとか姉さん

が駄々をこねたので、旅館の事はすべて姉さんに任せたんだった。後日、日付を決めた後に予約までしてくれたって言うから安心してたんだけど、まさか……。

「あれは真つ赤な嘘だ！今日、私たちが予約している旅館なんて世界に一軒も存在しない！」

姉さんは握りこぶしを突き上げながら高らかに叫んだ。

「馬鹿、姉さんの馬鹿！なんてことしてくれたんだよ！」

「馬？何を言っているんだ大和。まあ、そう焦るな。私に秘策があるんだ」

しまった、姉さんがまた僕の言葉は最初の一字しか聞こえないモードに入ってしまったている。

「一応聞くよ、秘策って何さ」

姉さんは待つてましたと言わんばかりに上機嫌な顔になり、

「……今日、一日で撮り終えてしまえばいいんだよ」

至極当然な事を言った。

言い終えた姉さんは腕を広げ、聞こえてくるはずのない賞賛の声と拍手を待ち続ける。

「それで？」

「……それでって何だ？」

「鬼の撮影はどうすんのさ」

「ん、そのことか。それも大丈夫だ、ここまで私の計算通りに来て

いるから」

姉さんはちらつと自分の腕にはめている腕時計に目を落とす。

「じゃあ、私は少し準備があるから」

そういつて話を勝手に終わらせ姉さんは一人で車の方に歩いて行ってしまった。僕は自由奔放な姉さんが車の中に消えた後も、思考をめぐらせ続ける。

最悪今日は、この民家に一泊だな。でもこの家はあくまで撮影のためのセットであって、人が泊まれるようにはなっていない。毛布や布団ぐらいはあるかもしれないけど、暖房なんてものは一切なく、隙間風だつて容赦なく入ってくる。山の朝は寒そうだなあ、なんて考えていると部屋の中にいたはずのおばあちゃんが外に出てきていた。側に電太さんの姿はない。恐らくまだ中で寝ているのだろう。

「どうしたん、だい？」

おばあちゃんはしわくちやの手で僕の両手を包み込みながら、声をかけた。

「いや、姉さんがめっちゃくちゃして困ってるんですよ」

「へえ、そうかい」

おっほつほと笑うおばあちゃん。

「それはね、大和ちゃんが、それほどお姉さんのことを、心配しているってことなのよ。喧嘩するほど仲がよい、ともいうでしょ？」

「喧嘩ってほどのことでもないんですけどね。おばあちゃんと電太さんほど仲良くはないですよ」

「あら、そんなことないわよ？実は私たち、そんなに仲良くないのよ。家の中でも、あまりお話、しないの。夫婦を演じてる、って感じかしらね。」

意外な答えが返ってきて僕は動揺してしまった。今日だけが、はたから見ればとても仲のよい熟年夫婦だと思ったのだが、そういう訳でもなかったらしい。

「そうなんですか」

「ええ、たぶんあつちも、私のことなんて、もうなんとも思っていないと、思っわ」

僕は少し考え込み、そして口を開いた。

「……でもそれは違うと思いますよ」

「あら、そう？何故そう思うの、大和ちゃん？」

「だって何でも斬ることのできる電太さんが切っていない縁なんだから、それはすごく強い縁なんだと思いますよ」

僕は思ったことをありのままの言葉で伝えた。おばあさんにはற்றりとした表情を崩さないまま少し黙り込み、

「そうね、ありがとう大和ちゃん」

手をしっかりと握って、同じように微笑んだ。

森の中に二つの光が灯った。光はどんどん近づき、それが車のヘッドライトだと分かったのは車体のすべてがお目見えした時だった。それほどに森は暗闇に包まれていた。

車の扉が開き、男が五人降りてくる。五人とも見るからに屈強で、黒スーツにサングラスという格好。まさかこんな山奥でそのスジの人に会うと思っていなかった僕は混乱して言葉が出てこない。足が小刻みに振るえ、冷や汗がにじみでる。

その時、五人の先頭にいた男が口を開いた。

「監督さんはどこにいらっしやいますか」

その声からは敵意というか、相手を脅かそうという意思は感じられなかった。僕はごくりとツバを飲み込み、乾ききった喉を潤すとなんとかひねり出す様に口から言葉を発した。

「えっと、監督ですか？」

「はい」

この辺りに工事現場はないし、サッカーの練習場だつてない。監督というやはり僕たちの撮影に関係のある監督のことなのだろう。

「とりあえず僕がそうなりますけど」

と言っても助監督だけだ。

「ああ、あなたがそうでしたか。これは失礼」

そういつてサングラスをはずし、気さくに握手を求めてくる。

「いやーお若くて気がつかずご無礼を。私こういつもので」

そういつてスーツの胸元から名刺をとり出した。

「あー・・・なるほど。そうでしたか」

真っ黒に塗られた名刺の右上に白文字で悪役事務所と書いてあった。この事務所は怖そうな人を専門に派遣しているところで、この業界ではよく知られている。こわもての人が多く在籍していて、最近ではスタントにも力をいれているらしい。今回この事務所には鬼役の人材を頼んでいた。

「すみません。少し待っていてもらっていいですか」

僕は姉さん呼びに車に駆け寄った。真っ暗で中はよく見えないが、中で何かかもぞもぞと動いている。

「姉さん、鬼役の人達が到着したよ」

そういつて車のドアに手をかけるが、中から鍵がかかっていて開かない。窓のところをこんこんとノックする。

「開けんな大和、ちよつと待つてろ、殺すぞ！」

中からドスの利いた声が返ってくる。僕は驚いて真後ろに飛びのき、尻餅ついてしまった。

「おい、今の声って・・・」

「すごい迫力だったな」

「監督にあんな態度をとれるなんて、車の中の人物は何者だ？」

「もしかして本当にそっち系の人が・・・？」

「監督が姉さんって言ってたしな」

「俺たち見かけはこんなだけど本物はやばいよな」

「とりあえず逆らわないほうが良さそうだな」

悪役事務所の人達が口々にあらぬことを言っている。

鍵の開く音がして、姉さんが悠然と登場した。

「姉さん、こちらの皆さんが鬼役の方々です」

「おうおう、諸君。今日はしっかりと頼むぞ」

さっきの演説ごっこがいまいち抜けていない姉さんが大物風を気取った挨拶をする。

（間違いない、彼女はソツチ系の人だ）

鬼役の方々はお互いに目で合図をして確認をとりあうと、

「あねさん、今日はよろしくおねがいます！」

大きな声で挨拶をした。

「おお、元気じゃねえか。こちらこそよろしくな」

いつの間にか姉さんは鬼たちの心を完全に掴んでいた。

「つつこむのが遅くなったけど、その格好なんなの」

「何ってなんだよ」

姉さんは小道具の中にあつた金棒を持ち上げ、背中の手の届かない場所をかいている。

「その衣装のことだよ。競艇？」

「何言つてんだよ。この格好見れば分かるだろ。今から私は鬼だ」

全身黒タイツで、トラ柄のパンツをはき、頭には鬼の角のついた力チューシャをしている。

「やっぱり姉さんの本当の姿は鬼だったんだ！」

昔からこんな残酷な人が人間のはずないと思つてたんだ。あと何回変身を残しているんだろう。

「違うわ、馬鹿。それよりよく見ろ、どこからどう見たって完璧な鬼じゃないか？我ながら惚れ惚れする鬼っぷりだ」

鏡を振り回しながら色んな角度から自分を映す姉さん。

まあね、あなたの配下の鬼たちに比べれば姉さんはずっと鬼らしい鬼だよ。つい先ほど到着した姉さんの配下である鬼を演じるはずの悪役事務所の人達はサングラスにスーツ姿。鬼らしいところといえば、姉さんが画用紙とテープで作った鬼の角を頭につけているところぐらいなものだ。悪役事務所に連絡するところまではできた姉さんも、鬼役の衣装が外部発注だつてことまで頭が回らず、このような奇怪な鬼たちを作りあげてしまった。

「あねさん、お茶をどうぞ」

「おっ」

いつの間にかボスらしい立ち回りも身についた姉さんが、配下の鬼から受け取ったお茶をすすつと喉に流し込む。

「それよりもう外真つ暗だよ。こんな暗さじゃフラッシュをたいたつて無駄でしょ、撮影どうすんのさ」

「暗いなら家の中で撮るしかないだろ」

「え？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。確かに家の中なら持ち込んだ照明機材で、撮影できる明るさくらいにはなるかもしれない。でも、

「鬼が家の中にいるの？」

そんな馬鹿な。

「鬼の方から攻め込んできたってことにすればいいだろ」

なんてご都合主義。

姉さんの頭の中のストーリーでは、鬼が一市民による鬼退治の計画を嗅ぎつけ、わざわざ敵の本陣まで出向いたとも言っただろうか。なんて情報戦に長けた鬼なんだ。

「そんな簡単に改変していいの？」

「しょうがねえじゃん。外暗くて取れないんだし」

姉さんはまったく悪びれるそぶりもない。

「姉さんが鬼役として出るんだったら、誰がカメラ撮るのさ。僕も無理だよ？」

だって主人公だし。姉さん率いる鬼たちを実家で迎え撃たなきゃいけないし。

「タイマーで連写撮影だ、それでいこう」

姉さんはほんと胸の前で手を叩き、さっさとカメラをいじりはじめる。

本当に適当だなあ。

「じゃあちよつと準備するから待ってる」

意気揚々とカメラのセッティングを開始した姉さんだったが、連写機能とタイマー機能、いきなり二つを相手することになりだいぶてこずっているようだ。

「大和さん、大和さん」

ぼーっとしていた僕に岩雄くんが突然話しかけてきた。

「やばくないですか、梅さんの格好」

岩雄くんは悪戦苦闘する姉さんを見ながら頬を赤らめている。

「何が？」

「ほら見てくださいよ。胸とかぴったりくっついて。梅さんってすごい巨乳じゃないですか。」

そう言われてもう一度姉さんの方を見る。ああ、確かに。姉さんは性格は悪いがスタイルは弟の僕から見てもいいと思う。出るところ出

てるし。さらに、全身タイツだから体のラインがくつきりできてしまっている。確かにあれは反則的だ。

「岩雄くんは巨乳が好きなの？」

「巨乳がいいですねー。僕はよく海外に行くんですけど、梅さんの外国人並にでかいですよ」

岩雄くんは嬉しそうに語った。

「そういえば大和さん。大和さんはずっと梅さんのことを姉さんと呼んでいますが、もしかして大和さんと梅さんって姉妹なんですか？」

「ああ、そういえばちゃんと紹介するって言ってまだしてなかったね。まあ一応姉妹だよ。性格も何もかも違うけどね」

「え！やっぱりそうだったんですか？うわー、大和さんのお姉さんなのに失礼なことを言ってしまったなー」

岩雄くんは独り言のように自分のミスを責めはじめた。自分の姉をそういう目で見られるとだいぶ引く。しかし僕の中で猿として登録されていた岩雄くんはすでにこれ以上離れることの出来ない距離まで離れているのでこれ以上引く事はない。

「失礼ついでに言いますが、全然似てないですね」

全然失礼じゃないぞ岩雄くん。その通り全く似てないんだ。僕は似てはいけないんだ。

「おっし、テストいくぞー」

岩雄くんと喋ってる間にセッティングを終えた姉さんが声を上げた。

「えつと確か大和さんの苗字が湖蘭だから・・・湖蘭梅さんかー」
「あつ」

まずいと思ったときには手遅れだった。その辺の説明を全くして
なかった。

「おい、猿なんか言ったか」

顔を伏せた姉さんが岩雄くんに少しずつ近づいていく。

「あ、えつと。大和さんと姉妹ならフルネームは湖蘭梅さんなんだ
なーと。」

この辺で岩雄くんも空気がおかしくなったことに気がついた。
しかし遅すぎた。

まあ、でかい声で二回も言ったら聞き間違いでは、すまないわな。

「だれがご飯ウメーだあああああああああ」

逆上して鬼神とかした姉さんは岩雄くんを間髪いれずに殴り飛ばし
た。

「あり（がとう）ございまあああああああああす」

岩雄くんはまるで重力が横を向いたのではないかと思うくらい軽々
と吹き飛び壁にはりついた。

「姉さんやめて!」

壁が、土壁が崩れる！弁償できないよ！
壁にぶつかつてもなお、重力に逆らいながら浮き続けていた岩雄くんがとうとう、ずるずると壁伝いに床に落ちた。一目で分かる。意識はない。

「お前もだ大和ー」

姉さんは気を失っている相手は襲わない。なぜならそれ以上やれば相手が死ぬからだ。

しかし当然この程度では怒りの収まらない姉さん。その怒りの矛先は僕に向いた。

「僕は何も言っていないじゃないか！」

「モウマンターイ！」

そこは問答無用だよ、姉さん。とつつこんでいる暇はなさそうだ。

「ほーらほーら姉さん」

僕は先ほど知った馬鹿を止める方法を実践する。トンボを捕まえる時のように指を姉さんの眼の前でぐるぐると回す。
当然それを見た姉さんは、

「なんのつもりだおらあああああああ」

そりゃそうだよね。

僕もあえ無く、ボコボコにされました。

その後の写真には対決する前から立っているのがやっとなほどの怪我を負った主人公と意識なく壁に叩きつけられている猿。家の中に動物をいれる訳にもいかなかったので犬とニワトリの姿はない。寸前の暴力事件を見て顔蒼白になったスーツ姿の鬼を従え高笑いをかます姉さん。その光景を見てなお微笑みを忘れないおばあちゃん、我関せずと普通に眠ったままの電太さん。散々な写真ばかりだった

「姉さん、それ以上は！岩雄くんが死んじゃうよ！」

「おい、起きろ大和」

「はっ 夢か」

まさか岩雄くんが姉さんに12回体を畳まれて壁に埋められる夢を見るなんて。

「で、どうだった 今回の本の売れ行きは」

「当然いまいちだよ。それでも少しは売れてることのほうに驚きだね」

「いやー、好評だったぞ一部には」

「一部ってどこぞ」

「ひなた」

「あー、そっか。・・・ならいいか」

「ああ、オールオツケーだ」

「・・・って全然オツケーじゃないよ！来月の食費どうすんのさ！」
「心配すんな」

姉さんは大きなダンボールを二つ、ドアの向こうから持ってきた。一つ目のダンボールを開ける。中には気持ち悪い色の果物がつまっていた。

「これは猿雄から。あと三箱これがあるぞ、南国の果物だつてよ」

おいしいけど、名前が違うぞ姉さん。

「なんで岩雄くんからそんなところの果物が届いたの？」

「なんか旅すんのが趣味らしいぞ。」

なるほど。岩雄くんは今現地にいるのか。

へえ、猿顔の岩雄くんが旅ねえ。

猿岩……

「ロバ連れて旅してそうだよな」

「姉さんそれは別のコンビだよ」

もう一つの箱はなんだろう。

「じいちゃんとはあちゃんからだ。息子の会社の試供品だつてよ」

じいちゃん……ああ来音さん夫婦のことか。

「大和ちゃんにだつてよ、よかつたな」

「ああ、うん」

中を覗いてみると箱いっぱい新製品の歯磨き粉が詰まっていた。

「じいちゃんたちがくれたんだ残さずに全部食べるんだぞ」

「分かって・・・え？」

「姉さんは大和がこれ全部食べてるところ見たいぞ」

姉さんは豪快に笑った。

七話目（後書き）

1 話目おわり 2 話目おわり

2、一話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、一話目

「姉さん」

「何だよ、うわっ顔怖い。どうした大和」

「どうしたじゃないよ。何であいつがここにいるのさ」

「何でって、呼んだからに決まってるじゃん。今回の撮影は必要だろ、女の子」

「だからって姉さんは何でよりによってあいつを呼んだのさ！」

話はまず二週間前にさかのぼる。

・
・
・

僕が初めて出演した絵本が発売され二ヶ月。

町では以前よりも多くのシャッターを降ろした本屋さんを見かけるようになった。

僕はそれでも負けじと続けている数少ない書店をまわり、どうにか本を置かせてもらえるよう交渉する毎日を送っていた。

しかし現実は厳しい。

「こんなもの置く余裕はない」だとか、「絵本のくせに子供に見せられない」、「鬼の子の写真集なら置いてもいい」など、ごもつともな意見と共につき返されることがほとんどだ。

それでも根気よく交渉を続け、少しずつだが置かせてもらえる書店も見つけた。

そんな時にまた、姉さんのわがママが始まった。

「よし、次の作品を撮るぞ」

姉さんはベッド代わりに使っていたソファから飛び起き、開口一番叫んだ。

「何か言った？姉さん」

いつもの持病の発作なので僕は聞こえないふりをして軽くあしらう。

「大和、私は決めた。次の作品を撮る」

「あ、そう。姉さん頑張って」

「次の作品をとーるーぞー、やーまーとー」

姉さんを見無視し、ディスプレイを覗き込みながらキーを叩く。

「・・・」

「やーまーとー」

「・・・」

「や・ま・と、お・ね・が・い・ハート」

「駄目に決まってるだろ、姉さん」

姉さんの甘ったるい声に耐え切れなくなった僕はしょうがなく口を開いた。

「前の本を出してからまだ二ヶ月しか経ってないんだよ？新しい本を出すには少し早いよ姉さん」

「うん、でも大丈夫」

馬鹿な姉さんのために、分かりやすさを心がけて説得する僕。

しかし姉さんからは何の根拠もないくせに自信に溢れた言葉が返ってくる。

「それにこう言ったらなんだけど、前の本は鳴かず飛ばずで在庫がまだあるんだ」

僕は部屋の隅にあるダンボールから紙束を一つ取り出しながら続ける。

「今はこれを少しずつでも置いてくれる店を探した方がいいんじゃないかな」

我ながら馬鹿でも理解できる、いい説明だ。

これで流石の姉さんだって分かってくれたはず。

しかし普通の馬鹿のさらに上に行く姉さんは僕の手から自分の作った絵本を取り上げると、

「こんなもん知るかー!!」

といって本を床に叩きつけた。

「何すんのさ、姉さん。これ一応売り物なんだよ！」

「うるさい！私はこんなもの知らん。私は次を撮るんだー！」
言い出すと自分のわがままが突き通るまで、ごね続ける姉さん。

「だいたい姉さんは自分のしたいことしかしないじゃないか。スケジュールの管理だって僕にやらせるし、役者の手配や場所をおさえるのだって僕じゃないか。あげく前回はそのスケジュールだって勝手に変えちゃうし・・・」

「大和、ごちゃごちゃうるさい！」
そついつてムエタイの選手ばりの蹴りを僕のお尻に叩き込んだ姉さん。

「痛い！手をあげたな、姉さん！」

「手は上げてない！」

感情的になった姉さんに言い返しは通じない。

「悔しいなら口で言い返せばいいじゃないか、なんですぐ蹴るのさー！」

「うるさい、お前・・・口臭が爽やかなんだよ！」

「それは姉さんが歯磨き粉を食べさせたせいだろ。おかげで僕はずつと下痢だよ」

ダンボールいっぱい歯磨き粉を消費するのに、毎日一本ずつ。二ヶ月間もこの生活が続いた僕の息は朝昼晩ずつと爽やかになってしまい、代償としてお腹がゆるくなった。

「だから私が薬買ってきてやっただろ」

「いつきに一瓶飲ませようとする馬鹿に殺されかけたよ」
絶対マネしちゃ駄目だぞ。

「く・・・じゃあ私が全部用意したら撮っていいんだな!？」

「姉さんには無理だよ。あのまぬけな鬼たちの衣装を思い出してみなよ」

「こんちくしょー！」

姉さんは言葉で追い詰められると精神と言葉の年齢がぐつと下がり、攻撃も単調になる。

間髪いれず飛んでくる姉さんの手刀をひらりと避けた。

このくらいなら姉さんの攻撃でも避けられる。

しかし避けた先で机で腰を強打した。

「あで」

「やってやるー、うわああああああん」

号泣しながら姉さんは扉を開けて出て行ってしまった。

少し言い過ぎたかなと思ったが、こういう姉さんの急な思いつき自体はよくあることで、僕は特に気にはしていなかった。

だいたい姉さんの思いつきは企画倒れで実行にうつされることはま
ずない。

しかし実のところ今回の姉さんは違った。

姉さんは僕の知らないところで本当に準備をしていたのだ。

そして今日、知らぬ間に計画されていた撮影の日を迎えた。

ちなみに僕がこの撮影について、姉さんから聞いたのは早朝のこと。もちろん何もしらず寝ていた僕は、いきなり姉さんに叩き起こされ、寝ぼけている間に車に乗せられた。そして、気がついてみればこの竹やぶに連れてこられていた。

もう誘拐だろ、これ。

姉さんから台本を受け取り、中をぱらぱらと開く。

「姉さん、ちなみに僕はこのお話に出てくるの？」

「当たり前だろ。前が好評だったし、今回も出すぞ」

「一部にね」

「ああ、ひなたにな」

で、なんやかんやありながらも一人の出演者と顔合わせ。

そこでようやくこのお話の最初に戻る。

・
・
・

「何でここにかぐやがいるのさ」

「ひゃえっ!」

少女は兄弟喧嘩の途中で、自分の名前がでてきたことに驚き、ぴくんと跳ね上がった。

僕はその様子を横目で見ながら、少女を指差して姉さんを問い詰めた。

「もしかして姉さん、名前がかぐやだから呼んだの?」

「おう」

姉さんは全く表情を変えず、堂々と、当然のように言っただけだ。

「選考基準は?」

「女でかぐや」

「・・・だけ?」

「おう」

呆れた。

僕は急に激しくなった頭痛と腹痛に顔を歪める。

「お、お久しぶりです、大和くん・・・」

少女は涙目になりながらも、僕の正面に立ち挨拶をした。

紹介しよう。

彼女は僕の幼馴染の菊池かぐや。

菊池家とは親同士の仲がよかったため、子供同士でよく遊んでいた。主に姉さんが。

女同士気でもあったのか、あるいはあの姉さんと仲良くなれるほど馬鹿だったのかは知らないが、姉さんはかぐやのことを小さい頃から可愛がっていて、かぐやにとっても甘い。

僕はといえばかぐやが嫌いだった。

姉さんに蛙をパンツの中に入れられたこともない。

姉さんに鼻でガムを噛んで膨らませるまで、押入れに閉じ込められたこともない。

雷雨の中、鉄のフライパンを持たせられ、外に立たされたこともな

いかぐやが、姉さんに可愛がられているのが小さい頃の僕には納得
がでなかつた。

だから僕は姉さんに叩かれた腹いせをかぐやにしていた。
と言つても昔から腕っ節の弱かつた僕は、かぐやによく悪口を言っ
た。

しかしかぐやはほとんど喋らないし、僕が何を言つても笑つていた。
でもそんなある日、僕はかぐやを泣かした。何を言つたかは覚えて
いない。そして僕は飛んできた姉さんに川原の石を高く積むまで殴
られ続けた。

その日から僕はかぐやを避け、そして全く遊ばなくなつた。

親同士の交流もなくなり、かぐやにあつたのは中学生の時以来だ。

僕はかぐやをきつと睨み、挨拶を返さない。

「出演料もいらないうて言つてくれるんだ、文句ないだろ？お前
ら一緒に出るんだから少しは仲良くしろ」

姉さんが僕の肩を掴みながら言つた。

「・・・よろしく」

僕はかぐやの顔を見ないように挨拶を交わし、さつさと車に入って
衣装に着替えた。

2、二話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、一話目

青々と育った竹が天に向かってまっすぐと伸びる。

風が吹くと揃って左右に体を揺らす姿は何か神秘的な感じだった。

「なるほど、僕はおじいさん役か」

渋い茶色の衣装とご丁寧に白髭とかつら。

僕にあそこまで言われたのがそれほどまでに悔しかったのか、姉さんはちゃんと準備をしていた。

外に着替えのできるような場所はなかったので、しょうがなく車の中で着替える。

朝、人の安らかな睡眠を妨害してくれた姉さんにいちゃもんのもつてもつけてやるうかと思っただが、車が狭くて多少時間はかかったものの、サイズもぴったりで衣装については文句のつけようがなかった。

姉さんが着替えてできた僕を見て、満足げに笑った。

「はっはっはっ、サイズもちょうどいい感じだな。似合ってるぞ、

大和」

「僕もびっくりしたよ。姉さんやればできるじゃないか」

「いやいや、私なんかより大和の方がすごいよ。前の衣装といい何でも似合うじゃないか。ほんと何着せてもかっこいいなあ」

おじいさんの衣装が似合ってるのは、少し「ん？」と思うがこれも姉さんなりの褒め言葉なのだろう。

「どうしたんだよ、姉さん。恥かしいなあ。」

「これほど写真写りの神様に愛されている男はいないぞ。どの角度から見てもすげーイケメンだ」

そういつてカメラを覗きながら、僕の周りをくるくると歩きまわる姉さん。

「ははっ、本当にどうしたの姉さん。そんなに褒めても何もでないよ」

「えっ……」

元気だった姉さんが急に静かになった。

手足をわなわなと震わせ、視線が空中を彷徨っている。

「……姉さん、正直に言っつて。何したの」

「その衣装、後払い……。私、お金ない……。どうしよう大和」

姉さんは両手を僕の肩に起き、がちがちと歯を振るわせた。

「どうしようどうしよう、早く逃げないと大和。どこか誰にも来ないような山奥へ」

「いや、衣装の代金なら会社のお金で出すけどさ……」

「あつ、そっか」

姉さんはふうーとため息を吐き出し、安堵の表情を浮かべた。

しかし僕には安堵できない懸案が一つ。

「……姉さんもしかして僕に払わせようとしてた？」

「いや、別に」

「姉さん、嘘をついたら馬鹿になるよ」

「ぐっ……」

姉さんは馬鹿のくせに今以上に馬鹿になることを嫌っている。

「さあ、どっち？」

この後の姉さんの行動パターンは二つ。

「ごめんなさいいいいい、嘘つきばしたああああ」

と言っつて号泣しながら謝るパターンが一つ。

もう一つは、

「うるせえ、馬鹿大和おおおお」

と言っつて逆切れしながら殴りかかって事をうやむやにするパターン。果たして姉さんはどちらの行動をとるのか。

「うるせえ、（省略）
後者でした。」

一方的な暴力でなかったものになった僕の疑問を置き去りにして、姉さんと僕、ついでに何故か撮影シーンもないついでにきたかくやの三人で竹やぶの奥へと入っていく。

「おい、大和。笹だ、食ってみろよ」

姉さんは頭上に無数にある笹の葉を一枚、引きちぎって僕に渡した。

「僕はパンダじゃないんだから食べられないよ。それにどちらかと言えば僕より四六時中ゴロゴロしてる姉さんの方がパンダに近いでしょ」

「大和、お前の顔にパンダみたいなあざつくるぞ?」

「・・・ごめんなさい」

姉さんとの口喧嘩は口喧嘩から最後には脅しになるから勝てたためしかない。

「つぶ」

少し後ろを歩いていたかくやが思わず噴出した。

「・・・何笑ってたんだよ」

小さい声でぼそっと呟いた。

「あ・・・えと、ごめんなさい」

かくやは謝りながら顔を曇らせた。

「馬鹿、仲良くしろって言ったろ」

そういつて姉さんは僕の頭を軽くこずく。

「・・・」

その後、気まずい空気のまま数分歩き、少し開けた場所に出たところで姉さんが足を止めた。

「よーし、ここでいいだろう。うひゃーたっかいなー」

姉さんは一際背の高い竹の頂上を見ようと、首を傾けて空を見上げた。

「姉さん、ここではどんなシーンを撮るの?」

「ああ、えつとなー」

姉さんは背負っていたリュックサクから台本を取り出しながら、

「えっと、竹を切ってる大和と光ってる竹。それと竹の中にある赤ちゃんを見つけるシーンだな」

姉さんは台本を閉じると、またリュックから物を取り出した。

「はい、これはのこぎりと細い枝を切るよ用の鉋だ。んじゃまず大和が鉋で竹を切っていると撮るぞ」

「姉さん、これで本当に切れるの？」

持ち上げた鉋を少し振ってみる。

「おい、気をつけるよ。それ本物なんだから。本当に切る必要はない。切つてるところを撮る」

「なるほど」

そういつて僕は手に持った鉋を竹に思い切りよくつきたてた。

「よし、それで待つてる」

姉さんは急いで三脚をたて、カメラをセットした。

「おし、大和秒読み」

「うん、3・2・1」

シャッターが降り、今日一枚目の写真がデータになって映し出された。

「ん、オツケー。じゃあ次光る竹」

姉さんはまた手ごろな竹を探し始める。

「姉さん、どうやって竹を光らせるの？」

「ああ、待つてる。秘策があるんだよ」

姉さんは青いロボットがポケットから道具を取り出す時のような効果音を口で出しながら、リュックから懐中電灯を取り出した。

「テラスタメノライター」

「ライトってそういう物だよ」

姉さんのモノマネが似てないことはさておき、それをどう使う気なのだろう。

「This is in bamboo」

どうやら竹の中に懐中電灯をいれて光る竹を作り出すらしい。

ちなみに姉さんは学生時代、すこぶる英語ができなかった。

それなのに使いたがる辺り、やはり馬鹿だと言える。

「どうやって中にいれるのさ」

「I don't know」

いつもの姉さんよりもいらつとくるな。

姉さんは外人風（姉さんの勝手な想像）の悩み方として、ありもしないヒゲを指でこすりながら考えている。

「Yamato, help me」

早々に根をあげた。

いらつとしたので助けられないことにする。

「I can't help you」

ちなみに僕にも姉さんと同じ血が流れている訳で、英語は出来ない。

「助けて、かぐやー」

姉さんは僕を諦め、かぐやに泣きついた。

「えっえっ。ど、ど、どうしよう」

かぐやはおろおろと慌てふためいている。

「かぐやー、お姉ちゃんを助けてー大和がいじめるー」

ぐりぐりとかぐやの胸に顔をこすりつけ甘える姉さん。

それを見ていると、そろそろ助けてやるかという気分になった。

「姉さん、そこは竹だけ撮って後で合成しよう」

「そうだな、なんで早く言わないんだよ大和ー」

姉さんは嬉しそうに三脚をたてて、光っていない普通の竹を撮った。

「おし、オツケー。じゃあ私はもつと竹林の写真撮ってくるから大

和はこれで竹を斜めに切つといて」

そう言っつて姉さんからのこぎりを手渡される。

「気をつけて切るんだぞー、じゃ後は任せたなー」

のんきに鼻歌を歌いながら姉さんは竹やぶの奥へ消えていった。

その場に残された僕とかぐや。

かぐやは気まずそうな顔で、そわそわとして落ち着きがない。

「かぐや、切れよ」

昔のように命令口調で言ってみた。

「あ、うん。分かった」

かぐやは僕の言葉に従い、女の子の手には似合わないのこぎりを持って切り始めた。

「うんしょ、あれ・・・硬いね」

かぐやは顔を上げて微笑みかけるが、僕は表情も変えないし返事もしない。

「うんしょ、うんしょ」

何分続けても、いつこうにのこぎりの刃は前に進んでいかない。

かぐやは前髪ををかき分けながら、一生懸命に手を動かしていた。

汗の雫が一滴、かぐやの顔の輪郭をつたって地面に落ちた。

それを見ていた僕は何故だか無性にいらいらしてきた。

「代われよ」

「え？」

かぐやは驚いた顔で僕を見た。

「遅いからだ、姉さんが帰ってきたときに終わってないと写真撮れないだろ」

「あ、そうだね・・・ありがとう大和くん」

僕はのこぎりをかぐやの手から奪いきり始めた。

「・・・んで何で切れてないのさ」

帰ってきた姉さんは呆れながら僕に向かって言った。

「すっごく硬いんだよこれ」

泣き言を言うようだが本当に硬い。男の僕でも全然無理だった。

「大和くんは頑張ってくれたんだけどあのね、お姉ちゃん」

フォロローをいれようとするかぐや。

「ちよつとどいてろ」

姉さんはのこぎりではなく鉈を両手で持ち、かまえた。

「確かじいちゃんの構えはこうだったかな」

姉さんの言っじいちゃんとは電太さんのことだろう。

「はっ」

姉さんはものすごい速さで鉈を斜めに振り下ろした。すっぱりと竹が斜めに切り落とされる。

電太さんのような音は出なかったものの、見ただけでここまでできるようになるのか姉さん。

我が姉ながら恐ろしい。

姉さんは鉈を下ろし、リュックからある箱を取り出した。

その箱は何重にも紐で縛られていて、よく見ればおふだのような物が貼ってある。

「姉さんこれ何さ」

僕は箱を手にとり、よく見ようと顔に近づけた。

「おぎぎぎぎ、ぎぎ、ぎぎ、ぎぎ、ぎぎ、ぎぎあ」

びっくりして箱を投げ捨ててしまった。

「これまだ持ってたの」

「いや、使えるかなって思って」

「姉さん、これはもう燃やすなりお寺に持ってくなりしようよ。赤

ちゃんは僕が合成でいれとくからさ」

「うん、分かった。そうする」

姉さんは箱を拾って何事もなかったかのようにリュックにおさめた。

「よし、これ撮ったら次行くぞ」

手でカメラをしっかりとかまえる姉さん。

「大和、秒読み」

「3・2・1」

「あつ、今撮りながらすげー面白いジョーク思いついた」

「聞かせてもらうよ」

「今、私カメラで竹を撮ってるじゃん？これが本当の竹撮り物語っ

てね、H A H A H A」

僕は笑い続ける姉さんを置いて無言で車へと戻った。

2、三話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、三話目

車を走らせること数十分。

ちらほらと民家が見えるようになった。

道路も車が一台しか通れないような道から二車線に変わり、山を崩してつくった町のような場所に出た。

少し走ると洋風の家や、コンビニなんかも建っているのを見かけた。姉さんに教えられたルートだと、目的地はどうやらこの町の奥。

周りより少し高い丘の上へ向かっているらしい。

「よし、ここだ。止める大和」

姉さんは後部座席で前がかりになり僕に指示を出す。

止めるも何も、走っていた道は最後には一本道になり、その道もここで行き止まりだ。

よって僕たちには止まる以外の選択肢がない。

僕はブレーキを踏み、車を止めて外に出た。

「姉さん、ここなの？」

「そうだぞ、次はここで撮影する」

僕は目を丸くしながら目の前にそびえたつ建築物の全体像を必死につかもうとする。

「姉さん、これ本当に借りられたの？」

「ああ、借りられたぞ。どうだ、驚いただろう」

姉さんはえっへんと胸を張って自慢する。

「驚いたけどさ、本当に大丈夫なの？僕は嫌だよ、あとから無許可だったなんてオチは」

「なんだよ大和、素直に褒めるよ。ちゃんと許可だつてとつてあるつて」

「ならいいけどさ、よくこんな場所、姉さんが借りられたねえ」

それはまるで武家屋敷。屋根一面にびっしりと敷き詰められた多くの瓦は見ていて壮観だ。

家の前にはずっしりとかまえた門が硬く閉ざされている。

「昔の知り合いにちよつとな。よし、行くぞー皆のものー！」

姉さんはまるで將軍が隊を動かす時のような仕草で手をあげ、僕たちを先導した。

そして大きな大きな門の前に立つと、両手でゆっくりと押し始める。門はぎぎぎという地面と木がこすれるような音がするものの、微動だにしない。

それでも姉さんは押し続けるが、人が通れるほど門が開く事はない。「ぐぐぐ、すげー重いぞ、この門。どうなってるんだ」

姉さんは足を踏ん張らせながら両手で押し続けるが、いつこうに前に進まない。

姉さんの馬鹿力でも開かない門があるなんて、少し驚きだ。

「鍵はかかってないの？」

「いや、開いてるはずなんだがなあ・・・ちよつと本気で押ししてみるか」

姉さんは一度押すのをやめ、力を緩めた。

そしてその場から一、二歩下がった場所から力を込めて思いつきり押す。

門のそこかしこから木の軋むような音が聞こえた。

「あわわわわ」

ぱらぱらと落ちてきた木屑を見て、かぐやが慌てる。

僕も流石におかしいと思い、

「姉さん、もしかしてこの門は押すんじゃないの？」

「え？何んだって、そんな馬鹿な・・・」

姉さんは門の少しだけ凸凹した場所に指をひっかけ、軽くこちらに引いた。

門は簡単に開いた。

「引つ張れるように持ち手がついてるじゃないか」
やはり姉さんはそんな馬鹿だ。

なににせよ姉さんの馬鹿力で門が壊れなくてよかった。

僕たちはようやく開いた門をくぐり、屋敷の鍵をあけて玄関から部屋へあがった。

「うわあ、すごいなあ」

家の中にも、高そうな壺や掛け軸がそこら中に飾られている。

庭の木も丁寧に手入れされていて、池には綺麗なオレンジ色と白の鯉が優雅に泳いでいた。

「綺麗だなあ」

ぱくぱくと口を動かしながら静かに泳いでいる鯉をみると無性に心が落ち着く。

「こどもの日までは首位か二位くらいのところにいるのに、最後は絶対五位なんだよな・・・」

姉さんも違う意味で安らぎを求め、鯉を眺めている。

来年に期待しようよ。

「お、そうだ。餌あげなきゃ」

車の方に駆け出した姉さんは小さな袋を手に戻ってきた。

「ちよつとまった」

慌てて姉さんの動きを止める。

「なんだよ、大和」

「何を鯉にあげるつもりさ」

「ん、分かんない。うちの近くの池ですくった魚。小さいから食べるだろ」

「それたぶんブラックバスの稚魚だよ、入れたら池の中の生態系がめちゃくちゃになっちゃうよ」

姉さんは袋の中にいる黒っぽい小さな魚を覗き込んだ。

そして数秒考えた後、

「まあいいや」

の五文字で危険物を池に放流しようとする。

僕は姉さんを止めながら、子供にいい聞かせるように言った。

「将来的に鯉が食物連鎖の餌食になるからやめてあげて」

「ええい、うるさい。恋するものは誰にも負けない！つまり鯉にも敵はなし！勝利をその手で掴んでみせよ！」

「魚にはエラしかないから無理だよ、やめて姉さん」

僕は姉さんを取り押さえ、姉さんの（購入する直前まで僕のだった）おやつのせんべいを小さく砕いて池に投げてやることにした。

それにしても、広い家だ。

廊下は長く、部屋だつて何室あるのか検討もつかない。

僕はいくつものふすまを開けながら、どんどんと奥へと進んでいく。物は少ないが、どの部屋にも掃除が行き届いているようだ。

僕は一際派手なふすまをゆっくりと開いた。

そこはかぐやが衣装に着替えている部屋だった。

下着姿のかぐやをまじまじと見てしまう。

パンツに・・・うさぎの絵？

なんだそれ、かぐや＝月＝うさぎってか？

「きゃっ」

「うわっ」

僕は一瞬で我に返り、かぐやが叫ぶ前に慌ててふすまを閉める。

「ごっご、ごめんなさい大和くん。着替えるのに手間取っちゃって。

あのあの」

「馬鹿！着替えるんならごっご・・・馬鹿！」

とりあえず逆ギレした僕は、かぐやをけなしてその場を離れた。

あーびつくりした。

いまだに心臓がばくばくと脈打っている。

落ち着こうとしてもなかなか鼓膜から心臓の鼓動が離れない。

このドキドキは一体何なのか。

えーっとあれだ。かぐやが叫んで姉さんが僕を殴りに来るかと思っ
たーのドキドキだ。

決して・・・その・・・かぐやが子供の時から変化していたのでび

つくりした訳じゃない。

頭を冷やそう。

僕は来た道を戻り、廊下へと続くふすまを開いた。

「うわ！」

またびつくりした、さつきとは違う意味で。

「お久しぶりです」

「姉さん猿が家にあがってる。おばあさんの猿が挨拶に来てるよ。久しぶりだって、きつと姉さんの馬鹿友達だよ」

「落ち着け、大和。岩雄だ」

姉さんが後ろからおばあさんの格好をした猿のカツラをとってみせた。

見た事のある顔、ちょうど二ヶ月前くらいに。

ああ、そうだ。何処の猿かと思えば岩雄くんじゃないか。

「ああ、久しぶり。でも何て格好してるの？」

「はい、自分はおばあさん役らしいので」

岩雄くんは着物の帯をさすりながら、恥ずかしそうに言った。

「へ？」

いまいち状況のつかめない僕は姉さんを見る。

「姉さんが呼んだの？」

「ああ、私が呼んだぞ。岩雄のギャラは安くすむからな」

姉さんはいきなり本人の前でぶつちやけた。

僕は少し考え込み、

「あーもしかして岩雄くん、まだ猿として登録されてるんだ」

と姉さんに返す。

「人間の役者を雇うより全然安いからな、しかもこいつ果物送ってくれただろ」

何がしかものか分からないが、そういえばそんな事もあったな。

姉さんは食べ物之恩と恨みだけはしぶとく覚えている。

まあ、果物は姉さんがすべて食べて、僕は歯磨き粉しか口にしてないけど。

確かあの果物は南国の・・・どこだったかな。

よく見れば岩雄くんの肌は少しやけているようだった。

「少し焼けてるね、岩雄くん。何処の国に行ってたの？」

「はい、ある有名な民族のいる国に行ってたんですけど、もう少しで貢物として神様に捧げられるところでしたよ」

岩雄くんはまいったまいったと、頭をかきながら笑った。

「大変そうだねえ」

「でも撮影なら、いつでも呼んでください。梅さんが呼ぶならいつでもだって駆けつけますから」

岩雄くんは姉さんにウインクをしながら言った。

しかし残念、姉さんは見ていない。

そこにかぐやが着慣れぬ着物で入ってきた。

「ちゃんと着れてるかな、お姉ちゃん」

「いいんじゃないか。どうだ、猿。かぐや可愛いだろ？」

「うお！梅さんこの方誰ですか！？」

猿のテンションが急激にあがった。

「ああ、言っただけだったな。こいつかぐや。で、こっちが猿
簡単すぎる説明を両者にする姉さん。」

「かぐやさなか、可憐だ」

「えっと・・・おさるさん？」

かぐやの頭の上にクエスチョンマークがいくつも並ぶ。

「自分岩雄ツス よろしくおなしゃす」

「あ、はい。よろしく願います」

背と声の大きさに圧倒されて、少しおびえているかぐや。

その様子を見ていた僕とかぐやの目が合う。

さつきかぐやが着替えているところを偶発的に、事故で、間違えて覗いてしまったこともあり、僕はかぐやの顔を直視することができずにうつむいた。

かぐやも顔を引きつらせている。

「じゃあ全員着替えた事だし、かぐや一家の家族写真撮るぞ」

そういつて姉さんは、三人を並ばせてカメラの前に立たせる。

「おい、大和とかぐやもつと近づけ、入らないぞ。猿、お前は近づきすぎだこの馬鹿」

僕はしようがなく2歩3歩横にずれた。

「よし、撮るぞ。秒読みー」

「ん、3・2・1」

「じゃあ猿、お前はすぐ着替えて来い」

「おつす、梅さん」

岩雄くんは慌ててカツラをとりながら部屋を出て行った。

おばあさんだけ衣装変えるのかな。

「大和ちよつとこつちこい」

姉さんが手招きして僕を呼び寄せる。

「何、姉さん」

「次のシーンで男が持ってきた無理難題のお宝を出すだろ。それで何を用意すればいいのか分からなかったから色々候補を持ってきたんだ。だから大和、見て選んでくれ」

姉さんは持参した箱の中をごそごそとさぐり僕の目の前に並べ始める。

「え・・・いいけど・・・何これ」

「ああ、これな。これは5人組の女子高生バンドが出てくる映画の半券と引き換えにもらえる生フィルムだよ。んでこれが当たりフィルム」

姉さんはどうにか絵を見せようとしているが、部屋が暗くてよく見えない。

「これは駄目だよ。こんなの写真に写らないし」

「そうか？じゃあ次、プロ野球選手のサインボール」

姉さんは少し汚れて茶色くなったボールを投げてよこす。

「これ誰のサイン？」

「ええつとたしか、なごしまの息子だったかな」

「その人のボールはあんまり価値ないんじゃないかな・・・、ていうか流石に無理あるでしょ。お宝っていったらもつと古くてさ・・・」

「その言葉を聞いて、姉さんは箱の中をまた探り始める。」

「んー、あつた。すげー古い工口本」

「姉さんまじめにやって」

「んじゃこれだな」

最後に出てきたのは、星のマークが3つ入っているオレンジ色のボールだった。

「これは全部集めると竜が一つ願いを聞いてくれるっていうあれじゃないの？」

猿のような野菜っぱい人が血眼でこのボールを探し回るアニメが昔流行ったのだ。

たぶんそのアニメのおもちやだろう。

演者の中にも猿っぱい人はいるけど、あれは女の姉さんに一発でされるほど弱かった。

「まあそうだけど。なんか宝っぱいだろ、光ってるし玉だし」

「んー、そうだね。もうこれでいいんじゃない？」

「できたっす」

調度いいタイミングでふすまを開けた岩雄くんが今度は武士の格好で出てきた。

「これは？」

「こいつ一人二役。求婚する若い武士もやってもらおうと思ってる」

「いやいや、どう見たっておばあさんと同じ顔でしょ」

正確には同じ猿だろ。

「うるせえいいんだよ、誰も気がつかないって」

「おーい、かぐやーいいかー？」

先ほどよりもつとあでやかな着物に着替えたかぐや。

「よし、撮るぞ。大和、猿にあれ渡しとけよ」

「はい、岩雄くんこれ」

「なんすか、これ。あつ、覚えてますよ。懐かしいなー」

「やっぱり岩雄くんも見てた？」

「はい、僕昔から背が高かったんで、ごっこ遊びはいつも大猿の役ばかりやらされてましたよ」

ああーそれは身長とは関係ないんじゃないかな。

「大和と猿、何してんだ撮るぞー。かぐや、もっと悲しそうな顔しろー、おら猿。ボール置いて、頭下げろや大和秒読みー」

なんだかりズムで僕の名前が呼ばれている気がした。

「はいはい、3・2・1」

2、四話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、四話目

「よし、昼間の撮影は終わりー。次の撮影は暗くなってからー」
姉さんはカメラを手に今まで撮った写真の画像を見返しながら叫んだ。

「大和、腹減った。コンビニで飯買ってこい」

「ん、分かった」

「それで、何でお前までついてくるんだよ」

信号待ち、僕はバックミラーを見ながらかぐやに言葉をぶつけた。

「え、あのあの。だって・・・お姉ちゃんが・・・」

かぐやは困った表情を浮かべた。

姉さんがいらぬ気が回してかぐやをよこしたらしい。

いつもは馬鹿なくせにいらぬところだけ気を回すんだから。

別にかぐやと仲が悪かろうが撮影に支障はないだろ。

かぐやだって断ればいいものを、ちゃんと言いつけを守って車に乗り込んできやがった。

それで車で二人、遅い昼飯をコンビニに買いにいくなんてよく分からない空間を作り上げてしまった。

「・・・」

信号が青になったので車を発進させる。

少し走らせると来る途中で見かけたコンビニに到着、停車させる。

店内へ入り、携帯電話にとったメモを頼りに商品を探した。

えっと、姉さんはカレーライスか。

まあ、無難と言えば無難か。

コンビニの商品でもカレーがおいしくなかったなんてことないしな。
岩雄くんは・・・バナナ。

単純に好物なのだろうか、それとも野生的なレベルで何かを感じるのだろうか、今度聞いてみよう。

コンビニにバナナは置いていなかったの、まるごと一本のバナナが入ったパンを買うことにした。

その後、僕は自分用のおむすびを数個かごに入れ、お菓子売り場を覗く。

適当にスナック菓子を手に取るとかごいっぱいになるまでつめこんだ。

そこにサンドイッチと大きなペットボトルのお茶と紙コップを抱えたかぐやがやってくる。

「たくさんお菓子食べるんですね」

かぐやは僕の顔を伺いながら微笑む。

「全部姉さんのだよ、お菓子ないと怒るから。あー、かごに入らないから悪いけどそれ、自分で持ってレジまで持ってきて」

「あ、はい」

かぐやは商品を細い腕で抱えながら、僕の半歩後ろをついてくる。

「すいませーん」

レジに誰も立っていないかった。

しょうがなく、店の奥に声をかける。

「はいはい、なんだ坊主」

奥からおじいさんがゆっくりと出てきた。

「うちのコンビニは深夜営業してないからバイトなんて雇わんぞ」

おじいさんは僕をバイトを探しにきた学生か何かと勘違いしたのか、顔を見るなり言い放った。

田舎のコンビニは二十四時間営業じゃないのか、と驚きながらも反論する。

「お客ですよ」

僕はお菓子のいっぱい詰まったかごをレジにのせた。

「なんだ、客か。早く言えよ」

客だと分かってても態度を変えることなく、おじいさんは商品を袋につめながらレジうちを始める。

「えーっと、200万52円」

「ええっ!?!」

かぐやと全く同じタイミングで声をあげてしまった。

「絶対計算間違ってますよ。そんな買い物してませんって!」

「んーじゃあ、2000円でいいや。」

「いいんですか、そんなので。2000円は流石に超えてると思うけど」

おじいさんは「いいっていいって」と忠告を無視する。

僕は財布からお金を取り出し、置いた。

なんでつぶれてないんだこのコンビニ。

おじいさんはその2000円を何故かポケットにいれて話しかける。

「坊主たち、アベックか?」

「ええっ!?!」

今度はかぐやだけが過剰に反応した。

「そ、そんな、えつと。あの」

顔を真っ赤にしながら体をもじもじと揺らす。

「違いますよ。それにアベックって言い方はもう古いですよ」

僕はきつぱりと否定した。

「なんだ、違うんか」

おじいさんは興味を失い、すぐ帰れと言わんばかりにスプーンを適当に袋に突っ込んだ。

そして客がまだいるにも関わらず、さっさと店の奥に消えていった。

「行くぞ」

僕はまだわたわたとしているかぐやを連れて、奇妙なコンビニを出た。

「んー、うまい」

姉さんは自分のカレーライスと僕のおむすび二個をたいらげた。

そして今は腹ごなしに山とつまれたお菓子を食べている。

「あれ、かぐやさんは何処に行かれたんすか?」

器用にバナナだけを食べた後、パンの部分は姉さんが食べたのである。

れは間接キスだと言い張っていた岩雄くんがキョロキョロと周りを
見回している。

そういえばさつきから姿が見えないな。

「ああ、かぐやはさつさと飯食って着替えに行ったぞ。あいつの衣
装は時間かかるからな」

姉さんは新しいスナツクの袋に手をかけながら言った。

「いいつすよね、着物姿って」

岩雄くんが天を仰ぎながら目を輝かせた。

たぶん頭の中はよからぬ事を考えているのだろう。

「何で？」

「だって、着るの大変そうだけど、脱がせるの簡単そうじゃないで
すか！」

知り合ってから今までで一番いい笑顔を見た気がする。

「梅さんは着物、着ないんですか？」

岩雄くんは躊躇なく人の姉を毒牙にかけた。

よくあの発言の後に、そんな質問できるなど関心しながらも姉さん
を見る。

「なんだ猿、私の着物姿が見たいのか？」

姉さんはノリノリでからかい始める。

「はい！見たいっす！」

「じゃあ、今日のギヤラなしでいいか？」

「はい！いいっす！」

簡単に姉さんの口車に乗り、ただ働きの確約をする岩雄くん。

それじゃあまりにかわいそうなので助け舟を出す。

「騙されてるよ、岩雄くん」

「いや、自分見られるなら給料がなくなっただって・・・」

そこまでか、猿。

「姉さんは帯でミイラ男みたいになるのが関の山だよ」

「あんだとお？」

姉さんが立ち上がるうとしたところで、タイミングよくかぐやが入

ってきた。

僕はかぐやの姿を見ながら、思わずつばを飲み込んだ。前の二着の着物とはあきらかに違い、金色の多く使われた豪華な衣装。

きらびやかで、圧倒されるような美しさでありながらいつまでも見たいような気持ちにさせる。

僕はかぐやから目が離せなくなってしまっていた。

その様子を見た姉さんが、ニヤつきながら話しかける。

「おい、大和。かぐやはどうだ？」

「なんていうか・・・綺麗だ。髪も長くて、染めてないから真っ黒だし。本当にお姫様みたいだな・・・」

ぼーっとしていた僕は思わず本音を言ってしまった。

「おー、そうかそうか。綺麗か。」

姉さんのその言葉で現実に戻ってきた僕は慌てて、

「あれ、僕なんて言ってた!？」

と姉さんに詰め寄った。

その横でかぐやが顔を真っ赤にしながらがたがたと震えている。

目にはどんどんと涙が溜まってきて、今にもこぼれそうだ。

「大和、車の鍵は？」

姉さんが僕の肩を叩いた。

「え、ここにあるけど」

ポケットから鍵を取り出し、姉さんに見せる。

姉さんはそれを奪い取り、家の外に向かって思いっきり投げ飛ばした。

「何すんのさ!？」

僕は慌てて鍵を拾いに走る。

「よし、もう行ったぞかぐや」

「うっ・・・」

「大丈夫か？」
「お姉ちゃん、聞いた！？大和くんが綺麗だつて！！！」
「あ、ああ。聞いたよ、聞いた」
「あれ、私その時どんな顔してた？あれあれ！？」
「落ち着けよ、かぐや。ほら、お茶飲め」
「うん、ありがとうお姉ちゃん」
「ふう……」
「落ち着いたか？」
「うん」
「それにしても本当に給料なくていいのか？」
「いいよ、だつてまた大和くと会えたし」
「そうか。それくらいならお安い御用なんだがな」
「それにお姉ちゃんが大和くんとの仲を取り持ってくれるんでしょ？」
「それなんだがなあ……実はお前のライバルに止められてんだよな」
「ええ！誰それ！？大和くん彼女いたの？」
「いや、いない」
「じゃあ何なのその子！？」
「何つていうか、まあ一緒に住んでるんだけど」
「付き合つてないのにすでに同棲してるの！？いやああああああ」
「落ち着け、かぐや。いるだろ一人」
「え……もしかしてひなたちゃん？」
「そうだよ」
「あー、そっか」
「だからあんまりヒイキはできないんだよ、悪いな」
「ううん、いいよ。お姉ちゃん」
「誰ですか？ひなたちゃんって」
「なんだよ猿、いきなり入ってきて。誰つて私の娘だが？」
「娘！？いやああああああああああああ」

「姉さん何すんのさ！」

汗だくで戻ってきた僕は姉さんを怒鳴った。

「もう少しで側溝に落ちるところだったんだよ。これが無くなったから家に帰れないじゃないか」

「あーもう、うるせえうるせえ。悪かった悪かった」

「大体姉さんは、・・・どうしたの岩雄くん。動かないけど」

「知らない」

「姉さん、何かしたの？」

僕は疑いの目を向けた。

「何もしてないよ。信じてないな？分かったよ、直せばいいんだろ？」

姉さんは腰をかがめて、利き腕の右手の袖をまくると大きく広げた。

「はっ。梅さんの思いがけない告白で、一瞬気を失っていたっ」

「ラリアート！」

その日、宙で二回転して地面に倒れた岩雄くんの意識が戻ってくる事はなかった。

2、五話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、五話目

栄枯盛衰。

昼の間、空の上で幅を利かせていた太陽はゆっくりと沈んでいく。次第に辺りは暗くなっていき、丘の下の家々に明かりが灯った。一面を黒のペンキで塗りつぶされた空は、静かに漂う月を迎え入れる。

「月が綺麗だなあ、大和」

姉さんは僕を庭に連れ出した。

「そうだね、今日はちょうど満月なのかな」

僕は口をぽかんと開けて、真ん丸の月に見入ってしまった。

空気が澄んでいるせいか、ここは月だけでなく星もよく見える。

「これが正真正銘の満月だぞ。何ていったって事前に調べて、撮影を今日にしたんだからな。感謝しろよ？こうやって満月の元で撮影できるのは私のおかげなんだから」

姉さんは僕の頭をぐしゃぐしゃに撫でまわしながら自慢げに言った。なるほど、何で急に撮影したいなんて言い出したかと思ったら、そういうことか。

恐らく姉さんはテレビやネットか何かで満月の日付の情報を仕入れたんだろう。

今回、なぜ姉さんの急な思いつきが流れなかったのか。

それはきつと満月の日付が決まっていたからだ。

姉さんは日々の勉強はほとんどしなかったが、夏休みの宿題なんかは新学期までにちゃんとやっていく人だった。

あとは宿題の半分を弟に押し付けていなければ、頭もだいぶ良かったことだろう。

何にせよ、姉さんは目先のしつかりとした目標と期日があれば行動する人なのだ。

「大和、月ではウサギが餅をついてるんだぞ」

僕はビクンと体を震わせた。

姉さんが急にメルヘンチックなことを言い出したので、体が拒否反応を起こしたからではない。

僕はウサギという単語に反応してしまったのだ。

先ほど、鮮明に眼球に焼き付けた記憶。

つかぐやの下着の上でウサギが餅をつく様子を想像してしまう。いかんいかん。

意識をしっかりと持って妄想を消し、邪念を吹き飛ばす。

「餅食いたいなあ・・・」

やはり食べ物の方に流れた姉さんを見て、慌てた自分が馬鹿らしくなってくる。

「そろそろ撮影しようよ」

「ん、そうだな。よしかぐや呼んでこい」

姉さんは名残惜しそうに空を見上げながら、ゆっくりとカメラを取りに部屋へ戻っていった。

「よーし、撮るぞー」

姉さんがさつき作ったばかりの急ごしらえのメガホンを口に当てて叫ぶ。

縁側で月を眺める、かぐやと僕。

たぶんこの本で一番重要なシーンだ。

「かぐやー、表情かたーい」

姉さんはカメラを覗きながらかぐやに注意する。

先ほどから隣で見ているも思う、かぐやの表情は固い。

というか、挙動不審というか小刻みに震えているのが気になってしょうがない。

「姫が貧乏ゆすりとかやめろよな。写真には写らないけど、イメージが崩れる」

「あつ、ごっつ、ごめんね。今やめるからっ」

かぐやが顔を真っ赤にしながら謝る。

それでも正座したかぐやの足は止まらなかった。

「何、トイレ？」

「ちちちち、違うよ。あのあのあの」

わたわたと手の前で両手を左右に振るかぐや。

「かぐや、ちよつと来い」

姉さんが少し怒鳴ったような声でかぐやを呼びつけた。

「な、何？お姉ちゃん。はうっ」

かぐやは慌てて歩き出そうとして、自分の着物のすそを踏み勢いよく前にころんだ。

どんくさいやつ。

打ちつけた場所をさすりながら、ゆっくりとカメラの方へ近づいていく。

姉さんと二言三言喋った後、かぐやが戻ってきた。

やけに落ち着いた表情をしている。

体の振動も止まったようだ。

「よーし、撮るぞー。表情作れかぐやー」

パシャリ

フラッシュが光る。

そういえば今回は僕に秒読みをやらせなかったな。

「よし、オツケー。いい顔だったぞかぐや」

満足した笑みを浮かべる姉さん。

僕は立ち位置の関係で見えなかったかぐやの表情が、どうにも気になっただけじゃなかった。

「姉さん、質問」

僕は台本を眺めながら、台本の作成者である姉さんに指摘した。

「ん、何だ？私のスリーサイズなら教えないぞ」

「そんなこと聞かないよ、あの猿じゃないんだから」

「確かに、大和はあの猿じゃないしな」

言いたい放題言われている岩雄くんは、姉さんの黄金の右腕のせい

でまだ気絶している。

「次のシーンだけど、沢山の武士が出てくるじゃない？」

「ん、ああ。そうだな」

姉さんも自分用の台本をパラパラとめくりながら答える。

「どうすんの？ 武士候補の一人はあそこでのびてるけど」
主に姉さんのせいで。

それでも倒れている岩雄くんの顔がどこか安らかに見えるのは気のせいだろうか。

「ああ、それな。大丈夫だ、少し待ってろ」

姉さんは僕のポケットから携帯電話を抜き取り、どこかに電話をはじめた。

「ん、すぐ来い。場所は分かるだろ。ん、え！？ あー、まあいいや。来い」

姉さんは少ない言葉を交わし、電話を切った。

「もうすぐ来るぞ」

何やら雲行きのおかしくなるような声が聞こえたが……。

姉さんは携帯ストラップを指に通し、電話ごとぐるぐる回す。

キキーン

言って十秒もしないうちに、門の前に車が止まった。

見た事のある黒塗りの車。

これもまた見た事のある大男たちが降りてくる。

「おお、こつちだ」

姉さんは手をあげて男たちを呼び寄せた。

姉さんの姿を見つけた男たちは庭に一列に並び、

「姉御、今日もよろしくお願いします！」

と大声を張り上げた。

「おう、よろしくな」

姉さんも片手を振り上げ、その挨拶に応じた。

列の中心にいた男が近づいてくる。

「これは、監督さんじゃないですか。お久しぶりです」

「ああ、悪役事務所の方ですよね。この前はどうも・・・」
腰を低くして、頭を下げる。

男はサングラスをはずし、優しい笑顔を見せた。
「どうやらまだ愉快的な勘違いは続いているらしい。
そういえば姉さんの呼び方も変わってるな。」

「それで、今日は・・・」

「ええ、姉御から召集がかかりましてね。今日は頑張りますよー！」
男は元気いっぱい意気込みを表明した。

「そうですね、・・・ではこちらで衣装に着替えてください」

男たちは几帳面に靴を揃え、縁側から部屋の中へと入っていった。

「着替えましたかー？」

ふすまを開けて、衣装を確認しに来た僕を男たちが向かえる。

「どうでしょうか」

男たち、いや今は立派な武士たちは一列に並んで立っていた。
サングラスとスーツを脱いだ男たちは見違えるほどに爽やかだった。

「どうだー？」

そこに姉さんが何か断りをいれるでもなく入ってくる。

「おお、お前たち男前になっただじやないか」

姉さんは一人の肩を叩きながら言った。

「・・・」
「ありがとうございます、姉御」「・・・」

いちいち暑苦しい武士たちだ。

「姉さん、武士が持つ弓や刀はどこ？」

「刀はあっちにあるぞ」

「弓は？」

「・・・」

姉さんの動きが急に止まった。

黙ったまま、壁の一点を見つめている。

「監督さん、心配しないで下さい。ちゃんと持ってきてます」

男たちが一斉に着ていた衣装から何かを取り出した。

黒い物体。たぶん普通に生きていれば見る事は一生ないであろう代物。

それは紛れもなく銃だった。

「ひっ」

僕は後ずさりして、生唾を飲み込んだ。

「すみません、姉御。一般人の我々では本物が手に入りませんでした」

男たちは土下座して謝る。

「あ、え？それ偽物？」

「はい、モデルガンです」

男は持っていた銃を僕に渡した。

なるほど、確かに素材はちゃっちく、小さな丸い玉を入れるようになってる。

「でも何でこんな物を？」

「ええ、姉御から撃てる物を持参しることでしたので」

誰かさんの孫じゃなくても、体の縮んだ高校生探偵じゃなくても、簡単に謎のすべて解けた僕は姉さんに射るような眼差しを向けた。

姉さんはいまだに壁の一点を見続けていた。

「どうすんのさ、姉さん」

ここまで姉さんが立てたスケジュールと準備は僕の思っていた及第点を遥かに上回っていた。

しかしここでとうとうやらかしてしまった。

だっておかしいもの。

このお話の時代に銃なんてない。

それに男たちの衣装とどうしたって銃は合わない。

お話にならないくらいの問題が今になって露呈した撮影を、姉さんはどうやって舵取りするのかと思えば、

「うるせー、なんとかなるだろ。行くぞ！」

それだけの言葉で姉さんはきびすをかえし、男たちを引き連れて庭に出て行った。

「よし、謎の発光体が上空にあるていで行くぞ。お前たちは上に向かって銃を撃ってる武士だ、分かったか？」

「はい！」

はい、じゃないだろ。

何事もなかったかのように姉さんは撮影をはじめた。

かぐやは当然、何がどうなってるのか分からないといった表情を浮かべている。

「その後に、大勢の武士が寝てしまったシーンも連続で撮るからなおい、聞いてんのか大和」

「あゝ、聞いてるよゝ」

返事もどこか力の抜けた返事になる。

「よし、撮るぞ。大和秒読み」

「3・2・1」

空にシャッター音が響き渡る。

「次、倒れるー。・・・よし、大和秒読み」

「3・2・1」

撮り終えた後も、地面に倒れている武士たち。その手にはしっかりと拳銃が握られていた。

2、六話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、六話目

「じゃあ私は準備があるから」
そう言つて、僕が詰め寄る前に姉さんはさっさと奥の部屋へと消えていった。

僕は倒れている武士姿の男たちに声をかけ、土を払ってから部屋の中で待機してもらうことにする。

「はあ・・・」

照明機材を持ちあげる手がかじかむ。

ここにきて、だいぶ疲れを感じてきた。

僕は自分の手に息を吐きかけながら、姉さんに叩き起こされて始まった今日を振り返った。

と、言つても考える事は一つ。
かぐやとの再会だ。

一日一緒に過ごして感じたのは、かぐやはかぐやのままだったってことだ。

無口でいつもおどおどしているあの頃のかぐやと同じ。

それはつまり僕が嫌っているかぐやのままだったということ。

しかし何故だろう。

あの頃のようにこみ上げてくるような怒りはない。

多少食わず嫌いのような嫌悪感はあるものの、田んぼに落としてやりたいとか、財布の中のお札を全部硬貨にしてやりたいとか、鞆の中に魚の刺身をいれてやりたいとか、そういったことは思わなくなつた。

これは単に僕が大人になつたからなのか、それとも他に理由があるのか。

いくら考えても答えは出なかつたので、僕は池の周りの石に腰掛けながら鯉をぼーっと眺めることにした。

ぞっぞっぞっ

誰かが近づいてくる。

恐らく準備を終えた姉さんだろう。

やっぱり今回も姉さんは出演するのか、と思いつつ顔を上げた。しかし、そこに立っていたのは姉さんではなく、かぐやだった。

かぐやのきらびやかな衣装が月明かりを反射してキラキラと輝く。しかしそれ以上に美しく、存在感を發揮していたのはかぐや自身だった。

綺麗というよりは、艶めかしい。

思いつめたような顔をして、僕の数歩前の地面を見つめている。

文句の一つでも言うのかと思えば、何も言わず黙ったまま立ち尽くしている。

二人とも無言のまま一分ほどが経ち、たまらず僕の方から口を開いた。

「なんだよ」

「・・・」

返事は返ってこない。

僕はそれを確認し、石の上から腰をあげその場を立ち去ろうとする。

「あの！」

いきなりかぐやが大声を出したので、びっくりしてその場で固まってしまった。

なんだ、と思いつつも口から言葉が出て行かない。

「あの！私、緊張ししちゃって、ちゃんとしゃべえなくなっちゃうから・・・その・・・」

かぐやの体が小刻みに震える。

手を固く握り締め、ありったけの声を絞り出しているようだ。

「私は大和さんと仲良しになりたいでぶ!!!」

かぐやの叫び声が辺りに響き渡った。

かぐやは吐ききった息を取り戻すため、大きく息を吸う。

呼吸を整えると同時に、それは嗚咽に変わった。

そしてかぐやの目からは涙が零れ落ちる。

ぼろぼろと地面に落ちて、それは染みに変わった。

「お、おい。泣くなよ、僕が泣かせたみたいだろ」

僕は慌ててかぐやの側へと駆け寄った。

「みたいじゃねえよ、馬鹿」

いつの間にか姉さんがかぐやと僕の隣にいた。

「うっ・・・おねべちゃああん」

「ああ、分かった分かった。大和、ちよつとあっち行ってる。うわ、鼻水つけんな汚い！」

僕は姉さんに言われたとおり、奥の部屋へとあがった。

だいぶして姉さんだけが部屋に戻ってきた。

「もう大丈夫だ。でもかぐやが顔合わせられないって」

「ああ、うん。まあそれはいいんだけど」

僕は何とも言えない気持ちになった。

「お前まで泣きそうな顔すんなよ、ほら次撮ってさっさと終わらせるぞ」

姉さんは僕の頭を優しく撫でながら言った。

「うん。ていうか、姉さんその格好何なの？」

「やっぱり着れなかった。大和直してー」

姉さんは着物の上から、体に帯をぐるぐる巻きにつけた格好だった。

首には羽衣をつけている。

ミイラ男じゃなくて、ロープで捕まったまま首吊りをする人が正解だったか。

僕と姉さんは部屋に入り、帯をほどいてまき直した。

「あっ」

岩雄くん、寝ている場合じゃないぞ！

君が給料を捨ててまで見たがっていた光景がまさに今ここにあるんだ。

起きろ、岩雄。起きろ、猿！

・・・駄目だ、返事がない。やっぱり死体のようだ。

「じゃあ、撮ってくるからお前はここで待ってる」

姉さんは僕を置いて部屋を出た。

それはきつと僕とかぐやに対しての気遣いだろう。

その後の写真には、月からの使い（姉さん）に手を引かれる、泣きすぎてウサギのように目を真つ赤にした女の子が写っていた。

そして姉さんは、お話にこういう一文を付け加えた。

『おじいさんとおばあさんとのわかれをかなしんだひめは、なきながらつきへのぼっていきました。』

「あっはっはっ、しかし傑作だったな」

「笑いすぎだよ、姉さん」

撮影を終え、ようやく昨日めでたく発売にこぎつけた。

今回はおかしな部分があるにはあったが少なかったこと、そして何よりかぐやのビジュアルのお陰で、店頭に置いてくれる本屋さんが増えた。

と言っても、前よりは増えたというだけでそれでも数は少ない。

今回の売り上げもきつと水平線を辿ることになるだろう。

「また、一緒にかぐやと撮影できたら、嬉しいかな、って思っただけ。って何だそれ、あっはっはっは」

「まだ言ってたの姉さん。もういい加減飽きてよ」

「いや、もう最高だったよ。録画しとけばよかった。そしたらかぐやと二人でまた見れたのにな」

姉さんは腹を抱えて笑ったまま、ソファーに倒れこんだ。

「あー、ふう。全く、かぐやも大和も口下手で困るなあ」

「うるさいよ、姉さんこそ言葉より手が先に出るタイプのくせに」

「ああ？」

「何でもありません。・・・それにしても岩雄くん置いてきてよかったのかな」

「大丈夫だろ、書置きしたし。あいつ旅慣れしてるしな」

書置きつて、先に帰るその五文字しか書いてなかったあれのことか？
適当だなあ、ほんとに・・・。

「さーて次はどんなの撮ろうかなー」

「当分はやめてよね。お金無くなっちゃうよ」

「これで明後日くらいに叩き起こしたらびっくりするかな」

「・・・」

「あ、そうだ大和。お前に言わなきゃいけないことがあったんだ」

・
・
・

この三日後、とある掲示板でこんな名前のスレッドが建った。

『すげー可愛い子の載ってる絵本買ってきた！』

2、六話目（後書き）

2話目終了、3話目に続く

3、一話目(前書き)

全部フィクションです 全部関係ありません

3、一話目

「よし、今日からお前はひなただ」

「・・・」

「私は梅。で、こつちが大和。お前の・・・あー、おじさん？」

「ちよつと姉さん、おじさんはやめてよ。せめて兄さんで勘弁してくれないかな」

「お兄・・・ちゃん？」

「そうだ、こいつはお前のお兄ちゃんだ。だからいつでもこき使つていいぞ」

「はいはい、ちよつと姉さんは黙つてて。ひなたちゃん、ひなたちゃん、ひなたちゃんみたくになつちゃ駄目だよ」

「あんだとー!？」

「・・・」

「姉さん、起きてよ」

部屋のドアをノックしながら何度も呼びかける。

「・・・」

しかし部屋からの応答はない。

「入るよー、姉さん」

僕は一声かけた後、勢いよくドアを開けた。

「・・・いつ見ても汚い・・・」

姉さんの部屋は足の踏み場もないほど物が散乱している。

僕はそれらを足でどかしながら、少しずつ姉さんの寝ているベッドに近づいていった。

漫画、CD、・・・これは卒業制作？

一体いつのものだろう。

姉さんのベッドを中心に物が層を作りながら広がっている。

それはさながら、水面に水を一滴垂らした時にできる波の広がる様子に似ていた。

僕はその中から、厚めの漫画雑誌を拾い上げ、自分の頭の上にかまえた。

何層も何層も詰めあがった物の地層をどけ、姉さんの側にやっとさたどり着き声をかける。

「姉さん、いいかげん起きてよ」

「んあ、・・・んん」

案の定、簡単には起きてくれない。

「姉さん、姉さんってば」

「んあ、・・・あちよー！」

寝ぼけた姉さんは僕の頭にもものすごい速さでチョップを繰り出した。僕はその攻撃を間一髪のところまで雑誌でガードする。

「んお、なんだ！？なんだ、大和か」

枕元に無数に転がっている砕けた目覚まし時計のようにされなくてよかった。

「朝だよ、目が覚めた？」

「んー、あと50分」

せつかく体を起こしたのに、また座ったまま横に傾きベッドに倒れこんだ。

「姉さんは50分どころじゃ起きないだろ」

「じゃあ50話」

「そこまで続いている自信ないよ・・・」

姉さんは枕に顔をうずめ、本格的に二度寝の体勢に入った。

「ちよつと、寝ちゃ駄目だつてば」

「んー・・・梅ちゃんクイズ！」

おっ、久しぶりだな。

「サイはサイでも角の生えていないサイってなーんだ」

「白菜」

「ぶつぶー」

「チンゲンサイ」

「はずれー。野菜じゃない」

「天才」

「ちっがーう」

「今日はひなたと出かけるんでしょ、起きなさい」

僕は姉さんが顔をうずめていた枕を横から抜き取った。

姉さんはむくりと倒れていた体起こし、

「正解。ひなた、おはよう」

と、いつの間にかドアの前に立っていたひなたに笑って挨拶をした。

「姉さん、ちゃんと見てる？」

「見てるよ、うるせーなあ」

姉さんの寝坊のせいで完全に出遅れた。

休日と言う事もあり、朝早くから遊園地の駐車場は車で埋め尽くされている。

今は血眼で車の止まっていない駐車スペースを探しているところだ。

「あつた」

ひなたは表情を変えず、口だけがぱくぱくと動く。

「どこだ、どこだ？」

姉さんはひなたの指差した方に視線を向ける。

「おっ、本当だ。空いてるぞ大和」

「え、どこどこ」

僕もきよるきよると辺りを見ました。

「あつ、本当だ」

すでに通り過ぎた後ろの方に車の止まっていないところがある。しかし見つけた時には遅かった。

後ろからやってきた車が急いでそこに車体を滑り込ませた。

「あーあー、しっかりしろよ大和ー」

後部座席から背中に軽く蹴りが入る。

「無茶言わないですよ。こんなに車いたらバックできないんだよ」

「そこを何とかするのが男だろー。なー、ひなた」

「ん」

ひなたはうんうんと頷いた。

バックミラー越しに二人の視線を感じる。

「次はあっちが空いたぞ！」

「ん」

姉さんが後部座席から身を乗り出して指をさした。

「えっ、どこどこ？」

「うっそー。ぷぷぷ、大和騙されてやんの。いえーいひなたハイタ

ツチ」

「ハイタツチ」

もうこのコンビはほうっておこう。

入園する前からある意味でのアトラクションを体験した僕らは結局入場ゲートからかなり遠いところに車を止めた。

車を降りた僕の足元に、ひなたがちよこちよこと近づいてくる。

「ん」

ひなたは無表情のまま右手を僕に突き出した。

「そういう時は手をつないでって言わなきゃ駄目だよ。言葉にしないとも伝わらないよ」

僕の言葉を聞いて、ひなたは突き出した手をひっこめてしまう。

「うわっ、意地悪だな大和」

後ろで茶化す姉さん。

ひなたは少し考えた後、

「つないで？」

照れながらもう一度手を伸ばした。

姉さんが満足げに微笑みながら右手を少し浮かせた。

すでに左手は姉さんの右手とつながっていた。

僕は右手でひなたの頭を撫でながら、左手でしっかりと小さな手を握った。

人、人、人。

どこを見ても人だらけ。

家族連れやカップル。学生服を着た団体もいる。

入園するだけでも一苦労だったのに、これだけ人が多いと入ってからも大変そうだ。

「風船もらいに行こうぜー」

姉さんがひなたの手を引きながら、風船を持った遊園地のマスコットめがけて突進する。

「ひゃあっ、ぐふっ」

そのままのスピードで姉さんは着ぐるみとぶつかり、長い耳をしたウサギのマスコットがその場に膝から崩れ落ちた。

しかし倒れてもなお、手に持った風船は絶対に離さないプロ根性に感動すら覚える。

ウサギは倒れたまま時おりびくびくと跳ねる。

分かるぞ、ウサギよ。僕だって姉さんのタックルを生身でくらったことがある。

車に轢かれたみたいだろ？実際そうなんだよ。

猛スピードで坂を下ってきた自転車と真正面からぶつかって、相手の方を病院送りにするような人なんだよ。

たぶん姉さんは人間の皮をかぶった猛牛か何かなんだ。

そう、姉さんはバッファローウーマンだ。

僕は他人のふりをしながら、なるべく遠くでウサギを見守る。

（おっ、起き上がるか？）

ウサギは腕をがくがくと震わせながら、重たい体をゆっくりと持ち上げる。

（抗議するか？しかしその時にはお前の真っ白な毛皮は真っ赤に染まっているぞ）

ウサギはもう少しで立ち上がるというところで、あえなく倒れてしまった。

捨て身のタツクルの反動で一緒に倒れていた姉さんが立ち上がる。

「ふう、ウサギ狩り終了。風船はすべてもらっていくぞ」

すでに山賊だな、あの人は。

無情にもウサギが死守した風船をすべて奪い取り、

「いい戦いだっただぞウサギ。ほらひなた、風船だ」

と言つて、そのすべてをひなたに渡した。

ひなたは眉一つぴくりとも動かさずに黙ったまま両手にたくさんの風船の紐を握っている。

「・・・浮かないな」

「浮くわけないだる馬鹿」

思わずつつこんでしまった。

立ち止まって動向をうかがっていたギャラリーの視線が一斉に僕に向いた。

「何だとー!? ひなた軽いから浮くかもしれないだろ」

「風船おじさんなんてもう流行らないよ馬鹿。ほら、もう行」。係の人來ちやうよ」

「ちっ、人のことを馬鹿馬鹿と。覚えてろよ大和・・・」

僕はひなたと姉さんの手を取り、逃げるようにその場から立ち去った。

3、二話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

3、一話目

「おー飛んでったなー」

色とりどりの風船が青い空に吸い込まれていく。

風船はひなたの手を離れ、上へ上へと舞い上がっていった。

姉さんはその様子を見ながら、買ってきたポップコーンを口に投げ入れる。

「ちよつと・・・休ませて」

僕はベンチに座って息を整えながら汗をぬぐった。

「なんだよ、もう疲れたのか？今来たばかりじゃないか。これやるから元気出せ」

姉さんは強引に僕の渴ききつた口にポップコーンをねじこむ。

僕は抵抗することなく、ろくに噛まずに飲み込んだ。

余計にのど渴くわ。

「僕が途中からひなたを背負って走ってたの見たでしょ？」

「ん」

僕の隣に座っていたひなたが立ち上がり、頭をなでてくれた。

「まさか私の攻撃を受けて今日中に起き上がる野うさぎがいたとはね。確実にしとめたと思っただがな」

指をポキポキと鳴らしながら、なぜか嬉しそうに笑う姉さん。

まさかあの後、ウサギが起き上って追跡までしてきたなんて僕だつて驚いた。

「逃げればいいのに、迎撃してとどめをさそうとするから余計に僕が疲れたんですよ」

「私が本気で振りぬけば今度こそ確実に落とせる自信はあったぞ」
「捕まるよ、姉さん」

「何を言う。マスコットは殴られてなんぼだろ、はっはっはっ」

全治二週間。当時中学生だった姉さんが、学校の避難訓練に駆けつけた消防署のマスコットキャラクタークター、消火貴君に負わせた怪我だ。

「さてと、何に乗ろうかなー。ふっふふーん」

鼻歌を口ずさみながら、パンフレットを広げる。

「ひなたも乗れるやつにしてよ、姉さん」

「オツケーオツケー。じゃあこれだな」

姉さんは目当てのアトラクションに向けてまっすぐ歩き出した。

「これならひなただって乗れるだろ」

「ん」

姉さんの案内でたどり着いたアトラクションは言わずと知れたティ
ーカップ。

これなら身長制限もないしひなたの様な小さな子供でも大丈夫だ。
列もそんなに長くないし、順番はすぐに回ってくるだろう。

「姉さんにしては普通だなあ。てっきり姉さんの事だからマスコッ
トショーを見に行つて一匹ずつ血祭りにあげていくのかと思つたけ
ど」

「それもいいが、」

それもいいんだ。

「こつちの方が面白いだろ」

姉さんにはかっと思みを浮かべた。

「パパー、愛もう立ってるの疲れたー」

「なんだ、愛はしょうがないなあ」

少し前に並んでいたひなたと同じ年齢くらいの少女が父親に抱き上
げられた。

「あっ、あれにも乗りたいーい」

「ちよつと待ちなさい、健也」

違うアトラクションに向けて走り出す少年を慌てて止める母親。

あれくらいの頃はじつとしてしていることができないからなあ。

僕もそうだったなあ、と過去を懐かしんでみる。

しかし現在進行形でその年齢のひなたは文句一つ言わず僕らの隣に
並んでいる。

僕はひなたのつやつやな黒髪をなでた。

「何？」

「なんでもないよ」

不思議そうな顔で僕の顔を覗き込む。

「ひなた、大和の足に抱きつけ」

「ん」

姉さんの指令に忠実に遂行するひなた。

片足だけずっしりと重くなった。

「前に進んだぞ、大和。ほらきびきび歩け」

「ぐっ・・・分かったよ姉さん」

僕は足にひなたを巻きつかせたままゆっくり歩を進めた。

「だいぶ進んだな、私たちは次くらいか？」

「そうだね」

一度に乗れる人数も多く、一回の稼働時間もそう長くない。前にならんでいた列の人間はあっという間に減っていった。

「では次の方、搭乗をはじめてください。後ろの方は前にお進みくださいー」

係員が後ろの方にも聞こえるように大きな声を出した。

「行くぞ、ひなた大和」

僕はまだ誰も乗っていないカップを見つけて乗り込んだ。

「さっさと奥につめるよ」

姉さんが僕の背中を押しながら乗り込んでくる。

「んじゃ、危ないからひなたはこっちな」

「えっ」

姉さんは開いていた隣のカップに乗るようひなたに言い、ひなたもそれに従う。

「どうした？」

「えっ、ちょっと待って姉さん。何でひなたを一人で隣のカップに乗せたの？」

言い終わるのが先か後か、開始のブザー音がけたたましく鳴り、カップが回転を始める。

姉さんは僕の顔を見つめたままにたりと笑い、

「おらおらおらああああ」

カップの中央にあるハンドルを回してぐんぐんとカップの回転する速度をあげた。

「止めて止めて止めて止めて止めてー！」

「うるさい」

周りの風景が自分を中心にぐるぐるんと回り続ける。

カップの速度はなお上がり続け、これ以上速くならないところまで来たようだ。

うつ・・・口からもう色々と出そう・・・。

「不満と説教以外なら出していいぞ。わはは」

超スピードのカップを楽々乗りこなしている姉さん。

その時、一瞬だが視界の中にひなたを見つけた。

まるで一つも波がおきない湖の水面のような表情で、そこに座っている。

・・・。

周りではたくさん親子連れが笑顔を咲かせていた。

僕はなんだか悲しい気持ちになった。

「ちっ、このスピードに慣れてきたか。そうだ大和、さっきはよくも人のことを馬鹿呼ばわりしてくれたな。そんなお前に人は風船がなくても飛べるってところを見せてやる」

「え？」

姉さんはそう言って、僕の胸倉を掴んだまま立ち上がった。

その場で浮き上がった僕を襲ったのは、すごいパワーの遠心力。僕の手足はカップの外に投げ出されたまま、宙吊り状態になる。

「姉さん、死ぬ死ぬ死ぬー！」

「はっはっはっ、お前今飛んでるぞ。どうだ、空を飛ぶ気分は？」

「振舞わされてるだけだー！今すぐ降ろせー！ー！ー！」

「きゃー！」

乗っていた親子連れか、はたまた列で並んでいた人が、どこからか聞こえた叫び声で、ティーカップは緊急停止された。

「怒られちゃった」

姉さんはしゅんとしながら、ひなたに報告した。

「あんなに怒られたのは初めてだよ。怖かったよな、鳥人間」

「姉さんは怒られてもすぐに忘れてるだけだろ、この鳥頭人間」
僕はベンチに横になったまま姉さんを怒鳴りつけた。

その後、姉さんと足元のふらつく僕は揃って他の建物に連れて行かれ、係の人にこっぴどく説教をされた。

つまみ出されていないのが不思議なくらいだ。

しかし僕は怒られている最中もずっとひなたのあの顔が気になっていた。

楽しそうでもない、寂しそうでもない。

無表情で無感情。

「姉さん次からは」

「分かっているって。復讐も終わったし、次のアトラクションは三人で乗ろうな、ひなた」

「ん」

ひなたは小さくうなずいた。

「次はどこにすっかなー」

ベンチから動けない僕を尻目に、姉さんが次に乗るアトラクションを探している。

「大丈夫？」

ひなたは僕の頭の隣にちょこんと座り、頭をなでた。

「こんちあつす」

何処からか声が聞こえた。

しかし目の前には誰もいない。

「大和さん、下つすよ下」

目を少しだけ下に傾けてみると、ベンチよりも下で四つんばいで伏せている猿がいた。

「大和、ひなたの耳抑えろ」

「うん。ひなた、僕がいって言うまで目を閉じてて。」
「ん」

ひなたは固く目を閉じ、僕は起き上がってひなたの耳に両手を添えた。

「梅さんもこんちあつす」

「教育的指導！」

「ぶふあ!?!」

茶色の全身タイツを着た懐かしいスタイルの岩雄くんが姉さんの拳によって吹き飛ばされる。

「何やってるの、岩雄くん」

特に心配もせず、岩雄くんに話しかけた。

「いてて、いや、バイトをですね」

「教育的指導！」

「うお!?!」

すんでのところで岩雄くんは姉さんの左フックを避ける。

「ぬっ!?!」

「姉さんストップ。追撃したら流石に指導じゃなくて体罰になっちゃうよ。それに話が進まないから少しじっとしてて」

「あつ、あり(がとうご)ざいます、大和さん」

岩雄くんがへろへろと崩れ落ちながらお礼を言う。

「へえ、バイト中なんだ。休日なのに大変だね」

「いえ、こんなの何てことないですよ」

「もちろんその格好は・・・猿だよな?」

「はい、そうっす」

嬉しそうに自分が未だに人間になれていないことを告げる岩雄くん。まあそこは岩雄くんの以前を知っている僕らは特に驚かないんだけ

どね。

もうひとつの疑問について聞く。

「で、後ろでムチをかまえているこの人は？」

会話中も岩雄くんの後ろで常にムチをかまえたままの女性。

場違いというか、ここには絶対にはいけな性格をしている。

「よくわかんないんですけど、調教師さんらしいです」

「へえ・・・」

まあ間違っではないだろうけどその説明では不十分だな。

「お二人は知り合い？」

「いや、今日ここではじめて会いました」

なんてこった。ますます訳が分からないよ

困惑の色を隠せない僕に岩雄くんが小声で話しかける。

「それがですね、大和さん。どうやら派遣の会社が遊園地を大人の遊園地と勘違いしてたみたいなんですよ・・・」

気まずそうな顔を浮かべる岩雄くん。

なるほど、それで調教師がボンテージ姿なのか。

いやいや、なるほどと言っちゃったけどやっぱり言わせて貰うわ。なんだそれ。

「ほら、油売ってないでさっさとシヨ一の準備行くよ」

パチン

持っていたムチで叩かれる岩雄くん。

「うっ、すみません女王様」

やっぱり女王様だった。

「そこはウキーでしょ、この猿！」

パチン

「ウキー！」

振り返ることなく、寂しげな背中の中の猿が立ち去っていく。どんなシヨ一をする気なんだよ。

っていうかあんな不審者入場させてんじゃねーよ遊園地。

「もついいよ」

姿が見えなくなつたところでひなたの肩を叩いた。

ひなたはゆっくりと目を開ける。

「叩かれた？」

どきつとした。

「な、なんで？」

「ぱちんつて聞こえた」

「ひなた、そんなことよりもお腹すかない？」

「少し」

「じゃあ食べに行こう」

今日一日、絶対にあの二人にひなたを会わせないと心に誓い、僕らはレストランへと向かった。

3、三話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

3、三話目

パンフレットを頼りに、僕らは飲食店の密集するエリアにやって来た。

和食、洋食、中華。料理の種類が多いレストラン。

常に長い列の出来ているハンバーガーショップ。

お菓子類を専門としたお土産屋もある。

どの店内からも美味しそうな匂いが漂ってくる。

「確かに美味しそうだが、高いなあ」

「そうだね。だから姉さんはあんまりばくばく食べないですよ」

「へいへい」

こういうレジヤ―施設のお食事ところは料金が少し高く設定されている。

いつもの姉さんのペースで食べられては大変なので、先に釘を刺しておいた。

「ひなたは何か食べたいものあった？」

「これ」

ショーウィンドウに並ぶ一つのプレートを指差した。

定番の子供が好きそうなハンバーグやらポテトサラダやらが盛り付けられ、ご飯には外国の旗が指してある。玩具もついたべったべたなお子様ランチ。

しかし値段は大人顔負けの千百円。

流石姉さんの娘、いいとこ見てるよ。

「ぐっ……」

お財布のことを考えると多少辛いけど、自分から何が食べたいか聞いた手前駄目とも言いづらい。

「うわっ、びっくりしたー」

そのとき、隣にいた姉さんが振り向きざまに声を上げた。

僕も振り返り、同じように声を上げた。

「うわっ、何ですか」

そこに立っていたのは、入園直後に姉さんのタックルを受けたウサギのマスコットだった。

まだ諦めずに僕らのことを追いかけていたのか。

「再戦か？いいだろう、行くぞ！」

姉さんはそでをまくり戦闘態勢にはいる。

岩雄くんを沈めた右腕を使う気だ。

ウサギは慌てて首を横にぶんぶんと振った。

「落ち着いて姉さん。次に何かしたらここから連れ出されるよ」

「ちっ、しょうがない」

まくったそでを元に戻し姉さん。

「あのー、それで何の御用でしょうか？できれば言葉で言ってもらえるとありがたいんですが」

ウサギが僕たちに言いたいことなんて腐るほどあるに決まっているが分かって一応聞いてみた。

「ずずずと側によるウサギ。」

近くで見ると顔がでかいせいか迫力があって怖い！

ひなたが僕の足にしがみついた。

するとウサギは何も言わずに二枚の紙切れをよこした。

もしかして風船の請求書か！？

「えーっと、なになに。お食事券・・・園内ならどこでも使えて一品無料、飲み物はおかわり自由・・・これを僕たちにくれるんですか？」

僕は状況が飲み込めず、ウサギに尋ねた。

すると大きな耳を揺らしながら首を縦にぶんぶんとふる。

「どういうことだ。」

お金を請求される覚えはあるが、こんなものを貰う覚えはないぞ。

草食動物から獰猛な肉食動物（姉さん）への貢物か？

「とりあえず、ありがとうございます・・・」

腑に落ちないが貰えるものは貰っておこう。

感謝を言い、その場を立ち去ろうとする。
がしっ

着ぐるみのもこもこな手が僕の襟首を掴んだ。

「何ですか何ですか」

そのまま抵抗の余地なく後ろに引きずられていく。

「うわー助けて姉さん！不思議の国へ連れてかれるー！」

そこでようやく気がついた姉さんが駆け寄ってきて、

「悪いな大和、二枚しかないんだ。お前はウサギと仲良く人參でも食べてきてくれ」

僕の手からチケットを奪っていった。

「よし、入るぞひなた」

「ん」

あれ、ひなたまで僕のこと見て見ぬふりするの？

誘拐される僕を気にも留めず、姉さんたちはレストランの中へ消えていった。

人気の少ないところまで引きずられていき、最後には茂みに投げ込まれた。

ここが体育館裏でないことだけが唯一の救いだ。

後を追うように巨大なウサギが茂みに飛び込んでくる。

このまま食べられてしまうのか。

まさにこの世は弱肉強食。

いいだろう、僕は打たれ強さにだけは自信があるぞ。

どこからでもかかってこい！

僕は土下座したままウサギの出方を待った。

「あ、あのう・・・」

蚊の鳴くような声がした。

その声は紛れもなく目の前の食人ウサギから発せられたものであり、驚くべきことにそれは女の子の声だった。

「今、はずしますね」

自分の頭に手をかけるウサギ。

あれ、もしかして今すごい状況にいないか？

僕はウサギに人気のない茂みへ投げ込まれ、そのウサギは女の子。つまり僕は女の子に人気のない茂みへ投げ込まれたということだ。急に色めきだつてきたぞ。

今の襲われるは先ほどまでの襲われるとじゃ意味が全然違ってくる。

僕は心躍らせながら、素顔が見えるのを待った。

「……」

「こつ、こんにちは大和くん」

「やり直し」

大きなウサギのかぶりものを僕はかぶせ直した。

「えええっ!?!」

慌ててもう一度かぶりものをとるかぐや。

「何だよ、かぐやかよ……」

「ええ!?!私です……えっと……ごめんなさい」

「別に謝らなくてもいいけどさ」

サンバの曲で気持ちよく踊っていた心が急に阿波踊りの曲になってきよとんとしているような気分だ。

「あのー、つかぬ事を聞きますけど私正体バレてましたか？」

「ばれちゃいないけど、正直がっかりだな。アンパンのピンチにかけたのが天井だったくらい」

「うっ、がっかりなんてひどいです……」

とは言っても姉さんの蹴りをくらっても立ち上がるようなたくましい骨格の女性が出てこれても困るけど。

「ここでバイトしてるの？」

「はい……」

かぐやはうな垂れながら返事をした。

「へー、あつもしかして姉さんがタツクルしたのって」

「私です……痛かったです……」

とうとうかぐやは泣き出してしまった。

めんどくさい……。

とりあえず褒めて機嫌をとってみるか。

「普通、姉さんのタツクルをまともに食らったら痛いじゃ済まないよ。すごいじゃないか、中になんか仕掛けでもあるのか？」

そう言いながら僕はウサギのかぶりものを自分の頭にかぶせた。

(特に何も無いな。ていうか熱い)

「あのあの、わたわた、私たくさん走ったので汗を……かかかいかちやっただかもしれなくて」

「ああ、悪い。すぐはずすよ……よつと」

「あのあの……くつくつ、臭くなかったですか？」

恐る恐る聞いてくるかぐや。

「いや、別に」

特には嫌なおいはしなかった。

「そ、そそそそそそですか!？」

かぐやはほつとため息をついた後、ぎこちない笑顔を見せた。

おお、褒めたら元気になったか。

「そうだ、大和くんって昼食まだですよね」

「そうだけど」

「よかつたら、私と一緒に食べませんか？」

「いやだよ」

かぐやの顔が一瞬で絶望に染まる。

「え……何ですか……私とじゃ嫌ですか……」

うるつると瞳に涙のダムができあがった。

「お前今バイト中だろ。僕のせいでクビになったとか言われたら困るし」

「……へっ?あ、いや、今休憩ちゅ」

「飯ぐらいだったら今度うちに食べにくれればいいから、今はバイトに専念しろよ」

「え……大和くんの人に……はい!お仕事頑張ってきます!」
かぐやは颯爽とウサギの生首をかぶりスキップで園内へ消えていっ

た。

そういえばかぐやは一体何がしたかったんだ。
毒でも盛る気だったのか？

姉さんたちの入ったレストランに戻ってきた。

「いらつしやいませー、お一人様ですか？」

「いえ、連れが来てるはずなんですけど・・・小さい女の子連れの
女性がいませんか？」

ウェイターは困った顔で

「ええつと、そういった方は沢山いるので・・・」

と店内を見回した。

そりゃそうか。

「ああ、すみません・・・この人なんですけど」

僕は携帯電話に入っていた鬼の格好した姉さんの画像を見せた。

「ああ、この方でしたら奥の座敷ですよ。ご案内します」

「ぐーがー」

姉さんは座敷に寝転がりすごいいびきをかいて寝ていた。

その向かい側ではひなたがゆっくりとアイスを食べている途中。

「姉さんお酒飲んでた？」

「飲んでた」

顔はこつちに向けずにアイスをほお張りながら答える。

「そつか・・・」

何やってんだこの人はひなたをほったらかして。

「でもさっきまで起きてた」

びくんと姉さんの体が跳ねる。

「・・・姉さんもしかして起きてる？」

返事はない。

「ん」

ひなたは前もって書かれていたメモを僕に見せた。

『ひなたと大和、二人でラブラブデート!!』

・・・なんだこれ。

「えっと、二人でアトラクションを回ってくればいいの？
いびきをかきながらこくこくとうなずく姉さん。」

「やっぱり起きてるじゃないかよ。」

「また姉さんの道楽か。」

「はあ・・・しょうがない、じゃあ行こうか」

「ちょうどアイスを食べ終わってたひなたの手をとった。」

「ん」

3、四話目（前書き）

全部フィクションです 全ツ部関係ありません

3、四話目

「どのアトラクションにしようかなあ」

パンフレットを眺めながら、ひなたのこぢんまりした手を引く。

姉さんだったら絶叫系のアトラクションに乗せておけばいいんだけど、あの手の乗り物は身長制限があるからな。

それに小さな女の子は絶叫マシンとか乗りたがらないよな。

僕は立ち止まって、自分の顔がひなたの顔の高さと同じになるように腰を折った。

「ひなたは何か乗りたいものある？」

僕はパンフレットの色々なアトラクションが載っているページを開いて見せる。

「ん」

細い指がさした先にでかかど書いてある文字、バンジージャンプ。
「・・・これはすごく怖いと思うよ、大丈夫？」

「大丈夫」

親指を突きたてて、構わないとアピールしてくる。

確かにひなたなら、いつもやってますからみたいいな顔でそのまま飛び降りそうだけど・・・。

「あ、でも残念。これは年齢制限があるよ。ひなたの歳じゃ乗れないな」

僕は記載されていた注意事項を伝えた。

「下」

「ん？なになに・・・年齢に満たないお子様は、大人と一緒に乗るタンDEMなら乗れま・・・す？」

「お兄ちゃん大人」

ひなたのきらきらと輝いた目が僕に向けられる。

うつ・・・このパンフレットを書いた人はなんて一文を添えてくれたんだ。

乗れないなら乗れないでいいじゃないか。

なぜこんな抜け道を作った！

なぜ大人を巻き込んだ！

「お兄ちゃん？」

僕は別に高いのが怖い訳じゃない。

垂直落下式のアトラクションだって一言返事で乗ってやるぞ。

高さに速さの加わったジェットコースターでもいいぞ。

だってあれは機械で制御されてるもん。

でもバンジージャンプはさ、僕の体を守ってくれているのはひもだけだろ？

ひもだけだろ？

なぜ緊急事態でもないのに命綱一本で飛び降りなきやいけないのさ。あんなものプツンっていったらあとは自由落下だぞ。

「お兄ちゃん寝てる？」

僕は我に返り恐る恐るひなたに聞き返す。

「ひなた・・・どれに乗りたいて？」

「ん」

もう一度同じところを指差した。

「くっ・・・」

どうやら腹をくくらねばならぬらしい。

くそっ、バンジーがなんだ。

あんなものちよっと体にひもを巻きつけてぴょんって飛ぶだけじゃないか。

万が一・・・万が一ひもが切れたってその後どうにかすればいいだけじゃないか。

どうにか・・・どうにか・・・。

とにかく僕は打たれ強さには自信があるぞ（2回目）

土下座してでも勘弁してもらいたいが、ここは意を決して震えてうまく動かない足を前へ踏み出す。

「それじゃ、い、行こうか」

「どうしたの？」

歩き出そうとする僕に反して、ひなたは僕の顔を見つめたままその場を動かさずじまい。

「何でもないよひなた」

「怖いのか？」

「くっ……ひなた、バンジージャンプだけはやめにしない？うまく言えないんだけど、ひもってやつがさ。いや、別に高いところが怖いって言うんじゃないよ？ひもがさあ」

「いいよ」

「え？いいの？」

ひなたの返事が余りにあっさりとしていたので、逆にこちらが呆気にとられてしまった。

「ん、いいよ。お兄ちゃん怖いでしょ？」

真っ直ぐな目で僕を見つめてくるひなたに強がりなしの返事をする。

「うん、実はすごい怖い。もう何でも言う事聞くから勘弁して欲しい」

「じゃあやめる」

ひなたはまた僕の頭をなでた。

「でもひなたは乗りたいんだろ？」

僕だって一応大人だ。ひなたがどうしても乗りたいって言うなら自分を押し殺してでもあのひもに身を任すくらいの覚悟はあるぞ。

いざとなったら意識を飛ばしてから飛んでやるぞ。

「お兄ちゃんが嫌なら私も嫌」

「ひなた……」

泣きそうさ。

なんていい子なんだひなた。

決めたぞ、僕は絶対にひなたをあんな鬼のような姉さんにはさせないぞ。

このまま心清らかに育ってくれ。

「あれに乗る」

ひなたは目頭を熱くした僕の手を引きながら走った。

「お馬」

ひなたが僕の手を引いて連れてきたのはメリーゴーランドの前だった。

軽快なBGMをバックに颯爽と馬が駆け抜ける。

今も昔もちびっこに人気のあるアトラクションだ。

「これ、怖い？」

「うっん、全然」

気遣ってくれるひなたに僕はにっこりと微笑んだ。

ひなたは僕の顔を確認してからアトラクションの列に並んだ。

「これ」

子供たちがどんとどんと馬に乗る中、ひなたが希望したのは馬車を引く馬だった。

「乗せて」

手を広げてばんざいのポーズをとる。

僕はひなたの両脇を抱えて馬の背中に乗せてやった。

「ちゃんと落ちないようにその棒を掴んでるんだぞ」

そう言っつて僕はひなたの隣にいるもう一頭の馬車を引く馬に乗ろうとするが、

「お兄ちゃんは後ろ」

と後ろの馬車を指差した。

「僕は後ろなの？」

「ん」

「隣じゃ駄目なの？」

「ん」

大和は私について来いというひなたからのメッセージなのだろうか。軽く尻に敷かれている気分だ。

すでに姉さんの悪い影響が出てきているな……。

強く言われると逆らえなくなる性分の僕はとりあえず馬車に乗り込んだ。

すると後から入ってきた男の子が走ってきて、さっき僕が断られたひなたの隣の馬に乗った。

む、これはなんだか嫌な構図だな。

人の姪にちよっかいを出すか小僧。

「そこ駄目」

急にひなたが隣に座った男の子に無表情のまま声をあげる。

それを聞いた同じ年くらいの男の子は反論した。

「いいじゃんか」

「駄目」

「いいの！」

そのまま言い合いになり、周りにいた人たちがざわつき始める。

知らない人に話しかけるなんて、今までのひなたじゃ考えられないことだったので僕は口を開けたままぼかんとしてしまった。

おっと、呆然としてる場合じゃない、止めなきゃ。

「ひなた、どうしたんだ」

すると後ろから男の子のお母さんらしき人が慌てて駆けつける。

「もう駄目でしょ、ごめんねお嬢ちゃん」

「いやだ、ぼくこれにのりたい」

なおも抵抗を続ける男の子。

慌てて後ろの馬車から僕も飛び降りた。

「すみません」

「いえいえこちらこそ、ほらあっちの馬にしましょう」

「・・・いいだ」

男の子はひなたにベロを出して他の馬へと走っていった

「・・・」

ひなたは言い返すことなく、じっと前だけを見ていた。

「参加してみませんかー、参加者募集中でーす」

従業員の服を着た人たちが近くを通る人々に声をかけている。どうやらこの先で催し物をやっているようだ。

「ちよつと見てみる？」

「ん」

ひなたの了解も得て、行ってみることにする。

「んーつと、イベントがやっているのはお化け屋敷だね」

「お化け屋敷？」

ひなたは少し首をかしげた。

「こわーいお化けがいっぱい出てくるところだよ。ひなたは夜に一人でトイレに行けなくなっちゃうかもね」

「行く」

「あれ？」

怖がらせたつもりが、僕の手を引いてひなたはぐいぐいと進んでいく。

「あー、カップル限定の企画みたいだね」

「出る」

「いや、だからカップル限定だよ？」

言い終わる前にひなたは僕の手を離し、従業員の前まで歩いていった。

「出ます」

近くにいた少し歳のいった女の係員に声をかけた。

「ごめんね、これはカップル限定なのよ。お嬢ちゃんの年齢では少しはやいわね」

「います」

ひなたは振り返って僕を指差した。

係員がつられて僕の方を見る。

「あらあら、本当ね。じゃあこれを書いて持ってきてね」

「はい」

おお珍しい。ひなたがまた知らない人と話してる。

用紙とえんぴつを持って戻ってきたひなたを僕は暖かく迎えた。

開始時間が近づくと何組かのカップルがお化け屋敷の前に集まってきた。

「なんで君たちもいるのさ」

「このイベントあんまり人が集まらなかったらしいんです。それで給料払ってんだからこれくらいは出るって遊園地の人に言われて・

・

僕は硬く目をつむったひなたの耳を抑えながら岩雄くんの顔を物言いたげな目で見つめる。

カップル限定とうたっていたのに完全にサクラじゃないか。

「女王様は、着替えただね」

「流石にあの格好でウロウロしてたらまずいって言われてました」

「岩雄くんは着替えないんだ」

「ええ、なぜか僕のほうは何も言われませんでした・・・」

流石の岩雄くんでもおかしいと気がついたか。

「ということ、姪っこさんから手をどけても大丈夫ですよ」

「え・・・じゃあ何であの人はまだムチを持つてるの」

「あれなくなると頭の中ごちゃごちゃになって叫びだすらしいす・

・

・

「・・・ではお集まりの皆様、頑張ってください」

遊園地からの簡単な説明が終わった。

要するに悲鳴をあげてはいけないということらしい。

悲鳴の回数を競い、一番少なかったペアに商品が出る。

「ん

ひなたは商品である特大ウサギ人形を凝視している。

ウサギって嫌な思い出しが浮かんでこないからいらなただけだなあ・・・。

「それじゃあ大和さん、行ってくるっす」

くじ引きで一番手に決まった岩雄くんがスタートラインに立つ。

「大丈夫？隣の女・・・あー、ペアの方がすげー震えてるけど」
顔面蒼白。

スタートする前から尋常じゃない量の汗をひたいに滲ませている。

「い、行くわよ！」

パチンとお尻をムチで叩かれる岩雄くん。

「お猿さん」

「どうした、ひなた？」

「お尻真っ赤」

耳をひっぱられながら連れて行かれる岩雄くんの背中。

本当だ、今まで気づかなかったが全身タイツのお尻は赤く塗られていて、ちょこんとしっぱまでついている。

「お猿さんのお尻が赤いのはムチで叩かれたから？」

「ぐっ・・・あの二人やっぱり悪影響にしかないな」

「ぎゃー！」

奥から岩雄くんの叫び声が何度も聞こえてくる。

岩雄くんの叫び声の前に聞こえてくる女王様の悲鳴とムチの音と共に、お化け屋敷中に響き渡った。

3、五話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

3、五話目

お化け屋敷の入り口と出口が同じ場所になっていることがある。

それは入り口で順番を待っている客に、戻ってきた客の顔やリアクションを見せる事で期待や恐怖心をあおることが出来るからだ。

この遊園地も同じ手法を使っているようで、トップバッターの岩雄くんペアが入っていったところと同じ場所から戻ってきた。

「どうだった、中の様子は」

「怖かったす・・・」

言葉少なに語る岩雄くん。

「すごい叫び声だったね。後からいったペアも出発前からビビりまくってたよ」

「ほんとつすか、・・・少しは仕事が出来たみたいで嬉しいつす」
心にもない事を体をくの字に曲げながら言う岩雄くん。

腰が抜けるほど怖かったのかな。

「ところで大和さん、何で姪っ子さんに目隠しを？」

「いや、だつてさ・・・」

僕はいたたまれない気持ちになりながら、同情の視線を送る。

岩雄くんの体、というか茶色の全身タイツには無数のムチに叩かれたあとがあり、所々破れている。

顔はどちらが脅かす側か分からないほどに変形していて、とてもひなたに見せられる状態じゃない。

夜にトイレ行けなくなるどころか、トラウマになるわ。

「女王様の方はだいぶ血色のよい顔になって戻ってきたけど、何かあったの？」

「最初はお化けを見て悲鳴をあげながらムチを振ってたんですけどね、途中から・・・」

「あー、なるほど」

「興奮してどうでもよくなつたみたいです。最後のほうは目を血走

らせながらムチを振る様子を見て、機械仕掛けのお化け以外出てこなくなりましたよ」

お化けだつてムチで殴られたらひとたまりもないもんな。

南無アマイツ、おっとつい間違つてしまった南無阿弥陀仏。

「災難でしたよ……っ……っ」

岩雄くんは辛そうな声を漏らしながら顔をしかめる。

「……何でさつきから前かがみなの？」

答えによつてはドン引きするけどさ。

「それが最後に出てきた私服のお化けにお腹を思いつきり殴られたんですよ……っ……っ」

「私服？何それ」

「あの服どこかで見たような……」

それにしてもムチで叩かれても動じない岩雄くんがあそこまで痛がるってことはそうとうだな。

サクラの岩雄くんなら問題にならないけど、一般の客にやったら大問題だろうに。

「四番の方、入り口前に並んでいただけですかー」

従業員がメガホンで叫んでいた。

すっかり話し込んでしまつて自分たちの順番がくるまでがあつという間だった。

「あ、次僕たちだ。じゃあ行くね」

「はいっす。自分は医務室行つてきます……」

ヨロヨロと歩き出す。

僕は岩雄くんが見えなくなつてからひなたの目隠しをとり、列に並んだ。

「あら、さつきのお嬢ちゃん。大丈夫かなー？」

「ん」

受付をしていた女性が入り口で案内人も務めていた。

「ひなた本当に大丈夫？」

「ん」

どうやらそうとうに意思は固いらしい。

僕は苦笑いで案内人の女性を見る。

「では行きましょうか。ここから入ってもらって直進すると二手に分かれていきますんで、右に進んでください。分かった？右だよ、お嬢ちゃん。そうすれば後は一本道です。では頑張ってくださいね」
軽い激励を貰い、僕たちは前へ進んだ。

「よくできてるなー」

入っていきなり病院のロビーのような場所に出た。

(なるほどここを右ね)

突き当りまできて、わざとらしくひなたに聞く。

「あれ、どっちに進めばいいんだっけ？」

「右」

僕の手を握ったまま正解の方向へ引つ張ってくれる。

先頭を悠然と歩く姿に、ひなたはまだ微塵も恐怖を感じてはいないようだ。

重そうなスライド式のドアをひなたが開ける。

中は診察室のようになっでいて、いかにも何か仕掛けがありそうだ。何かくるぞと心に言い聞かせながら僕は仕掛けを待った。

ひなたがご丁寧なドアを最後まで閉めた瞬間、

「がー！」

と大声を上げなら白衣を着た血まみれの男が現れた。

「きゃわわわー！」

女性の悲鳴。身構えていた僕は男の襲撃には驚かなかったものの、女性の悲鳴に体がびくんとなくなってしまふ。

「がー！がー！」

「きゃー！きゃー！きゃー！」

なおも血まみれの男がひなたと僕めがけて近づいてくる。

「ひなた、やばいぞ！」

雰囲気盛り上げながらひなたの方を見る。

さつきから何も喋らないが、もしかして泣き出したか？

「・・・大丈夫？」

ひなたは血まみれの男の方を見上げながら言った。

その言葉に当の本人も固まる。

「血が出てる、痛い？」

まあ、確かに遺体だけだ。

ひなたはマイペースに続けた。

「しゅじゅちゅしちゅから出ちゃ駄目」

ひなたは男の手を引いて、奥のランプの灯った部屋に連れて行く。

「・・・ありがとう」

男は一度礼をして、部屋の奥へと消えていった。

「ひなた、さっきの人怖くなかった？」

「痛そうだった」

「そっか・・・」

ひなたの優しさの前では幽霊も形無しだな。

つとそんなことより、一つ確かめなければいけないことがあった。

僕は後ろのスライド式ドアを開く。

「キヤツ！」

ごろんと塊が転がってきた。

僕はその塊に見覚えがあり、正確に言えば昼頃に拉致されたばかりだ。

「かぐや、何やってんの？」

「へっ！？ああああ！」

慌ててドアの向こうに逃げようとするが、押す引くのドアだと勘違いしているかぐやは外に出ることができない。

何度かがちゃがちゃとやった後、諦めて振り返り、その場に正座した。

「じゅじゅじゅじゅめんなさい」

「いや、別に僕は謝ってもらいたいとかじゃなくてさ。何やってる

のか聞きたかっただけなんだけど」

「実は私、大和くんたちの後を追ってました……」

「へえ、そりゃなんで。風船代の取立て？」

「ちうち、違いますう！叫んだ回数を隠れてカウントするお仕事だったんです」

「なるほど、そういえばバイト中か」

ウサギの姿で引っぱられた記憶しかないから、かぐやがバイト中だっつてことを失念していた。

「見つからずに後ろからついて行かなきゃいけないんですけど……」

「見事僕らに見つかったって訳だ」

「……うつつ」

あれだけ叫べば誰でも気づくつての。

「私怖がりだから、いきなりお化けさんに出てこられたらもう」

「ひなたですら驚かなかった仕掛けに驚いて、バレちゃったんだ」

「返す言葉もございません……」

かぐやは深々と頭を下げた。

「それにしたつて何でこんなところのサポートしてんだ？ウサギの着ぐるみで風船配つてればよかったのに」

「だって、……大和くんはバイトに専念しろつて言われたから。

私頑張つて色んなお仕事を手伝おうつて思つて」

あー、さつさと逃げたくて言つた僕の言葉をそう解釈したのか。

「お兄ちゃん？」

ひなたが痺れを切らせて戻つてきた。

「あのあの、私のことは」

「分かつたよ。なんだか僕にも責任があるみたいだし。ひなた、あのお姉ちゃんはいないから。いいな？」

たぶんかぐやつて分かれればじゃれあいに行くんだろうが、この暗闇だ。

顔までは見えないだろう。

「ん」

「あ、ありがとうございます！」

ひなたが物分りのいい、空気の読める子でよかった。

「それでは・・・」

かぐやは僕の左手にしがみついた。

「何してんの？」

「一人は怖いんです・・・一緒に行っていいですか？」

「駄目に決まってるだろ！お前カウントするためにここにいるんだろ」

「だつてえ・・・」

それに色々とあたってるんだよ。

これ以上僕の心拍数をあげようとするな。

「ん」

その様子を見ていたひなたが僕の足にしがみついた。

「お、おいどうしたひなた。これじゃうまく歩けないよ」

「・・・」

「二人とも離れて」

「・・・」

なんだ、この状況。

怖い・・・お化け屋敷怖い・・・。

その後は、手術室ですっかり傷の癒えた白衣の男に出会ったり、三人で歩いてくる僕たちを見て混乱する死神にあたりと、かなり珍妙なお化け屋敷になった。

扉を開ければかぐやが悲鳴をあげ、ひなたが幽霊を心配する。

このパターンを何度も繰り返し、お化け屋敷も中盤に差し掛かる。

「だいぶ進んできたな。ちょうど、はあ、半分くらいかな」

すでにここに来るまでに僕は汗だくだ。

岩雄くんもかなりの災難だが、僕だって結構な災難を被ってると思っぞ。

歩みを進めると中庭をアレンジしたような場所に出る。

これ見よがしに中央には井戸が配置されている。

「ひっ」

かぐやの小声が漏れる。

カタカタカタ

井戸のふたが上下に揺れ始め、はずれたかと思うと中から人が現れた。

「うらめしやー」

「裏はお土産屋さんでしょ、姉さん」

「うお、大和何で分かった!？」

「分かるよそりゃ。何年姉さんの弟やってると思ってるんだよ」

僕は姉さんの額から幽霊がよくつけている三角巾のようなものをはぎとりながら言った。

「ちえっ、絶対に分らないと思ったんだけどなあ」

鏡を覗き込みながら自分のメイクを見直す姉さん。

「ていうか、その衣装どうしたのさ。姉さんの事だから雇われた訳じゃないんだろ」

「あの人から借りた」

後ろでは姉さんの私服を着てめそめそと泣いている女性がいた。

「化けて出られるよ」

「望むところだ」

姉さんはニヤリと笑った。

「望むところだじゃないんだよ、だいたいねえ」

そのとき、ひなたが僕のそでを引っ張った。

「ごめんひなた、ちょっと待って。姉さんはさあ」

それでもなお、僕のそでを引っ張り続ける。

「待て大和。ひなたどうした？」

「おしっ」

「えっ」

二人して会話も動きも止まってしまった。

「な、何で入る前に行かなかったの？」

「お兄ちゃん耳押さえてた」

「口は開けられたよね？」

「ん」

今気がついたみたいなき感じであなずくひなた。

「とにかくこうしてはられないな、大和外に出る道はどっちだ？」

「え、姉さん外への出方知らないの？」

「知るか。私は忍び込んだだけだからな」

やっぱりか。

「かぐや、どっち？」

「こっ、こっちです！」

急いでトイレに駆け込んだひなた。

間に合ったものの、結局僕たちは途中棄権という結果になった。

優勝したのはよく知らない派手な服を着たカップルだったらしい。

「いやー楽しかった楽しかった」

姉さんは遊園地の出口へ向かいながら伸びをする。

「僕はすっごく疲れた」

「ん」

抱っこしている僕をなでてくれるひなた。

「腹減った。さっさと帰って飯つくれよ、大和」

「はいはい、分かったよ」

夕日が沈んでいく。

太陽が消え、夜になる途中のほんのわずかな時間。

一日の終わりの物悲しさを一番感じる気がする。

出口を通り抜けようとした僕たちに従業員の男が話しかけてきた。

「今日の記念にお写真撮りますから、そこに並んでください」

インスタントカメラを片手に、笑顔で近づいてくる。

それは疑いようのない善意だった。

一瞬の出来事。

従業員はカメラを覗きこみ、何の気なしに僕の抱いているひなたに向けた。

「うつ・・・うつ・・・うああああああああ」

ひなたは大声を上げながら涙を流し始めた。

今まで、笑顔の一つも、恐怖の一つも表情に出さなかったひなたが人目をばからずに号泣している。

「馬鹿野郎!!」

姉さんの怒号が響く。

辺りの視線が僕たちを集まった。

姉さんは僕の腕からひなたを奪い取り、車に向けて歩き始める。

「あの・・・私何か失礼を・・・」

別にあなたは悪くない。

悪くないからこそ、今日一日を台無しにしたあなたが恨めしい。

「こちらこそ、すみません」

僕は走って姉さんたちの待つ車へと向かった。

3、五話目（後書き）

3話目終わり、4話に続く

4、一話目(前書き)

全部フィクションです 全部関係ありません

4、一話目

「おい、大和」

誰かが僕の体を揺する。

たぶんこの人は僕を起こそうとしているんだな、目を閉じたままそう思った。

人に起こされるなんて、小っ恥ずかしいやら懐かしいやら。

だんだんと覚醒に近づいた頭がもう少しこうしていたいと訴える。

「ちっ、起きやしねえな。こうなったら定番のあれで叩き起こしてやるか」

ん、何やらスリリングな言葉が聞こえたぞ？

僕の危険察知レーダーが警戒音を鳴らし続けている。

「おはよう、母さん」

「誰が母さんだボケー！寝ぼけてんじゃねー！」

目を開き、あくびをする暇すらなかった。

迫り来る鉄製の中華おたまとおっかない顔の姉さん。

一直線に向かってくるそれを僕は間一髪のところまで枕を盾にして防ぐ。

「そんな薄っぺらい盾なんて無駄だー！」

姉さんは勢いにのって、反対の手に持っていた通販で買ったばかりのフライパンを振りかぶる。アルミ製の軽くて熱がよく伝わるフライパン。価格4800円。

そりゃこんな急ごしらえの盾ではガードできないよ。だってあのフライパンは油汚れだってはじくもの。

いや、本当にすごいのはじくの。

とか考えている間もフライパンは僕の顔へ向けてぐんぐんとスピードを上げる。当たったらいくら僕でも死ぬから！なんで僕は朝っぱらから死にかけてんの！？

「おはよう、姉さん！」

言って、枕を防災頭巾のように被り、頭だけは守ろうとする。

「おつ、なんだ起きたか」

顔面に直撃まであと数センチのところまで静止する。

フライパンを止めた時の風圧で前髪があがり、おでこがあらわにされる。

「何で朝から弟の命を奪いに来てるのさ」

だいたい姉さんならそんな鈍器を使わなくても、素手で十分に僕を永遠の眠りにつかせる事はできるだろ。

「人聞きが悪いぞ。私はいつまでたっても起きてこない出来の悪い弟を起こしに来たんじゃないか」

姉さんはやれやれといった顔で僕を見た。

いつもその出来の悪い弟に起こされているのは誰だよ。

その人に同じ台詞を言っただりやらないね。

「その手に持った凶器は何さ」

「おたまとフライパン。ドラマで子供を起こす時に使ってたぞ」

「使用法が違いすぎるんだよ！おたまでフライパンを叩いて、音を出して起こすんだろ。何でそんなバイオレンスな勘違いしっちゃった！？」

とりあえず姉さんが持ったままだと、振り回して怪我をしそうなのでそこら辺に置いてもらった。

「まったく朝から姉さんは・・・あれ、なんだか」

僕は自分で肩をぐるぐると回しながら、体の異変に気がついた。

なんだか体が軽い。

昨日までの僕は姉さんのちよっかいにここまで騒ぐことはなかっただろう。

体が鉛のように重く、寝不足で頭もぼーっとしていた。

要するに騒ぐほどの元気がなかった。

「そりゃそうだろ、もう朝じゃないし」

「え！？」

慌てて時計を見てみると、短い方の針がちょうど真上を指していた

ところから右へと傾きつつあった。

どうりで体が軽いはずだ。僕は10時間近く眠っていたらしい。

「あれっ、だとしても姉さんが僕を起こしに来るなんておかしいぞ。いつもは僕が起こさなきゃ平気で夕方まで寝てるのに」

そしてそのまま夕食食べてまた寝ちやうような人だ。

「ああ、それな。ちよつとこれ見てみるよ」

姉さんは自分の目の下あたりを指差した。

「・・・なに？」

「よく見ろって」

姉さんは顔をぐつと近づける。

「・・・しわ？」

「お前の顔に刻んでやろうか」

「ひい」

指を広げたまま力をいれて間接をポキポキと鳴らす。

「ほら、よく見ろって。くまだよ、く・ま」

「姉さん顔に熊飼ってるの？やっぱり姉さんは化け物だ！」

「・・・」

「はい、ごめんなさい」

姉さんの顔をよく覗き込むと、うつすら目の下に黒い線が入っていた。

「気持ちよく眠ってたのに電話がいつまで経っても鳴り止まないから私が電話に出てやったんだぞ」

「え、そうなんだ。全然気がつかなかった。誰からだったの？」

「かぐや」

かぐやか、それなら姉さんが電話に出て正解だったかもしれない。

僕が相手だと声が小さくなって何言ってるか聞き取れないんだよな。

「六時だぞ？朝の六時！ひなただつてまだ起きてなかったぞ！」

いい年して娘と張り合うなよ・・・。

それが普通だから。

「えっ、ってことは姉さんは六時からずっと起きてるの？」

「そつだよ、馬鹿野郎」

確かに姉さんがいつもより若干げっそりしている気がする。

「僕も六時に起こしてくれればいいのに」

「ちっ、事情も知らないで好きな事いいやがって。大体お前が・・・まあいいさ。さっさと着替えて仕事部屋に來い」

姉さんは捨て台詞の様に言葉を投げつけ、部屋を立ち去ろうとした。

「うん、分かった。あ、ちょっと待って。これ」

「何だ？」

「熊が大好きなハチミツ味の飴」

少し私事を話そう。

ある本に載っている女の子が可愛い。

ネット上の片隅で発信された情報は瞬く間に広がっていった。

名前も知らぬ一人の少女。

その少女が、多くに知られた名前も知らぬ少女に変わるまで時間はたいしてかからなかった。

その美しさと、今時紙媒体という部分が人々の興味を引いた。

彼女は一体誰なんだと人々は情報を集め始める。

そこにあつた唯一の手がかり。

聞いたこともない名前の会社。YUカンパニー。

ある日から引つ切り無しに問い合わせの電話がかかりはじめた。

姉さんは問い合わせの電話やメールを受けるうちに、勝手にかぐやをYUカンパニー専属の女優にしまったのだ。

テレビや写真集、雑誌への露出をすべてなくし、YUカンパニーの絵本だけに出演すると公表した。

姉さんはいい金ずるを逃がすまいとしてやったことかもしれないが、それが功を奏し僕らの絵本は次第に注文が増えていった。

そして一通のメールが届く。

『私たちの会社から絵本を出さないか』

今となっては少なくなつた紙媒体で本を作っている大手会社からの

メールだった。

童話のタイトル以外の決定をYUカンパニーに一任するという姉さんの無茶苦茶な注文を飲み、出版へと踏み切った。

絵本はかぐや人気もあり大ヒット。

YUカンパニーには個人、企業問わず依頼が届くようになる。

おかげで忙しくなり休日にひなたと遊びにいける日は少なくなっただけ、まあ割りと毎日楽しくやっている。

ふう・・・危うく熊の姉さんにプーされるところだった。

急いで着替えて仕事部屋に来てみるとかぐやと姉さんがソファアに座って談笑していた。

しかしかぐやは僕の存在に気がつく、衣服の乱れを整えてコホンと咳き込んだ。

「今日のかぐやも仕事は入ってないでしょ」

「う、うん」

オロオロして僕の顔色をうかがう態度はいつも通り。

僕も特に気に留めることなく、会話を進める。

「じゃあ今日は何でいるのさ。姉さんが呼んだの？」

「いんや」

姉さんはかぐやのモモに頭をのせて寝転がった。

「あつ、あの・・・大和くんがご飯を食べに来てもいいって言ったから・・・」

「ああ、それで居たのか・・・え？」

「ええ?! わ、忘れちゃったんですか? 遊園地で、やつ約束しました!」

「あー、そう言えばそんな事も」

言ったような、言っていないような。

恐らく捏造はしてないだろうから、言ったんだろう。

「別に飯くらいなら全然いいけどさ。せつかくの休みなんだから無理して来なくてもよかつたんだぞ? かぐやも随分と休みないだろ」

主に僕らのせいだ。

「む、無理なんてしてません！」

かぐやは頬を染めながら、大きな声を出した。

「大和ー、めしまだかー」

腹を空かせた姉さんが手足を振って暴れる。

「少し待って」

「あの、お姉ちゃんの朝ごはん、冷蔵庫の中の物を勝手に使っちゃいました・・・」

申し訳なさそうに恐る恐る言うかぐや。

「かぐやの料理はなかなか美味しかったぞ。まー大和の方が美味しいけどな」

照れる事を言ってくれるじゃないか。

姉さんとはことん人に気を使わないから、こういう時に本心が聞ける。

そうか、かぐやより美味しかったか。そうか、そうか。

「じゃあ、先に洗濯機回してくるから少し待ってて」

「それならかぐやがやったぞ」

「そっか、ならひなたを送りに」

「何時だと思ってたんだよ。とっくにかぐやが連れてったぞ」

「掃除は」

「かぐやが隅々まで綺麗にした」

「そっか・・・」

たぶんここは『楽できる、ラッキー！』って喜ぶところなんだろうけど・・・。

毎日やらされていた事を急に奪われると、コロッケのない台風の日みたいな物足りなさがあるな。

「ご、ごめんなさい。なんだか私、勝手な事しちゃって」

「ああ、いいよ。勝手な事のベクトルがおかしい人よりかましさ」

「私の事言ってるか？」

「さあ」

僕はすつとぼけながら、パソコンの電源を押した。

「おお、そうだ。大和にこれを見といて欲しかったんだ」
姉さんは起き上がり、パソコンの前に移動する。

「んーっと、あったこれだ」

メールソフトを立ち上げ、受信ボックスの中を小まめにチェックし、一通のメールを開いた。

これも最近になって初めてできるようになった事の一つだ。

今までは迷惑メール以外のメールが一通も届かなかったからな。

「個人からのメールかー、珍しいなあ。やっぱりかぐや狙いみたいだね。・・・それで？」

「下を見てみる」

顎でさつさと下にスクロールさせると指示をする。

「ん？オリジナル脚本？どういうこと？」

「脚本は自分で書くってことだろ。たぶん監督も自分で用意するんじゃないか？」

「へえ、楽でいいじゃん・・・でもこれラブストーリーって書いてあるよ？」

「そうなんだよなー・・・でもな、これも見てみ」

姉さんはマウスを奪い取ると下へスクロールしていく。

「ん？すごい大金じゃないか！」

依頼料としては見た事もない数の0が並んでいる。

「だろ？欲しいものもあるしなあ・・・」

姉さんは珍しく真剣に悩んでいるような顔をする。

姉さんの欲しい物って何だろう。

カメラの機材？いや、ないな。

漫画や雑誌？この辺が妥当か。

大量の歯磨き粉・・・姉さんならありえなくもないから困る。

「でも流石にラブストーリーはなあ・・・」

「だよな、じゃあこれはなし。大和、メール消しといて」

「うん」

とは言ったもののこの金額には後ろ髪を引かれる。

このお金さえあれば、通販でエアインマックスも買える。いやいや、新車だつて買えるぞ！

画面の中の行列を成した0を見ながら、妄想に耽る。

「あのおー」

「何？かぐや」

「待ちきれずにお姉ちゃんがキッチンに向かいましたけど・・・」

「よし、私がチャーハンをご馳走してやろう」

姉さんが僕愛用のエプロンをつけて、腕まくりをしながらキッチンへ消えていく。

まずい、姉さんに火を使わせては駄目だ。

僕はキッチンに急行する。

「かぐや、絶対パソコンに触るんじゃないぞ」

「は、はい」

「・・・（そうだ、この机のお掃除はしてなかったっけ。大和くんが戻ってきた時、机が綺麗になってたら褒められちゃうかも・・・キャッ！）」

「フライパンは姉さんが僕の部屋に持ってっただろ」

カチカチ

びろりりん

部屋にフライパンを取りに行った帰り、仕事部屋を通りかかった僕は聞きなれた音を耳にした。

メールの送信音？

気になって部屋へ様子を見に入る。

「かぐや、何してるんだ？」

「お掃除です」

「パソコンには触るなって言っただろ」

ディスプレイには依頼受諾にチェックを入れ、返信済みとなってい

る先ほどのメールが映っていた。

「大和くんに言われた通り、パソコンに触ってないですよ……？」
やりやがったな、この機械オンチ……。

かぐやは首をかしげながら、マウスを丁寧にハンカチで拭いていた。

4、二話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません。

4、二話目

20メートル近くある高い天井。

無数に散りばめられた照明。

見るからに高級な音響機材。

そして僕らの現場では一度も目にする機会がなかった物。

一台数百万すると言われる撮影用のビデオカメラ。

「あのおう・・・大和くん、やっぱり怒ってます・・・よね」

「・・・」

かぐやが無理やり作った笑顔を消し、下を向いた。

僕はその横顔をちらっと見て、視線を渡されたばかりの台本へと落とす。

パソコン

「痛っ」

後ろから歩いてきた姉さんに丸めた台本で頭を叩かれた。

「かぐやにあたるな。すぐにメールを消さなかったお前も悪いだろ」

「そうだけど・・・」

僕は叩かれたところを摩りながら唇を尖らせた。

「で、どうだったの？交渉できた？」

「んー駄目だった。門前払い。送られてきたメールにも書かれてたことだし、受諾の返信をしちまった以上何も言えないな。うちの決定権はかぐやの演技についてぐらいなもんだ」

「そっか・・・」

ため息をつきながら肩を落とす。

「ごめんね、お姉ちゃん・・・」

目にいっぱい涙を溜めて、かぐやが姉さんに抱きついた。

姉さんも手を広げかぐやを受け入れてやり、頭を優しく撫でる。

「よしよし、泣くなかぐや。私に鼻水がつくから。おい、つくつく、つくつてば」

姉さんが強引にかぐやを引き剥がし、自腹で買った他所行きの服に鼻水がついていないか調べている。その時、つかつかと三人のスーツを着た男を引き連れた女性が僕の前にやってきた。

「本日はよろしくお願い致しますわ」
気さくに握手を求めてくる。

僕は面食らいながらも手を差し出した。

「あなたがYUカンパニーの代表者さんかしら？」

「いえ、あっちにいる女の人が・・・」

「そうだったの、では後ほど・・・ちょっと、あれを」

「はっ」

方向転換し姉さんの方へと歩みだす。

歩きながら後ろにいた三人の男の内、一人が胸元からウエットティッシュを取り出した。

そして握手した方の手を満遍なく綺麗に拭いている。

何だあの態度、むかつくな。

「あなたがYUカンパニーの代表者かしら？」

「ああ、そうだぞ。さっきこっちから会いに行ったんだがな」

「そうなの？知りませんでしたわ。それは本ツ当に申し訳ないことを、オーツホツホツホ」

とは言うものの頭を下げるつもりはないらしい。

高笑いを上げながら、手を差し出し握手を求める。

姉さんはその手を見て、

「やたらとキラキラしてるな」

指についた無数の宝石たちについて感想を述べた。

「そうかしら？これくらい女優なら普通ですわ」

指だけじゃない。体中、どこを見ても装飾品や宝石がピカピカとライトの光を反射する。

三十円のお菓子についてくるおまけのシールかっつてくらいに光っている。

「クリスマスツリーみたいだな。女優の中では流行ってんのか？」

「あら、あなたはもう少し輝きを取り入れた方がよくなってよ？」

まだ撮影が始まってすらいなというのに、不穏な空気が流れる。お互いがお互いを牽制し、今にもどちらからとは言わず手が出そうな雰囲気だ。

「やめとくよ。私にコスプレの趣味はない」

いや、あんた鬼とか幽霊とかすげーしてたぞ。

絶対姉さんの趣味だろ、あれ。

「ふふつ、見てくださいな。この指輪が200万円。こっちが300万円。この時計はオーダーメイドで600万円ですわ。そして・

」

「いいな、一つくれよ」

姉さんは一つうん百万もする宝石を子供がおねだりするみたいに軽く要求した。

「またまたご冗談がうまいのね、オーツホツホ」

指輪を見せびらかすように、口に手を当てながら笑う。

あまり姉さんを舐めるなよ？

姉さんの場合、全然冗談だと思っけてないから。

本気でそんなに沢山あるなら一つくらい貰えるんじゃないかと思っけて言ってるよ。

「だけど・・・私、くだらない冗談が嫌いなの」

いつきに場が張り詰める。

手で口は隠れているものの、見えている目が鋭く姉さんを睨みつけている。

僕が直接睨まれてる訳でもないのに、ゾクリと背筋が凍る。

「隣の扉に家が建った。イエーイ」

親指をぐつと上げて見せ付ける。

なんかおかしい。それだとなんかおかしいぞ、気づいて姉さん。

当の本人である姉さんは全くひるんではいなかった。

「・・・まあいいわ。それより先ほどの続きだけど、この靴が80万円、ネックレスが・・・」

「おばさん、後ろの人達はだれ？おばさんの彼氏？」

「このイヤリングも50万円、自宅は高級住宅地にある・・・」

「ねえねえ、後ろの人達いくらで雇われてんの？」

「来年には避暑地に別荘も・・・」

すごい光景だ。

相手の話を聞かない女二人が会話（？）をしている。

お互いがお互いの話を聞かないから、全く終わりどころが見えてこない。

これはある意味貴重だぞ。

延々続く自慢話に戸惑い顔の男達が、お墓をピラミッドにするという話が終わったところで声をかけた。

「・・・コホン。とりあえずよろしくお願い致しますわね」

咳払いの後、一瞬だけかぐやの方へ目をやった。

「・・・フンツ」

さっさとコーナーし、男を引き連れてスタジオの外へ戻っていった。

のっけから好感度がだだ下がりしているあのこそ、今回の依頼者件監督、そして主演でもある古井沢沙麻子だ。我が国の三大女優の一角で、主にドラマや映画なんかで活躍している。しかし最近では年齢の若いアイドルや、演技よりバラエティで笑いの取れる女優の方に人気が集申し、テレビで見かける日も少なくなった。

とは言ってもテレビをあまり見ない僕や姉さんでも知ってたくらいだから知名度はかなりのもの。ついでに言えば稼ぎもすごいらしい。ブルジョアは違うなー、と思いつつコンビニのおにぎりをほお張っている、姉さんが近づいてきた。

「わりい、最後の方あいつの言ってること全然耳に入ってこなかった。何か重要なこと言ってたか？」

ほんと便利な耳だよ。聞きたくない音は入ってこないようにフィルターがあるんだもん。

よく僕の声がそれに引っかかるから壊れてるのかと思ったけど、そ

うじゃなかつたみたいだね。

「何一つ、重要な事は言つてなかつたよ」

姉さんと古井沢の冷戦以来、いつまで経っても何の音沙汰もないので僕は暇を持て余していた。

僕らが撮影する時はだいたい姉さんの気分しだいで早くもなるし、遅くもなる。

それは僕らの撮影が少人数だからであつて、今は何十人も人が動いているという違いがあるからだろう。

僕は紙コップに本日三杯目のコーヒーを注ぎ、パイプ椅子へ腰を下ろしてから口をつけた。

(物が多いなあ)

山とつまれたダンボールや、何が入っているか見当もつかない木箱があちらこちらに。

僕は辺りをゆっくりと見回した。

するとその木箱の陰から頭が一つ、ピョコつと現れた。

何だろう。大きさからすると子供・・・かな？

注意深く観察していると、その頭の横からもう一つ、小さな頭が現れた。

分身した!?

「「ばー!」「」

「うわあ!」

驚いてパイプ椅子からころげ落ちてしまった。

「あはははは、兄ちゃんどんくさーい!」

「あはははは、どんくさーい!」

物陰から急に飛び出してきた、ひなたぐらいの年齢の女の子二人に馬鹿にされる。

「何するんだよ!」

「わっ、もしかして怒つたっばい?」

「怒つたっばい!」

二人は顔を真つ赤にして怒る僕の周りをぐるぐると回り始める。そして急に止まり、目の前に二人が並んで言った。

「どっちが英子で」

「どっちが雄太だ？」

二人ともニコニコと嬉しそうに僕の回答を待つ。

いきなり体の周りを走り回られ動揺していたが、なんとか自分を取り戻す。

英子・・・雄太・・・あれ？

僕はまだ気がついていない二人に至極当然な質問をした。

「僕はまだ誰が英子で誰が雄太かも知らないよ」

二人はポカーンと口を開けて、お互いを見合った後、

「あれ、そうだったけー？」

「そうだったー！」

二人で楽しそうに笑った。

「私が英子だよ」

「僕が雄太だよ」

「よろしくね、兄ちゃん」

一斉に手を差し出した。

「あれ、男の子だったの!？」

「そうだよ。こっちが男で、そっちが女」

身長や顔の造り、パツと見では違いが分からない。

髪型も同じショートヘアで、声の高さまで一緒の瓜二つだ。

そして一番驚いたのが、一人は男の子だったという事実。

こればかりはどうにも信じる事ができないほど二人はそっくりだった。

「証拠見せてあげるー！」

雄太が急にカチャカチャとベルトをいじり始めた。

僕は慌ててそれを止める。

「いや、見ない見ない。二人を信じるよ」

「そー？」

「でも何で双子がこんなところに・・・」

「何言ってるの？英子達この話に出るよ！」

英子が僕の手にある台本を指差した。

「ここ」

奪い取った台本をぺらぺらとめくり、出演者のページを開けた。

本当だ・・・ちゃんと二人の名前が載ってる。

「兄ちゃんも出るのー？」

「出ないー？」

二人はそれぞれ違う方向に首をかしげた。

あまりに似ているので鏡に映った虚像ではないかと疑いたくなってしまう。

「僕が出ないんだよ」

「じゃあ兄ちゃんは何でいるの？」

「えっとそれはね」

「不審者？」

「不審者！」

「不審者がいまーす！」

「違う、違うよ！」

不審者としてガードマンに連れられスタジオから締め出されそうになっただけのところ、姉さんが駆けつけ説明しなんとか事なきを得た。

ようやくその場にいる演者やスタッフ全員が集まり、監督から説明があった。

「自己紹介なんて必要ないでしょうけど、私が監督で主演の古井沢沙麻子よ。どうぞよろしく」

どこからともなく大きな拍手が起こる。

「それでいきなりなんだけど、良くないニュースです。私の相手役を勤めるはずだった俳優さんが事故で到着がかなり遅れるそうです。周りの人がわかにはわつき始める。」

「はいはいはいー！」

「ここでも空気の読めない姉さんは現場のシリアスなムードも気にせず、元氣よく手を挙げた。」

「何かしら、YUカンパニーさん」

「私がいい俳優を知ってるんだ。使ってみないか？」

「あら、一体誰の事かしら」

「こいつ」

姉さんは僕の手を掴み、持ち上げた。

僕は反対の手で自分自身を指差す。

ワントンポ遅れてようやく姉さんの言っている意味を理解した。

「僕!？」

4、三話目（前書き）

全部フィクション 全部関係ないです

4、三話目

「無理無理無理。何言ってるのさ姉さん、冗談を言う時は場所を考えてよ」

「謙遜するなよ。うちの会社のトップ俳優じゃないか」

姉さんはヘラヘラと笑いながら、僕の両肩を掴んだ。

「僕は俳優でもなければ、そもそもYUカンパニーには専属の俳優なんていないだろ」

「いるだろ、猿っぱいのが。あいつは私が言えば何処にでも来るぞ。まあ確かに俳優って言うよりペットに近いけどな」

本人が不在でも容赦なく蹴散らす姉さん。

運命的な出会いと言うべきか。あるいは因果応報と言うべきだろうか。

岩雄くんはバイト先の遊園地で出会った女王様とカップルになったらしい。

付き合いはじめるきっかけはお化け屋敷でのイベントだったらしい。曰く、私のムチにここまで耐えた男は今まで一人もいなかった。二人は運命の赤いムチで結ばれているんだそうだ。

岩雄くんの方の理由は・・・下衆すぎて覚えていない。

と、まあ晴れて彼女持ちになった岩雄くんだが、何故かいまだに姉さんと絶対の服従関係にある。

最近では姉さんからの連絡用の携帯電話を買ったらしいが、女王様にはバレないようにしているらしい。浮気は即、死だそうだ。

それを知ったら姉さんは喜んでバラすぞ、気をつける岩雄くん。いや、ていうか今はそれどころではない。

人の心配より自分の心配をしなければ。

「無理に決まっていますよね、古井沢さん」

「え？あー、えっと・・・そうねえ・・・」

台本を開いて台詞をチェックしながらうーんと考え込む。

すると、どこからともなくひそひそと話し声が聞こえてくる。

「あれ誰よ?」「いやー、見たことないなあ」
そりゃそうだ。

こんなキングオブ一般人を連れ出して俳優の代わりをやらなんて無茶にも程があるよ。

こちらとらさつきまで不審者として追い出されそうになってた程の一般人面だぞ?

ちゃんちゃらおかしくて、へそをオール電化にしてそれから茶を沸かしてやるっつーの。

そこにいた全員が困惑する中、ずっと唸っていた古井沢が口を開く。

「あなた・・・何かメディアに出たことがあるのかしら?」

「えっと・・・絵本に少しだけ・・・」

「絵本だけですって?」

古井沢が素っ頓狂な声を出した。

やがて周りからも嘲笑するような声が聞こえてくる。

「絵本だって・・・ははっ」「クスクス」「どうやって絵本に人間が出るんだよ」

笑われて当然だよ・・・。

僕は口を一文字に結んだまま、思わず下を向いた。

「いいじゃねえか、絵本」

その時、隣にいた姉さんが笑い声をかき消すように声を上げた。

「同じ、人が作った物だろ。それに上も下もない、何がおかしいんだよ」

真剣な顔で言い放った。

スタジオ内が一気に静まり返る。

あの古井沢すら、苦虫を噛み潰したような顔で口を閉じた。

誰もが周りを眺め、声を出すタイミングを伺う中、最初に喋りだしたのは意外にもかぐやだった。

「で、でも大和くんは・・・元々この仕事に反対だったし・・・その・・・」

必死に僕を庇おうとするかぐや。

今だけはお前が僕を助けに来た天使に見えるぞ。

「そ、それに大和くんはかつこいいから人気が出たらどうしよう・

」

あさつての方向へ向かう天使。何処へ行く、僕はここだぞ！

その様子を見ていた古井沢がパタンと台本を閉じた。

「ふーん・・・なるほど、いいわ。その子を代役に立てましょう」

「「えー！」」

僕の声とかぐやの声が重なった。

「私も兄ちゃんていいと思いまーす」

少し遠巻きで様子を見ていた英子と雄太が手を上げて賛成した。

「え、本気ですか？古井沢さん」

後ろにいた男の一人が異議を唱え、止めに入るが、

「ええ、本気よ」

古井沢はこれを一蹴した。

「しっ、しかし・・・」

「私の決定に何か文句でもあるの？」

「うっ・・・ごさいません」

男は渋々と引き下がった。

「じゃあ、あなた。早く着替えてきてちょうだい」

「やったな、大和」

「そんな・・・」

呆然と立ち尽くす僕は姉さんに背中を押されながら衣装部屋へと向かった。

「あー、もう駄目だ。吐きそう・・・」

僕は着替えている途中も何度かトイレに駆け込んだ。

緊張と吐き気で自分が地面に立っているのかすら分からなくなる。

「今更何言っただよ、何事も経験だ。頑張れよ！」

ネクタイを締めてくれた姉さんが送り出す時に一回、背中を強くは

たいた。

「他人事だと思つて・・・」

「そんな事ないつて。見るよ、私も震えてるだろ？」

「・・・あ、本当だ」

姉さんの足が小刻みに震えていた。

そうか、姉さんなりに僕と同じ気持ちになつてくれてるのか・・・。姉さんは鬼だ、熊だと罵っていたがやっぱり姉さんも人の姉だったんだなあ。

「あ、違う。私の携帯が震えてるんだ。んー、もしもーし」

姉さんは僕を一人残し、通話しながら控え室から出て行つた。

時間が来て、スタジオに入った。

何人もの大人が忙しそうにそこら中を走り回っている。

皆、自分の役割を理解し、少しでもいいものを作ろうと必死になっている。

大きな影があつちに行つたり、こつちに行つたりする。

その中に二つの小さな影を見つけた。

「あつ、兄ちゃん」

「ああ、英子ちゃんと雄太くん。さつきはありがとうね」

素直に喜べないのが残念だが、一応お礼は言っておく。

「いいよ、だつて兄ちゃんにも一緒に出て欲しかったもんね？」

「欲しかった！」

二人は顔を見合わせて、僕の出演を歓迎してくれた。

それにしても一度二人から離れると判別がつかなくなるなんて、双子はなかなか厄介だな。

「えつと確か、君が・・・」

「私が英子」

「僕が雄太」

「二人合わせて英雄姉妹！」
エイユウキョウタイ

「何それ!？」

しっかりと決めポーズをとり、どうだと言わんばかりの顔をした。

「へっへー、かつこいいでしょ」

「うん、二人ともかつこよかったよ。自分たちで考えたの？」

「お母さんが二人で自己紹介する時は言いなさいって」

「へえ」

流石、我が子をこの歳から役者に育てようとする親は気合が違うな。

「そしてもう一つ。僕が雄太」

「私が英子」

「二人合わせて太子姉妹！そして私がタコ娘！」
タコキョウタイ

「・・・それもお母さんから教わったの？」

「うん」

いやあ、本当にすごいなあ。

「二人はどつちが上なの？」

「私がお姉ちゃんだよ」

えっへんと胸を張る英子。

「僕が弟！」

「へえ、うちと一緒だ」

「兄ちゃんの姉ちゃんって、さっき兄ちゃんの隣にいたボインの人？」

「う、うん・・・そうだよ（ボイン？）」

「似てない！」

二人の声が揃った。

「よく言われるよ」

「リハーサルはじめます」

スタッフの声がかかった。

「頑張つてね！」

セットの中に入っていく僕を二人は手を振って送り出してくれた。

スタジオ内が一斉に静まる。

作業をしていたスタッフ全員がセツトの中に注目し、集中する。

注目の集まる一点にいるのが僕たち。

演じる役は名家の夫婦。

僕が夫で、かぐやが妻。

「じゃあ撮るわよ。3・2・1・・・」

『あなあなあなああなた、おおおおおかえりなささい』

『ただいま』

「はい、カットー」

カチンコの透き通った音が響く。

「駄目駄目、えっと、君は・・・確か大和くんだったわね。声が上

擦ってるわ。それに早口。あんな演技素人でもできるわよ」

いや、だから僕は素人なんだってば。

「・・・かぐやさん、あなたは・・・」

古井沢は一瞬だけ間を置き、

「最低よ」

かぐやの心を粉碎した。

「仮にも女優を名乗るなら、どんな時でも毅然としなさい。それが

できないのなら帰りなさい。所詮あなたもそこらの若いからってチ

ヤホヤされている小娘と同じだったという事。光る物のない女優は

何も掴む事はできないわ。お金も地位も、そして男も。あなたの好

きな男はやがてあなたの前から消えるわ、絶対に」

「何もそこまで、かぐやだって・・・」

「あなたは黙っていなさい」

僕の反論は即座にはねつけられてしまった。

かぐやの体が震える。

目は泳ぎ、まさにパニック状態。

これだけ大勢の前で滅茶苦茶に怒られたんだ、普通の精神状態でい

るって方が難しい注文だ。

こんな状態ではもう一度やるなんて不可能。

しかし古井沢はそんなのおかまいなしで、もう一度はじめようとする

る。

「もう一度行くわよ。3・2・・・ちよつと待つてそのあなた何事だと、僕とかぐやも古井沢の視線の先を見た。

そこにいたのは使用人の服を着たまま床に寝そべりポテチをばりばりと食べている姉さんだった。

「え、何？」

「何じゃないわよ。YUカンパニーさん、何故あなたがそんなところにいるんですか」

「使用人の役だが？」

「あなたに役は与えてないでしょ。それにその手に持っているものは何ですか？」

「ポテトチップスだが？」

「それは知ってるわよ！」

「・・・ジャガイモをスライスして油で」

「造り方も知ってるわよ！」

「じゃあ、何だよ」

すごい剣幕で怒る古井沢と、後ろから他の味のポテトチップスを取り出してまたバリバリと口に放り込む姉さん。

まさに暖簾に腕押し。

隣でその様子を見ていたかぐやが口を押さえながら笑っていた。

・・・僕も何だかりラックスしてきた。

「すいあせん（すいません）、遅れたっす」

「きみは・・・岩雄くん？」

「あ、どうも。大和さん」

汗だくでスタジオに飛び込んでくるなりステージの上に乗り込んできた岩雄くん。

「どうしたの？」

「ええ、梅さんに呼ばれたんで、すつとんできましたよ」

「そうなんだ、それで何の役なの？」

「えつと・・・」

岩雄くんは一時休戦した姉さんの方を見つめた。

「猿役」

「そんな役ないわよ！」

姉さんの返答に、また監督が吠えた。

「大和もかぐやも緊張しすぎだ、見る。私に大和にかぐやに岩雄。

いつもとそう変わらんだろ？」

姉さんはそう言い残して、すんなりステージの上から降りていった。その言葉で完全に肩の力の抜けた僕たちは、なんとかそのシーンを切り抜けた。

「次のシーンも僕の出番があるんだけど。ていうか僕の出番多くない？」

「そーかー？」

さつさと私服に着替えた姉さんが雑誌片手に気の抜けた返事をする。

「しかも次のシーン。あのおばさん演じる愛人とのキスシーンがあるんだよ。」

「え！？」

予想以上に大きな反応を見せたのがかぐやだった。

「えっと、あれあれそっか・・・」

台本を見直し、何度も何度も頷くかぐや。

「あー、ちよつとたんま」

姉さんが何かを察したのか、かぐやの肩を押して控え室へと連れていった。

そして戻ってくるなりまた同じところに座って雑誌を広げる。

「よし、問題なし」

「全く良くないし、問題大有りだよ。何一つ解決した問題がないよ」僕は姉さんの手にあつた雑誌を奪い取り、話を進める。

「んな、唇当てるわけないだろ？寸止めだよ。キスする前に本人に聞いてみるよ」

それ以上姉さんは取り合ってくれなくなつたので、僕は大人しく聞

くことにした。

「唇は当てませんよね？」

「ええ、当然よ」

よかった……。

「ところで、かぐやさんは今どこに？」

「控え室みたいですけど」

「そうなの……まあいいわ」

「それでは撮りまーす」

助監督がスタッフ、出演者一同に向けて叫ぶ。

古井沢が演じている間は助監督がメガホンを取っている。

「3・2・1」

『……………』

『……………』

台詞も順調にこなし、ついにキスのシーン。

僕は古井沢の肩をしっかりと掴んだ。

近づく顔と顔。

間近に寄って始めて気がついたが、すごい香水の匂いだ。

僕は息を止めて目をつむり、唇と唇が当たるギリギリのところまで

近づけた。

すると止めたはずの唇が、相手の唇とぶつかる。

僕が止めた後も、古井沢の方から僕の方へ近づけたようだ。

「……………」

「はい、オツケーです」

助監督の声に、慌てて唇をはずす。

「何するんですか！」

「ふふ、ごめんなさいね。事故よ、事故。もしかしてファーストキ

スだったかしら？残念ね、かぐやさんに初めてをあげられなくて、

オーツホツホツホ」

何故そこでかぐやが出てくる。

満足げに下がっていく古井沢。

「姉さん、僕は汚されたよ……」

「何を今更キスくらいで……。大和はキスなんて何回かしたことあるだろ」

「え!?!」

僕も知らない事実には驚きを隠せない。

「一体僕は誰とキスしたの?」

「確か最初は……。牛? その次は馬だったな」

姉さんは一つずつ指を折りながら数える。

「極めつけはサンショウウオだな」

「そんなものとキスした覚えないんだけど!」

その時、サンショウウオという単語によって見たこともない記憶が甦ってくる。

これは……。消したはずの記憶……。

「それ以上はやめとけ、死にたくなるぞ」

「もうさっきので十分死にたくなつたよ」

頭の片隅に何かモヤモヤとするものがあつた。

もう少しで思い出せそうで思い出せない。

「何で僕は牛なんかと……。あれ、その前に何かとキスしてたよう
な……。姉さん覚えてない?」

「……。さあな」

4、四話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

4、四話目

『……………』

「はい、カットー。オッケーです」

助監督が舞台の上にいる僕たちに向かって叫んだ。

「今の演技、なかなか良かったわよ」

舞台を降りようとしていた僕は、追いかけるように走ってきた古井沢に褒められた。

古井沢はそのまま助監督や各役割の責任者達にまざって映像のチェックを始める。

「おう、お疲れ。かぐやという妻がありながら、愛人に双子を生ませるとは、私の弟はやるなー」

「それは断じて僕じゃない。僕の役の話だろ」

撮影中も助監督の横という一番目立つ位置をキープしていた姉さんを軽くあしらう。

姉さんの方に顔が向くたびいちいち手を振るので気になってしょうがなかった。

「兄ちゃんやるねー！」

「兄ちゃんやるー！」

さっきまで同じシーンを撮影していた英子と雄太が姉さんを真似しながら近づいてきた。

「やったね、大和。家族が増えるよ。おー姪っ子たちよ、知らない間にこんなに大きくなって」

二人の頭をよしよしと撫でる姉さん。

そりゃ知らないだろうさ。僕だって知らないもの。

「やめてよ、梅おばさん」

「あん？」

体中に突き刺さるような視線を放つ姉さん。

目の下にはうつすらとクマが残っていた。

そこにふらふらと控え室からかぐやが戻ってきた。

「あっ、かぐやさんだ」

「かぐやさんだ!」

「ひえっ!?!えーっどどどどど」

人見知りのかぐやは戻ってくるなりいきなり双子に囲まれて、うろたえていた。

「英子です」

「雄太です」

「よろしくお願ひします」

「えと、こちらこそよろしくお願ひします」

子供相手でも深々とお辞儀をするかぐや。

きつと相手から見えない電話口でも喋りながら頭を下げるタイプだな。

「かぐやさんの載っている本読みました。私もかぐやさんみたいになりたいです。何をすればそんな表現力が身につくんですか?」

「えどどどど?えーっどどどどど自分では特にどどどどど!」

英子の質問に丁寧に答えていたかぐやの足元がぐらついた。

倒れそうになったかぐやの体を急いで姉さんが支える。

「キャツ、大丈夫ですか?かぐやさん」

姉さんはかぐやの額に手を当てる。

「んー熱はないな。もう少し向こうで休ませてくるわ、古井沢に言っどいて」

「うん、分かった」

「お体に気をつけてくださいね、かぐやさん」

英子を安心させようと作り笑いを浮かべながら、かぐやと姉さんが控え室へと消えていった。

「どどどどどというか、僕とかぐやじゃ態度がえらく違わない?」
さんとか付けちゃってさ。

かぐやの心配はしつつも、どうにも気になったので聞いてみる。

「もちろん!」

子供に笑顔で肯定された。

「子供でも分かるよ。かぐやさんは将来すごい女優さんになるって」「へえ、そうなんだ。僕にはよく分からないなあ」

「だから、今の内にパイプを作って、媚売つとかないと」

おおう・・・予想以上に黒かった。

大人よりもよっぽど世渡り上手だ・・・。

子役の世界でもやっぱり人脈が重要なのだろうか。

「僕だつて一応うちの会社じゃ助監督だし、副社長だよ？上から二番目だよ？」

「えーでも兄ちゃんはないー」

「ないー」

「何が？」

「「華」」

「そつか、難しい言葉知ってるんだね・・・」

撮影は大きな障害もなくスムーズに進んだ。

今日中に撮るべきシーンも残りわずか。

なんて言つたつて今回は三日間に渡つて撮影がある。

ロケ現場の天気や場所を考慮したゆつたりとした日程。

まあ、そもそも撮影つてのは普通ゆつたりと撮るものだ。

毎回カツカツで、一日で全部撮りきるなんて荒行をしている僕らつて・・・。

とは言つても今回も僕らはひなたの待つ家に日帰りで、また明日早朝に戻つてくるつていう感じだ。

「かぐや、大丈夫か？」

姉さんが心配そうに声をかけた。

セットへ向かうかぐやが見るからに疲れた表情を浮かべている。

「大丈夫だよ・・・」

誰が見ても無理をしているのが分かるかぐやは、台本を持ったままセットに入ろうとしてスタッフに止められた。

「駄目そうだね」

「そうだな」

演技が終わり映像チェックに入る。

姉さんは古井沢のところへ近寄っていった。

「おい、今の演技は駄目だ。かぐやもきつそうだし、後日撮り直してくれ」

「駄目よ」

古井沢が冷たく言い放った。

怪訝な顔を浮かべた後、古井沢に食い下がる。

「おい、かぐやのシーンについてはこっちにも決める権利があるんだぞ？」

「ええ、でも最終的に決めるのは監督の私よ」

「はあ？何言ってるんだ」

「すみませんが」

姉さんが声をとがらせながら言い寄ろうとするのを、スーツの男が止めた。

「ちっ……」

それ以上ごねる事なく舌打ちをして戻ってきた。

「姉さん……なんで殴り飛ばさなかったの？」

「今のは前金の分だ」

僕の知らないところで前金なんて貰っていたか。姉さんもちゃっかりしてるなあ。

「まずいな、あんなもの流されたらかぐやの株が下がっちゃう」

「かぐやにとっても初めての映像作品だしね」

静止画の写真と違って、映像だとどうしたってボロは出てしまう。

それが役者としての初々しさによるボロならまだしも、こんな疲れきった表情ではファンだつて納得しない。かぐやの女優としての価値、ひいてはYUカンパニーの信用に直結する事だ。

「もしかしてYUカンパニーが選ばれた理由って……」

姉さんは難しい顔をしながら小声で呟いた。

「兄ちゃんお腹すいたー」
自分の撮影を終えた雄太がYUカンパニーにあてがわれた控え室に遊びに来ていた。

「雄太、静かにしなきゃ駄目だよ」

ソファの上で寝息をたてているかぐやを気遣い、英子が注意する。
くー

その英子のお腹から可愛い音が鳴った。

「あはははははは」

大笑いする雄太と顔を真つ赤にする英子。

「私も腹が減ったぞー。弁当をよこせー！」

姉さんがポテトチップスを片手に食料を要求する。

しつかりと手に持つてるじゃないか。なんだったら備え付けの歯磨き粉取ってくるぞ？

「子供の前で一人でお菓子食べてちゃ駄目だよ。分けてあげなよ」

「お菓子は食べちゃいけないんだ」

雄太が残念そうに言った。

そっか、そう言う事にも厳しい家庭なのか。

「あー、腹減った」

なおも姉さんはポリポリとお菓子をつまみ続ける。

ガチャリ

鍵のかかかっていないドアを開け、入ってきたのは古井沢だった。

「大和くん、出番よ」

「あ、分かりました」

急いで衣装を整えて出て行くこととする。

「そうだ、英子ちゃんと雄太くんにお弁当を貰ってもいいですか？
お腹すかせてるみたいなんで。姉さんのはいりません」

「おい、そりゃないぞ！」

「駄目よ」

またも古井沢は要望を跳ね除けた。

「大女優の私がまだ演技をしているのに食事をするなんて考えられないわ」

「何だと？」

姉さんが喧嘩腰に噛み付いていく。

「姉さん、前金……」

「ぐっ……。猿、これで何か買って来い」

姉さんはポケットからお札を取り出して、岩雄くんに渡した。ていうか岩雄くんまだいたんだ。

「は、はいつす」

急いで部屋を出て行く。

「文句はないよな？」

「……早く用意なさい」

古井沢はきびすを返し、スタジオへと向かった。

4、四話目（後書き）

読み直してません 変なところあったら教えて

4、五話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

4、五話目

冷たい。

辺りは暗い。真っ暗で冷たい。

何かの拍子に足を機材にひっかけてしまいかもしれない。

自分が歩いていく道すら見えないほど暗い。

熱い。

僕らの周りは明るい。眩しくて熱い。

人工的なライトの光が僕らの肌をちりちりと焼く。

自分が何処から照らされているのか分からないほど明るい。

明るい場所から一歩踏み出せば暗がりに出る。

暗いと明るい境界は一歩分ではない。

冷たいと熱いもまた然り。

熱心と冷酷の違いもまた然り。

「本当にもういいのか、かぐや」

ライトに照らされたかぐやの顔は真っ白だった。

真っ白な顔からうつすら汗をにじませ、時折辛そうに顔をしかめる。

「うん、眠ったら少し楽になったよ。それにこれが最後だし」

かぐやは無理やり笑顔を作ってみせた。

今日の撮影のラストシーン。

しかし本当はこのシーンの撮影は明日の予定だった。

古井沢が急遽、予定を繰り上げて今日撮影する事になったのだ。

明日もあるから無理はさせたくないという姉さんの言葉も届かず、

苦しそうなかぐやを起こしてセットへ連れてきた。

「ギリギリまで座つとけよ」

僕はセットの椅子を引き、かぐやを座らせた。

ほとんど崩れ落ちるような格好で椅子にへたり込む。

早く撮影を終わらせて休ませてやりたいが、言いだしっぺの古井沢がなかなか姿を現さない。

普段やらない貧乏ゆすりの音だけが無情にも響く。

「何故座っているのかしら？」

携帯電話を片手によくやく現れた古井沢。

「どこに行っていたんですか！」

「あなたには関係ないわ。さっ、撮りましょうか」

「くっ……」

古井沢は音響やカメラマンに指示を出しながら、膝ほどの高さしかない椅子にどっしりと座り込んだ。

かぐやは机に手をつきながら立ち上がるうとするが、途中で力が抜け床に倒れそうになる。

僕はなんとか抱きかかえ、床との衝突を避けた。

「何してるの、それでも女優なの？」

「はい……すみません」

容赦のない古井沢の声が飛んできた。

「大丈夫だから……」

そう言っ僕腕から離れようとするかぐやを僕は抱き寄せ、

「頑張ろう」

そう耳元で囁いてから離れた。

「いいわねーいくわよ、3.2.1」

「あなた、今日も何処かへ行かれるのですか？」

「ああ、少し出てくる……」

「夜は帰って来られますか？」

「……」

「どうしても行ってしまうのですか？」

「……」

「……私、やっとあなたの子供ができました」

そこがかぐやの瞳から一滴の涙が滑り落ちた。

その一滴を皮切りにボロボロと涙が輪郭を伝う。
わなわなと震え、かぐやは泣きながら笑った。

『それは・・・本当か？』

『・・・はい』

『・・・そうか・・・良かった・・・』

『・・・はい』

僕はかぐやの肩を掴み、抱き寄せた。

そしてそのまま二人で崩れ落ちるように、その場に座り込んだ。

「・・・」

なかなかカットという言葉が聞こえてこなかった。
なので僕は抱き合っただままの状態で待ち続ける。

「・・・はっ、カット！」

古井沢が思い出したように掛声を上げた。

「あんだ、早く鳴らしなさい」

古井沢に頭を叩かれ、口をあけたマヌケな顔でセットを眺めていた
助監督がカチンコを鳴らす。

その音でそこにいる全員が、芝居の世界から戻ってきた。

するとどこからともなく拍手が沸き、最後にはスタジオが割れんば
かりの拍手に包まれた。

その中から一人、拍手をしながら近づいてくる。

「かぐやまで孕ませるとは、このプレイボーイめ」

僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「断じて僕じゃないよ。僕の役の話でしょ」

「はいはい。かぐやも・・・あー」

姉さんがかぐやの方を見てやれやれと首を横に振りながら額に手を
置いた。

かぐやは僕の腕の中で完全に気絶していた。

「あれ、なんで?!もしかして絞め落としちゃった?」

だとすれば僕が悪いんじゃない。悪いのは唯一姉さんと同じこの遺

伝子だ！

「あー、違う違う。まあとどめを刺したのは大和だけだな」

姉さんはゆでだこのように真っ赤になったかぐやを軽々持ち上げ、控え室へと歩いていった。

「いやー、よかったですよ。さっきの演技」

所々で片づけをしている途中のスタッフに褒められた。

どう考えてもかぐやのオマケだが、快く受け取っておく事にする。

「次よ！」

片付けや帰り支度を始めていた全員が声の主の方に振り向いた。

「次のシーンを撮るわよ！」

古井沢は近くにあったパイプ椅子を蹴り飛ばした。

慌てた様子で助監督が声をかける。

「撮るつたつてもう片付けた機材もありますし・・・」

「今からでも準備しなさい」

「いや、しかし・・・」

「文句があるの？」

ギロリと睨まれる助監督。

「・・・いえ」

「おいおい、どうやって撮るんだよ？」

やはりこういう時に声をあげるのは姉さんだ。

「YUカンパニー・・・さっさとかぐやさんを連れてきてちょうだい」

助監督に向けていた視線をそのまま僕たちに向ける。

「お前、何焦ってたんだ。かぐやは病院だ」

「何ですって？」

「今、猿雄が車で連れていってる」

「くっ・・・」

歯軋りして悔しがる古井沢。

岩雄くんは結局最後までいたのか・・・。

「なら……」

苦し紛れに僕の方を見る古井沢だが、その視線の間に姉さんが割り込んだ。

「……邪魔する気？……この虫けらが……」

「あん？」

「いいわ、もうYUカンパニーさんは帰っていただいで結構。ちょっと、双子を呼びなさい」

後ろに控えていたスーツの男に命令する。

「はっ」

急いで控え室に走り、何も知らない英子と雄太を連れて戻ってきた。

「今から31ページのシーンを撮るわ。準備するからこっちにきなさい」

古井沢の手招きに雄太は笑顔で従い、近寄っていく。

すると突然、古井沢はポケットからナイフを取り出した。

全員が見つめる中、古井沢はナイフの切先を露わにする。

「小道具だよね……？」

「さあ……」

「本物よ」

古井沢の声は冷静だった。

「何馬鹿な事言ってるんだよ」

「馬鹿ですって？見てみなさいよ、31ページ。ほら、書いてあるでしょ？」妻に子供ができて縁を切られた愛人。男の名前から取った文字を持つ、双子の男の子の体をナイフで傷つける”って。よく読みなさいよ」

叫びながら手に持った台本を見せ付ける。

「役に入りすぎだ。自分で何やってるか分かってるか？」

「当たり前でしょ？」

場が静まり返る中、古井沢は続ける。

「芝居とはすなわちリアリティ。いかに本物であるかのように見せ

るかが命よ。私はずっとそれに心血を注いできた。その私から言わせればあんな小娘の芝居なんて、本物の芝居じゃないわ。あの子も所詮、そこらの才能のないアイドル連中と同じなのよ。絶対に私の演技が負けるはずないんだから。私があんな連中に……。今から私が本物の芝居を見せてあげる」

「なるほど、ようやく分かった。何故うちの会社に依頼がきたのか」「え……。どういう事なの？姉さん」

「最初はかぐやの人気にあやかろうとしてんだと思ってたが。お前、かぐやの事をあわよくば潰そうとしてただろ？」

「ふん、何故私がそんな事をしなければならぬの。私はあんな子の手の届かないところにいる存在よ？大女優なのよ？」

「どうだか」

「いちいち癪にさわる人ね……。まあいいわ。さあ、早く腕を出しなさい」

「いや！」

雄太が手を振り解こうと暴れるが、古井沢は手を離さない。

「お前がやろうとしていることは犯罪だぞ」

姉さんが低い声で威嚇した。

「違うわ。これは芸術を追求した結果なのよ。それにさつき双子の親に電話して許可は取ってるの」

「何だつて？」

「英子を次の映画に出して貰えるなら全然大丈夫です、だって。子役の親はたいいてい熱心になりすぎて周りが見えなくなるのよね」

古井沢は冷たく言い放った。

「お前もな」

姉さんの顔から悔しさがにじみ出ている。

僕だつてはらわたが煮えくり返る思いだ。

「お母さああああああん」

雄太が泣きながら呼ぶ。自分を売った親のことを。

「……。おい、私の名前を言ってみろ」

「はっ？何かしらYUカンパニーさん」

何を言っているんだという顔で姉さんを見る古井沢。

「私の名前を言ってみろオ！！！！！」

烈火のごとく激高した姉さんの叫び声。

ずいっと前に踏み出した。

あまりの迫力に古井沢もたじろぐ。

「私があなたの名なんて知るはずないじゃないの。えーっと……
台本をめくり、名前を探す古井沢。

「これね、YUカンパニー代表、えーっとこ……こ……湖蘭梅
？こらんうめ」

言ってしまった。

いや、言わせたのか。

「誰がご飯うめえだああああああああああ！！！」

直線状にいた人を吹き飛ばしながら古井沢に近寄っていく。

その姿はまさに獲物を見つけたときの熊！

「私に何かしたらどうなるか分かっているんでしょうね？私を誰だ
と思っっているの？大女優の沙麻子よ？私の女優力はごじゅう……」

ものすごい速度で突進した姉さんは雄太くんも吹き飛ばし、最後に
古井沢にソバットを叩き込み気絶させた。

大女優が最後に演じたのはお腹に蹴りを入れられ崩れ落ちる人のリ
アルな様子だった。

「君、梅の弟でしょ？」

通報でかけつけた警察官の一人が話しかけてきた。

「はい」

僕は見知らぬその男に返事をする。

「やっぱりだ。じいちゃんに聞いた通りだね。ふっつーの顔してるわ。あっはっはっは」

男は笑いながら指を刺した。

「あの、失礼ですが・・・」

「あー、ごめんごめん。君たちに一度、家を貸したことがあるんだけどな。豪華でやたらふすまが多い家」

「ふすま・・・あー、丘の上の・・・」

かぐやと始めて撮影した時の武家屋敷か。

「そうそう。あれ、俺のじいちゃんの家。じいちゃん帰って来たら猿が寝てたって驚いてたよ」

「すみません・・・」

岩雄くんのことだな。

「でも確かあの日は家に誰もいなかったよな・・・」

「ちなみにじいちゃんは金持ちだけど趣味でコンビニやってるんだよ」

「ああ・・・なるほど。あの時の・・・」

「あの辺、ど田舎でじいさんばあさんしか住んでないから若いカッブルなんて早々こないし、すぐ分かったってさ」

「おい、ちよつといいか」

姉さんが別の警察官との話を終え戻ってきた。

「ああ、今行くよ・・・、あいつもよくこういう事件に巻き込まれるなあ。あの時も偶然事件に巻き込まれてそれっきり。同期があんなに早くやめてくなんて思わなかったよ。じゃ、君にも後日話を聞くことになると思うから」

そう言っつて男は姉さんの方へ走っつていった。

「梅、災難だったな」

「まあな」

「しっかし、何で古井沢は愛人役なんだ？普通主役が妻たる」

「さあな、リアリティを追求したんじゃないか」

「で、何だよ。お前と違ってこっちは忙しいんだぞ？」

「双子の方はどうだった」

「あー、何だかなーって感じた」

「何だよ」

「んー、子役になるってすごく金かかるのな」

「は？」

「親は二人共働いてた。寝る間も惜しんで。それで最近では家にもあんまり帰ってなかったみたいだ」

「そうか・・・」

「金を稼ぐ方に熱心になりすぎて、子供達との関係が疎かになったんだな。子供にとっては残酷な話だよ」

「・・・」

この事件は良くも悪くもYUカンパニーをまた有名にした。相変わらず色んなところから依頼が来るものの、姉さんはそれを一切受けないでいた。

いつもの気まぐれなのか。それとも・・・

「大和、どこ行ってたんだよ。腹減ったぞ、何か作れー」

「姉さん、聞いて欲しいことがあるんだ」

「なんだ？結婚なら許さんぞ」

「・・・僕は、ひなたの出る絵本を撮るよ」

4、五話目（後書き）

4話目終わり、次のお話へ続く

r e a s o n w h y (前書き)

全部フィクションです 全部関係ありません

r e a s o n w h y

昔話をしよう。

と言っても童話のようにむかしむかしあるところになんて始まり方はしない。

昔のようでごく最近の話。

遠いようで身近な話。

姉さんとひなたの過去の話。

湖蘭梅。

自らの名前をこの上なく嫌う女。

学生時代、やんちゃだった姉さんはそこらの学生の中ではかなり名の知られた人物だった。

鬼神の梅。

並み居る猛者をなぎ倒すその残酷なまでの強さ。

戦場に立つ者から戦う気すら奪ってしまうその眼光。

返り血すら体の一部と言わしめるほどの気迫。

そんな姿を見て、敵味方問わず人は口々にこう言った。

美しい。

これが彼女が鬼神と呼ばれる由縁・・・だと良かったんだけどね。

強かったのは本当だよ。でもこれが元々の由来じゃないんだ。

正確には停学という名の自宅謹慎の梅から派生してそうならしい。

謹慎の梅 きんしんのうめ 鬼神の梅

いつでも姉さんの周りにはこんなやつらしかないのか・・・？

まあ喜んで呼んでいたのは周りだけで本人は己州の梅と呼ばれているみたいだと嫌がっていたっけ。

その頃の姉さんが唯一、人様に誇れた事。

姉さんの周りには常に人がたくさんいた。

先輩、同級生、後輩。

はたまた少し前までは敵だった人。

持ち前の親分肌というか、ただ面白おかしく神輿に乗せられていたというか。

姉さんが何気なくやっていた弱いものを助けるっていうのが、どうにも良かったらしい。

自分も弱いものだった過去がある、実に姉さんらしい行動が周りの評価を変えていった。

常に仲間からは信頼を置かれている人だった。

そんな姉さんが国家警察にリクルートされることになった。

まあそこまでには色々あったのだが・・・これはまた別のお話。

とは言ってもすんなり入れるはずもなく、例外なくテストはあった。もちろん勉強なんてこれっぽっちもしていなかった姉さんがクリアできるはずがない。

そこから一年、勉強の時間から睡眠時間まですべて管理され努力した結果、晴れて姉さんは国家警察官になった。

これは余談だが姉さんは警察官になるための任命式の時、当時の上官にフルネームで呼ばれて殴りかかり苦労して就いた職を初日で失うところだった。あの日は流石に呆れ果てたね。

新米警官が配属されたのは少し特殊な場所だった。

同じ部署なのに顔を見たことのない人だっていた。

することと言えば来る日も来る日も訓練と見回り。

それでも姉さんの周りにはまた部署の垣根を越えて人が集まり始めていた。

そんなある日、姉さんはいつもの見回り中に事件に遭遇する。

路地裏から何も身に着けていない少女が飛び出してきた。

髪はボサボサ、歯をガチガチと鳴らし足の裏を切ったのだろうか、地面には鮮血が点々と続いていた。

辺りをキヨロキヨロ見回し、髪を掻きながら悲鳴のような声をあげる。

姉さんは思った。

この子を助けなくてはいけない。

25番。

それが少女の当時の名前。

少女には過去も現在もない。

そして未来もない。

自分が何故ここにいるのか、どうしてこんな扱いを受けているのか。すでに少女には思い出せなくなっていた。

少女の周りには人がたくさんいた。

いや、人と言うにはおかしい気もする。

そこにいたのは少女と同じく、数字をあてがわれただけの物だった。

毎日毎日同じ事の繰り返し。

一日がいつ終わっていつ始まっているのか分からない。

感覚は消え、感情は溶けてしまった。

そんなある日、入ってきたばかりの12番が少女に話しを持ちかけた。

一緒に脱走しよう。

少女は12番が何故自分にそんな事を言ったのか不思議でしようがなかった。

気弱な自分にそんなことができるのか。

もしかしたら12番はおとりぐらいに考えていたのかもしれない。

そして時は来た。

12番の言った通り、ドアが開いたままになっていた。

まずは12番が外に出た。次に25番の少女。

二人は久しぶりに外の空気を吸った。

あつけないものですぐに少女たちの脱走劇は終幕へと近づく。

追っ手に見つかり二手に分かれて逃げていた少女は遠くで12番の叫び声を聞いた。

次は自分だ。

必死になって逃げた。途中踏んづけたガラスの破片で足の裏は切れている。

それでも彼女は痛みを感じなかった。

神でも悪魔でもいい。何なら鬼だっていい。誰でもいいから私を救って。

少女は助かるというやつと手に入れた希望を離さないようにしつかりと抱え込み、忘れかけていた恐怖という感情に震えながら足を前に進めることだけ考えた。

とある路地から飛び出るとそこにいたのは檻の中では見たことのない大人だった。

少女は思った。

私を助けてください。

「どうしたんだ、大丈夫か！」

私は生まれたままの姿で走ってきた少女に着ていた上着をかけ、抱き寄せた。

「1・・・2番・・・」

抵抗することなく、体を小刻みに震わせながら少女が来た方の道を指差す。

「なんだ、12番って。向こうに何かあるのか？」

ゆっくりと、しかし何度も頷く。

「ちっ、連絡はついたか？」

「今署にかけてるところだ」

偶然一緒にいた別の部署の男は険しい顔で電話口の反応を待っている。

私はいてもたつてもいられず、少女の髪を優しく撫でた。

「おい、いたか？」

すると路地の奥から知らない男の声と足音が近づいてきた。恐らく一人じゃない。数名いる。

「くそっ、顔や体に傷でもついててみる。俺たちが殺されちまうぞ」

「あー、もう。あと一人はどこいったっ！」

声と足音はどんどん大きくなる。

まずい、このままでは少女が男たちに見つかってしまふ。

「おい、梅。ここは応援が来るまで退くぞ」

「ああ、・・・この子を連れてここから離れてくれ」

「お前・・・どうする気だよ」

「私は大丈夫だ」

「いや、大丈夫とかそういう事じゃなくてだな・・・ちっ、分かったよ。そんな怖い顔すんな。無茶だけするなよ」

警官の服装をまとった男は少女を抱きかかえて、表通りの方へと走っていく。

ここでふうっと安心して一息でもつきたいところだがそうも言っていられない。

コツコツと革靴の音が路地の硬いアスファルトに反響する。
ブルブル

「はい、分かりました。・・・おい、一旦戻るぞ。捜索は中止だ」
その声を聞いて私は拳銃に添えていた手を離れた。

男たちの後を追いつ、何の変哲もないビルの前へと辿りついた。

その廃ビルは周りの廃ビルとほとんど差異はない。

あるとすれば、目の前に止められている黒塗りのベンツくらいだ。

足音一つが命取りになる。

私は細心の注意を払い、ビルの階段を登った。

ビル内は閑散としていた。

雑誌やゴミ、昔使われていた机や椅子がそこら中に散乱している。

そしてある階についたとき、私は違和感を感じた。

この階だけ廊下の窓が破られていない。

心なしか壁に手が加えられ厚いように感じる。

私は息を潜めながら廊下を奥へ奥へと歩み始めた。

光が漏れている部屋が二つあった。

一つからは男たちがひそひそと小声での会話が聞こえてくる。

そしてもう一つの部屋。

気になるのは蛍光灯の光とは別の、一瞬ぱつと明るくなるような光。それも先ほどから何度も何度も。

私は向こうの部屋にいる男たちに気づかれないようゆっくりとドアを開けた。

またも強烈な光に目がくらむ。

慌ててつむった目を慎重に開けた途端、私はその場で棒立ちになった。

思わず口をついて出た言葉、

「お前は一体、何をしているんだ・・・」

何も無い部屋の真ん中で裸のままステージの上に並べられた少女たち。そしてそれを嬉しそうに写真に撮る男。少女達の無表情とは対照的な下衆な笑みを浮かべる。

私はその顔を変形するほどに殴りたい衝動にかられたが、原因不明の震えが指一本動かす事を許さない。

男は私の存在に気がつき、声を上げた。

「な、なんだお前は！」

私の耳にはもう届かなかった。

姉さんは他所の部屋にいた男たちにあっけなく捕まった。

頭に銃をつきつけられ、殺される寸前だったところをギリギリ駆けつけた応援に助けられ、すぐさま病院に運ばれた。

応援が駆けつけた時には黒塗りのベンツの姿はなく、ビル内の男の数も減っていた。

姉さんの口封じにも失敗し、すでに周りを警官に包囲された男たち

はあろうつことか警官を巻き添えに自爆を図った。
ビルにあつた何もかもが吹き飛んだ。

犯人、あの部屋、顧客データの入ったパソコン。
檻にいれられたままの少女たち。

その後、姉さんは同じ病院に入っていたあの時の少女と再会する。
姉さんは当時使えたすべての力を使い、少女を養子として迎えた。
もちろん世間にはれるとまずい事もした。
だから姉さんはあつさりと警察をやめた。
晴れて無職となった姉さんは弟の僕も巻き込んで絵本会社を作った。
永久凍土の様な無表情を顔に貼り付けた少女を笑顔にするために。

これが僕らの episode 0

これが姉さんとひなたの昔話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8717y/>

smile

2011年12月29日06時51分発行